

秋田県生涯学習50年史



秋田県教育委員会

〈表紙写真〉挨拶する小畑勇二郎知事と昭和45年（1970年）から昭和55年（1980年）にかけての秋田県生涯学習黎明期の写真群。

〈裏表紙写真〉令和2年（2020年）11月13日開催の「秋田県生涯学習・社会教育研究大会〔記念大会〕」で挨拶する佐竹敬久知事と大会の様子。新型コロナウイルス感染症対策により、メイン会場と県内29か所のサテライト会場をオンラインで結び、ライブ配信する形で実施した。



▲ 昭和47年（1972年）11月11日
全県市町村生涯教育推進担当者会議（県正庁）



▲ 昭和48年（1973年）9月7日
生涯教育推進集会（山本町）

刊行に当たって

本冊子『秋田県生涯学習50年史』は、昭和45年から半世紀に及ぶ秋田県の生涯教育・生涯学習の足跡をふり返ることにより、今後の生涯学習の指針作成に資することを企図して刊行した。

本県における生涯教育・生涯学習の推進は、昭和45年（1970年）4月1日、県庁内に「生涯教育研究チーム」が編成され、プロジェクトの検討が始まったことを嚆矢とする。研究チームの発足は、小畑勇二郎知事の「本県を生涯教育の先進県にしたい」という強い意向があったことに由来する。昭和48年（1973年）9月、小畑知事は北海道北見市で開催された「第22回全国公民館大会」の記念講演において、次のように話している。

生涯教育に取り組みましてから、私は時々、自信を失ったような気持ちになることがあります。国でさえ手をつけかねていることを、東北の小さな県でやりぬくことは、^{かまきり}蟬螂が鎌を振り上げて、大八車に立ち向かうようなもので、たいへん大それたことではないかと思うことさえあります。

（小畑勇二郎『生涯教育の構想とその実践』秋田県生涯教育推進本部（1973年）
東北の小さな県に、日本全国が瞠目するような新しい教育的風土をつくる。

本県生涯教育・生涯学習半世紀の歴史は、小畑知事の情熱とビジョンに関係者、そして多くの県民が共鳴したことで動き始め、継承されてきた歴史といえる。

本冊子をお読みくださる各位におかれては、どうか各頁の一つひとつの事項の背後に、生涯教育・生涯学習に携わった多くの県民の姿があることを思い起こしていただければ幸いである。



▲ 昭和51年（1976年）10月14日
秋田県市町村生涯教育奨励員協議会結成大会（県正庁）



▲ 昭和55年（1980年）4月26日
秋田県生涯教育センター落成式典



あいさつ

秋田県教育委員会教育長 安田 浩 幸

令和2年度は、秋田県の生涯学習が推進されてから50周年という節目の年に当たります。また、秋田県生涯学習奨励員協議会の結成から45周年、秋田県生涯学習センターが開所してから40周年でもあります。去る11月13日には、佐竹知事の臨席のもと「秋田県生涯学習・社会教育研究大会『記念大会』」を開催し、メイン会場である秋田県生涯学習センターと県内29か所のサテライト会場をオンラインで結んで、同時配信いたしました。秋田県生涯学習50年の集大成となる催しを、全県の生涯学習に携わる方々の御尽力により開催できましたことに、深く感謝申し上げます。

本県の生涯学習は、昭和45年（1970年）、当時の小畑知事の提唱により始まりました。そして、昭和55年（1980年）には、全国で初となる生涯教育の専門機関である「秋田県生涯教育センター」が開所し軌道に乗ります。わずか10年で生涯教育の体制が整ったのは、小畑知事の強力なリーダーシップがあったことに加え、多くの県民がその呼び掛けに理解を示し、協力を惜しまなかったからに他なりません。

半世紀に及ぶ本県の生涯教育・生涯学習の歴史を概観すると、ふるさと秋田をより魅力あるものにするため、市町村や関係機関との連携を図りながら、県民への学習相談の実施や情報提供、そして広域的な学習事業である「放送県民大学」や「秋田県コミュニティ・カレッジ（現あきたスマートカレッジ）」の開講等、様々な取組が進められてきました。これまで築き上げられてきた本県の生涯学習が、今後も無限の可能性をもって、一步一步前進し続けることを期待します。

イギリスの数学者で、ノーベル文学賞受賞者のバートランド・ラッセル（1872年～1970年）は、「幸福な人とは、客観的な生き方をし、自由な愛情と広い興味をもっている人であり、十分な活力と熱意のある人は、不幸に見舞われるごとに、人生と世界に対する新しい興味を見いだすことによって、あらゆる不幸を乗り越えていくことだろう」（『ラッセル幸福論』岩波文庫・1991年）と語っています。ラッセルの言葉は、毎日の生活を自分の世界で完結するのではなく、外に向けて人や物に興味をもって生きていくことの大切さを教えています。

昨今、私たちの周囲には、人口減少問題や地域活力の減退、持続可能な社会の構築等の難問が立ちはだかるようになりました。しかしながら、これらを解決する糸口は、ラッセルの言葉にある「自由な愛情と広い興味」をもち、自らが学んだ成果をいかに行動に結び付けるかにかかっているのではないのでしょうか。人生100年という時代を生きる我々にとって、生涯学び続けることが、豊かで幸福な生き方につながるものと確信しています。

最後になりましたが、本冊子が今後の生涯学習推進の一助になることを祈念しつつ、あいさつとします。

令和3年3月

目 次

第 1 章 生涯教育・生涯学習50年のトピックス

01	プロローグ ー生涯教育論の誕生ー	6
02	秋田県生涯教育前史 ー地域での学びはどのように始まったのか？ー	8
03	小畑知事による「生涯教育」推進の背景	10
04	アイデアから制度へ	12
05	〈新資料〉小畑知事の生涯教育観	14
06	生涯教育推進パイロット市町村の指定	18
07	パイロット市町村の動き ー西目村『生涯学習情報 学習サロン』からー	20
08	県民への「生涯教育」の浸透と市町村の動き	22
09	学社研 ー太田町の生涯教育ー	24
10	キャッチフレーズとシンボルマークの制定	26
11	生涯教育奨励員の誕生	28
12	放送県民大学	30
13	秋田県生涯教育センター（現秋田県生涯学習センター）の開所	32
14	「秋田県コミュニティ・カレッジ」から「あきたスマートカレッジ」へ	36
15	生涯教育における企業内教育・職業教育	38
16	生涯教育から生涯学習へ	40
17	秋田県における生涯教育・生涯学習大会の変遷	42
18	社会の変化に対応する生涯学習	44
19	連携・協働の推進	46
20	秋田県生涯学習・社会教育研究大会「記念大会」	48
21	エピローグ ーそして未来へー	50

第 2 章 秋田県生涯教育・生涯学習50年のあゆみ

年 表

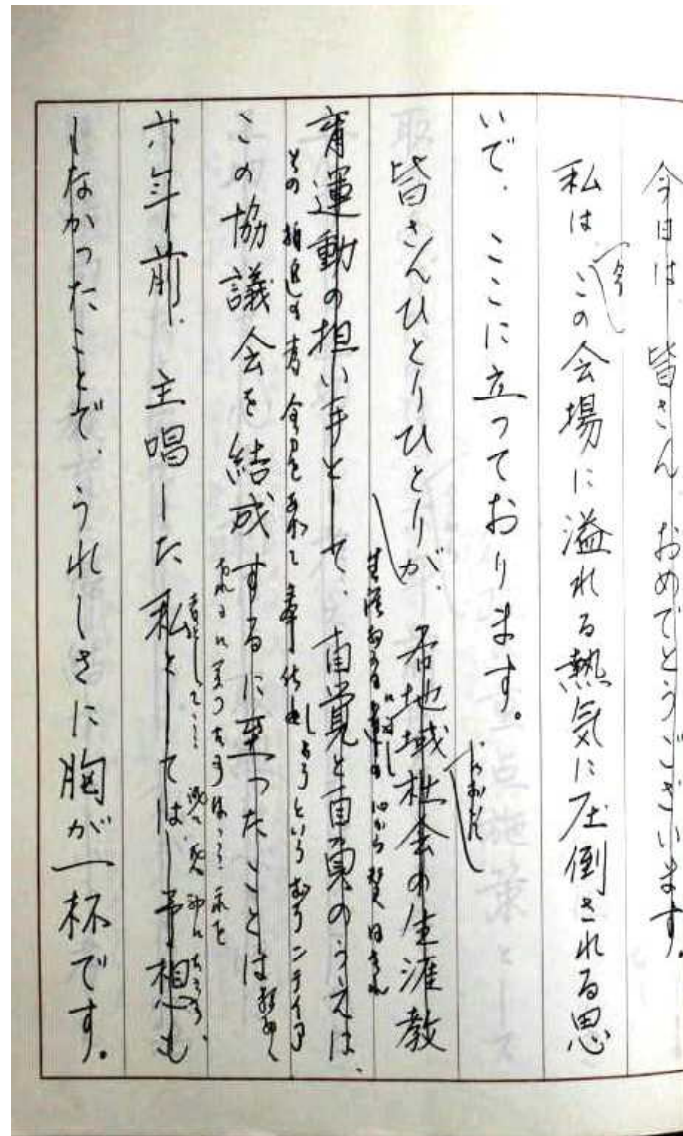
54～104

〈凡例〉

- ・本冊子は、昭和45年度から令和2年度に至る「秋田県の生涯教育・生涯学習の軌跡」について、県の施策を中心としてまとめたものである。
- ・本冊子は「本県の生涯教育・生涯学習50年のトピックス」及び「年表」の二部からなる。
- ・トピックスでは、本県の生涯教育・生涯学習の歴史に関する重要な事項を取り上げた。
- ・トピックス各頁の囲み記事は引用文であるが、句読点を加えたり、現代的な表記に改めたりした所がある。しかし、改変することで意味合いが変わる語句については、原文の文字の上に「ママ」のルビをふった。
- ・年表は、4月から翌年3月までの年度ごとに構成し、写真やコラム（あの日あの時、現代史への招待）を加えた。
- ・講演タイトルのサブタイトル等で「～」「ー」がついているものは「ー」に統一した。
- ・掲載した写真は、秋田県生涯学習センターを中心とする県の機関、個人所有及び県の生涯学習関連の刊行物から再録したものである。
- ・文中の役職名・組織名等は、当時のものである。
- ・年号の表記は、和暦年（西暦）とした。
- ・典拠資料の刊行年は（西暦年）とした。また、年度内に複数回刊行されるものについては西暦年に月を加えた。
- ・典拠資料のうち、歴史資料保存利用機関に収蔵されている資料については、資料番号を付した。
- ・本冊子は、多くの関係者の指導・助言を仰ぎながら、秋田県教育庁生涯学習課の畑中康博が執筆に当たり、元秋田県生涯学習センター所長の武藤四郎氏が監修した。

秋田県生涯学習50年史

第1章 生涯教育・生涯学習50年のトピックス



昭和51年（1976）10月14日

秋田県市町村生涯教育奨励員協議会結成大会（於：県正庁）

小畑知事の挨拶原稿（「知事祝辞挨拶」秋田県公文書館所蔵、010102-00020）

プロローグ ―生涯教育論の誕生―

秋田県の「生涯学習」は、昭和45年（1970）、小畑勇二郎知事のリーダーシップのもと「生涯教育」として推進したことに端を発する。「生涯教育」は、昭和40年（1965）、ユネスコで発表された最新の理念で、教育の施策としては、国はもとより他のどの都道府県も導入していなかった。

秋田県生涯学習50年の歴史をふり返るに当たり、小畑知事の思い描いた「生涯教育」論とはいかなるものだったのか、を見ることにしたい。

◆ 生涯教育とは

「生涯教育」という概念を生み出したのは、フランスのポール・ラングラン（1910～2003）である。ラングランは、大人になるための準備としての学校教育、基礎教育の不備を補う成人教育という考えを否定し「教育とは、一人の人が初等・中等あるいは大学のいずれを問わず学校を卒業したからといって終了するものではなく、生涯を通して続くものである」と考えた。

当時、ラングランは、ユネスコ成人教育局成人教育課長を務めており、昭和40年（1965）12月、ユネスコ本部で開催された第3回成人教育推進国際委員会において、ワーキングペーパー「社会教育の新しい動向」を提出する。このワーキングペーパーは「生涯教育」について言及した最初のもので、生涯教育の目標を次のように定めていた。

- 1 人の誕生から死に至るまでの、人間の一生を通じて教育(学習)の機会を提供する。
- 2 人間発達の総合的な統一性という視点から、様々な教育を調和させ、統合したものにする。
- 3 労働日の調整、教育休暇、文化休暇等の措置を促進する。
- 4 小・中・高・大学とも地域社会学校としての役割、地域文化センターとしての役割を果たすように勧奨する。
- 5 従来の教育についての考え方を根本的に改め、教育本来の姿に戻すため、この理念の浸透に努める。

◆ ラングランの生涯教育論

ラングランが生涯にわたる教育が必要であると考えた理由は、現代人が様々な挑戦に直面していると考えたからである。

「生きるということは、人間にとって万人にとって、常に挑戦の連続を意味するものだ。」

では、現代人はどのような挑戦を受けなければならないのか。ラングランは次の9点を指摘している。

- 1 諸変化の加速 絶え間ない変化により、人生の現実と認知の間に不均衡が生じている。
- 2 人口増大 学校教育のみでは個人・社会に必要な教育機会を確保できない。
- 3 科学的知識及び技術体系の進歩 学び続けないと時代に取り残される運命になる。
- 4 政治的挑戦 政治・法・階層構造の変化により、市民意識を涵養し続けなければならなくなった。
- 5 情報 マスメディアの発達により批判的精神・情報選択能力を高めなければならなくなった。
- 6 余暇活動 増加する余暇時間を、社会と自分自身のために用いる必要性が生じた。

- 7 生活モデルや人間関係の危機 伝統的生活モデル、風習等が通用しなくなる。
- 8 肉体 映像や印刷物に（特に女性の）肉体的表現が溢れるようになった。
- 9 イデオロギーの危機 自分の責任で自らの立場を探究し、自律することが求められるようになった。

現代の世界は絶えず変化する。人生の様々な場面で直面する9つの挑戦を「教育・学習し続ける」ことで解決する、これがラングランの考えだった。

◆ 日本における生涯教育論の受容

「生涯教育」の概念を日本にもたらしたのは、ユネスコの会議に参加していた波多野完治氏である。この時期、高度経済成長政策により社会構造が急激に変化し、これに対応する社会教育の在り方が問われるようになっていた。文部大臣は「急激な社会構造の変化に対処する社会教育のあり方について」を社会教育審議会に諮問し、昭和46年（1971）4月、同審議会は、変化の激しい社会における社会教育の採るべき方向として次の提言を行った。

- 1 今後の社会教育は、国民の生活の多様な機会と場所において行われる各種の学習を教育的に高める活動を総称するものとして広くとらえる。
- 2 家庭教育、学校教育、社会教育の三者の有機的役割分担を確立し、また、人々の生涯にわたる学習を支える多様な機会と場を提供する社会教育の役割を確認するなど、生涯教育の観点から体系化を図る。
- 3 人間性の回復と生きがいを目指す学習内容を重視するとともに、社会教育に関する団体活動、地域活動、あるいはボランティア活動を促進するなど、内容・方法の多様化、高度化を図る。

この答申により全国で生涯教育の施策が始まる。

◆ 「生涯教育」の先駆け、秋田県

改めて注目したいのは、秋田県では社会教育審議会が提言を行う一年前の昭和45年（1970）に、小畑勇二郎知事（明治39～昭和57年、在職：昭和30～54年）が生涯教育の推進を提唱していることである。当時、生涯教育は「制度的には教育を生涯にわたって保障することであり、内容的には教育の日常化と生活の教育化を促進する新しい理念」と捉えられていたが、まだ理論研究の域を出ていない状況だった。それを小畑知事は推進したのである。

知事は、著書『秋田の生涯教育』の冒頭に、フランスの小説家ルイ・アラゴン（1897～1982）の「学ぶとは、胸に誠をきざむこと。教えるとは、ともに希望を語ること」という箴言を引用している。小畑知事は、豊かな郷土秋田の創造には「万事、教育に始まり教育に終る」との哲学をもっていたと思われる。

ラングランの生涯教育論は「現代人が直面する挑戦」を、学びによって解決するというものであった。小畑知事は生涯教育を導入することで、秋田県をどのような郷土にしようとしたのか。秋田県における生涯教育・生涯学習の50年のあゆみをたどってみたい。

〈参考資料〉ラングラン（著）波多野完治（訳）『生涯教育入門』1971年、ラングラン「生涯教育と職業教育」（『社会教育』32、1977年）、小畑勇二郎『秋田の生涯教育』1978年、笹井宏益・中村 香『生涯学習のイノベーション』2013年、井上講四「生涯教育（学習）政策・研究の今日的状況ーその新たな基軸と枠組みを求めてー」（『琉球大学生涯学習教育研究センター研究紀要』1、2007年）

秋田県生涯教育前史 ―地域での学びはどのように始まったのか？―

知りたいことを知ることは楽しいことである。学校を卒業してしばらく時間が経過した大人が、日々の暮らしの中で何かを学ぶには、本人の知識欲、向学心以上に、時間、お金、そして何より周囲の家族の理解が不可欠で、それなりのエネルギーを必要とする。

秋田県民が地域レベルで学びを求めたのはいつ頃か。何を学ぼうとしたのか。それが昭和45年以降、小畑知事が進める生涯教育とどのように結び付いたのか。

この節では、西仙北町（現大仙市）の広報紙を中心に、この問題をふり返ってみたい。

◆ 女性たちの学び

西仙北町は、昭和30年（1955）3月1日、刈和野町・土川村・大沢郷村・強首村の4町村が合併してできた町である。昭和31年8月20日付け「広報西仙北」第4号には「地区社教だより」として、刈和野、土川、大沢郷、強首それぞれの地域で、座談会、婦人講座等を開催している記事がある。

昭和31年6月下旬から大沢郷公民館で行われた座談会では、祭典の冗費節約、お盆を新暦で行うこと、時間励行、公休日の要求が話題に上っている。また、強首婦人会では、宴席は午後9時まで、料理の簡素化、獅子振り（集落内の家々を順番に回り飲酒をする）をやめること等が話し合われた。そして同年9月20日に開催された刈和野公民館主催の婦人講座では、正月は新暦・旧暦いずれか一本にする、祭典の際の婦人労働の軽減、男性にはしご酒の自粛を求めること等が話し合われた。婦人講座を伝える記事には「当日は婦人の出席が多く、これらの問題に対する婦人の関心の深さを物語っていた」と見える。

婦人たちが公民館で熱心に学ぼうとしたのは、昭和30年（1955）鳩山一郎内閣が提唱し全国的な運動となった「新生活運動」に関するものである。この運動は、日常生活を物心両面にわたり改善向上させようとするものだったが、女性の家事労働の軽減に直結するだけに、運動の実践は冠婚葬祭の簡素化が中心になった。

また、新生活改善運動に関連して、食生活改善運動も進められたが、この講習会も女性たちに人気があった。昭和31年8月30日、大沢郷公民館主催の「食生活改善講習会」では、刈和野中学校の教師を講師に招き、ナスの天ぷら、ナスの南蛮煮、パンケーキ、マヨネーズを使ったサラダの作り方に128名の参加があった。

昭和31年11月26・27日には「第1回西仙北町農民祭」が開かれているが、二日間を通して即席料理コンクール、生活改善各種展示会（作業着、農村向き普段着、台所改善）が催された。

地域の公民館で講座が開かれ、その成果が秋に開催される大きなイベントで披露される。これは今日に続く公民館活動のスタイルであるが、それを形作ったのは、働きづめの母親たちだった。

◆ 公民館主催事業に集ったのは…

昭和39年（1964）4月30日、西仙北中央公民館の竣工式が執り行われた。広報紙「にしせんぼく」で最初の中央公民館事業の告知がなされたのは、その年の12月号であるが、その事業は、編み物教室、生け花実習と正月料理を学ぶ定期講座、婦人学級リーダー講習、刈和野

婦人学級、新春短歌大会である。婦人層向けの講座が中心を占めていることに着目したい。

西仙北中央公民館主催の教室に、その後どのようなラインナップが加わるのかを広報紙「にしせんぼく」に追うと、昭和40年（1965）2月、生け花実習、婦人学級に加え、老人クラブが要望した「長生きの健康法」講座が開かれている。

男性向け教室は、昭和40年8月の尺八同好会結成が最初である。さらに、昭和41年（1966）5月、菊花同好会、将棋同好会、囲碁同好会が結成される。尺八、菊花、将棋、囲碁いずれも熟達するのに時間を要するものばかりであることから、男性向けと言っても、比較的余暇時間に恵まれた高齢男性が中心と思われる。

昭和45年（1970）4月、西仙北町カメラクラブが結成される。この時期、大卒初任給は3.7万円で、カメラの価格は2万円を超える。カメラはお金のかかる趣味だったが、それが許される時代になってきたのである。翌5月には西仙北町芸術文化団体連盟が結成される。加入した文化団体は、短歌、民謡、菊花、カメラ、囲碁、茶道、生け花、日本舞踊、絵画、書道、三曲、尺八、琴、礼法、盤景、俳句の各団体で、11月には西仙北町芸術文化団体連盟の後援で公民館文化祭を開催している。

◆ 生涯教育パイロット市町村の指定

昭和45年（1970）小畑知事が生涯教育推進を理念として掲げ、昭和46年度大曲市（現大仙市）・鷹巣町（現北秋田市）・西目村（現由利本荘市）が生涯教育推進のパイロット委託事業を受ける。西仙北町では昭和48年度に町長を本部長とする生涯教育推進本部を発足させ、推進体制を作り上げる。西仙北町は、昭和49年（1974）4月に能代市・五城目町とともにパイロット市町村に指定された。

パイロット市町村の指定を受けて2年目の昭和50年（1975）11月3日～5日、町では「西仙北町生涯教育のつどい」を開催。会の冒頭、来賓として挨拶した畠山県教育長は「（西仙北）町の生涯教育は、全県15のパイロット町村の中で独特の推進体制であり、次第にその輪が広がり、大きな根を下ろしている」と挨拶。西仙北町の生涯教育事業は、昭和45年の知事による生涯教育推進開始以前に既に始まっており、知事トップダウンの生涯教育推進事業が始まると、公民館の独自事業は、それに転用されたのである。

「西仙北町生涯教育のつどい」午後の部では、小畑知事が「楽しい生涯教育」と題して約1時間の講演を行っている。後述するが、知事は生涯教育パイロット事業を委託した市町村の「生涯教育のつどい」には、必ず足を運んでいる。

西仙北町民の中で、最初に向学心が旺盛になったのは「新生活運動」を推進する婦人層だった。昭和40年代に入ると、女性たちの学びは、編み物、生け花へと変化する。少し遅れて男性向けの教室も始まる。レパートリーの拡大は、地域住民の生活が豊かになる軌跡でもある。昭和45年（1970）小畑知事主導による生涯教育が政策となり、それまで進めてきた公民館の事業は、町の生涯教育事業に転用されていく。実はこの転用の構図は、西仙北町のみならず、他の市町村に見られた。（Topics08 参照）

〈参考文献〉西仙北町『広報にしせんぼく縮刷版』（1985年）、秋田県生涯教育推進本部『昭和48年度 生涯教育推進の概要』（1973年）

小畑知事による「生涯教育」推進の背景

小畑知事が生涯教育を推進し始めた時期は昭和40年代の高度経済成長期に当たる。急激に変わる県民生活に、なぜ生涯教育が必要だと考えたのか。時代背景と判断の軌跡を追う。

◆ 秋田国体の時代



昭和36年（1961）第16回国民体育大会が秋田県で開催された。この秋田国体は「民泊国体」「まごころ国体」と呼ばれたが、これは、当時、全国から集まる選手や役員を宿泊させる施設が足りず、一般家庭に宿泊してもらったことによる。

秋田県教育庁内で組織されていた「国体を迎える研究会」が、開催に向けて一般県民に要望した点を見ると、「明るく親切に、温かい心で」に続いて「自分の郷土、歴史等に関心であるので、外来者に聞かれても一応説明できるだけの知識をもつように」「交通機関の利用態度を正しく」「立小便と道路に痰をはくことをやめる」「他人に卑屈にならぬよう」「酔っ払いの横行をなくすように」「すっきりした清掃」等26項目だった。昭和30年代の秋田県には、宿泊施設が十分整っていなかったばかりでなく、県民生活も今日とは比べようのないほど質素であった。小畑知事が知事の職に就いたのは昭和30年。知事が「生涯教育」について思いを巡らしたのは、このような時代状況の中においてである。

◆ 「第3次総合開発計画」

秋田県の総合計画一覧

No.	名 称	開始年	終了年
1	総合振興5カ年計画	昭和31	～ 35年度
2	総合振興4カ年計画	昭和34	～ 37年度
3	総合開発計画（第1次）	昭和38	～ 40年度
4	第2次総合開発計画	昭和41	～ 45年度
5	第3次総合開発計画	昭和46	～ 50年度
6	第4次総合開発計画	昭和51	～ 55年度
7	（新）総合開発計画	昭和56	～ 60年度
8	総合発展計画	昭和61	～ 平成2年度
9	新総合発展計画	平成3	～ 11年度
10	あきた21総合計画	平成12	～ 21年度
11	ふるさと秋田元気創造プラン	平成22	～ 25年度
12	第2期ふるさと秋田元気創造プラン	平成26	～ 29年度
13	第3期ふるさと秋田元気創造プラン	平成30	～ 令和3年度

行政施策の遂行には、長期にわたる見通しとそれに基づく課題の設定が必要で、今日まで左のような計画が策定されてきた。

各計画には教育分野のプランも盛り込まれているが、計画の中に生涯教育の概念が盛り込まれたのは、小畑知事が策定した「第3次総合開発計画」からである。

第3次総合開発計画の教育分野の計画は、従前の計画とどのように異なるのか。

昭和31年度開始の「総合振興計画」には、学校教育、社会教育のいずれにおいても施設整備、指導者等の人材確保等、最も基本的な条件の整備が課題とされた。昭和38年度開始の「総合開発計画」では、従前の施設の充実に加え、実業高校の学科課程の再編、特殊教育・幼稚園教育の普及・振興、文化・社会教育・スポーツの振興等が課題とされている。そして昭和41年度開始の「第2次総合開発計画」では、鉄筋校舎の整備とともに、高校定時制教育、特殊教育、幼児教育等への施策が課題となっている。

「第3次総合開発計画」のテーマは「農工一体の豊かな郷土の建設」で、教育分野のテーマは「生涯教育の推進と人間能力の開発」であった。それまで、構想若しくは理念として捉えられていた生涯教育は、徐々に行政施策として位置付けられることとなった。

◆ 小畑知事が「秋田県に生涯教育が必要である」と考えた理由

小畑勇知事は、在職中に著した『秋田の生涯教育』において、生涯教育の必要性について次の4つの理由をあげている。

- ・ これからの社会人は、コンピューターを使いこなすことができなければ、仕事にならない。
- ・ 価値観の変化。質素倹約から消費は美德に。さらに、物質的満足から精神的な充実感を求める傾向が顕著になってきた。
- ・ 情報の洪水と大量消費時代に対応するための学習が必要。
- ・ 余暇の活用のため。人生の長い歳月を、常に生き生きと充実して、明るく楽しく生活していくには、何に生きがいを求めるか。生涯にわたる学習で、それを自ら見いださなければならない。



総人口の見通しと実際

(単位:千人)

年	見通し	実際
昭和40年	1,279	
昭和45年	1,241	
昭和50年	1,221	1,232
昭和60年	1,264	1,254

就業人口の見通しと実際 (単位:千人)

見通し	年	就業者総数	第1次産業	第2次産業	第3次産業
	昭和40年	602	289	108	205
	昭和50年	616	215	154	247
	昭和60年	630	149	224	257
実際	年	就業者総数	第1次産業	第2次産業	第3次産業
	昭和50年	616	205	141	270
	昭和60年	619	135	178	306

小畑知事が本県に生涯教育が必要であると考えた背景には、急速に豊かになる県民の生活があった。上の左の表は「第3次総合開発計画」に示された秋田県の総人口と『県勢要覧』による実際の数値との比較である。計画実施時、秋田県の人口は124万人、昭和60年には工業化により雇用の拡大が図られることで126万人台になるとしている。『県勢要覧』から、昭和60年の実際の人口を調べると、見通しより1万人少ない125万人だった。

「第3次総合開発計画」の見通しと、実際の数値が大きく異なるのは、就業人口である。上の右の表を見ると、見通しでは昭和60年の第1次産業の就業人口は14.9万人と想定したが、実際は13.5万人。第2次産業は22.4万人と想定したが、実際は17.8万人。第3次産業の従事者は見通しよりも約5万人多い30.6万人になっている。

言うまでもなく、農業が生計の中心である場合、一年を通して、農作物を収穫する秋にししか現金を手にすることができない。しかし第2次、第3次産業の従事者は、就業時間が決められ、毎月決まった額の賃金が与えられる。第2次、第3次産業の労働人口が増えるということは、従来の農業社会で培われてきた、価値観・経済観念とは異なる考え方をもつ人が増えるということを意味する。

急速に変貌する社会、豊かになる生活、自由に使うことができる余暇時間、全てが変化の中で豊かに生きるためには、学ぶことで自分を向上させなければならない。生涯教育推進には、県民一人一人が人生を意義深く生きて欲しいという、知事の強いメッセージが込められていた。

〈参考資料〉秋田県教育庁社会教育課『『国体を迎える研究会』開催要領』、秋田県教育委員会『秋田県教育史第6巻 通史編2』(1986年)948頁、秋田県『第3次秋田県総合開発計画』(1971年)、小畑勇二郎『秋田の生涯教育』(1978年)、『県勢要覧』(各年度)

アイデアから制度へ

秋田県における生涯教育は、昭和45年春、小畑知事が教育長と教育庁各課長との会議の席で生涯教育の必要性を説いたことから始まった。（第2章の昭和45年度の項参照）
この節では、知事のアイデアが制度として確立されていった過程を見たい。

◆ 『秋田県第3次総合開発計画』

昭和45年（1970）4月1日、知事部局関係各課と教育委員会各課の16名により「生涯教育プロジェクトチーム」が発足。プロジェクトチームは同年12月「生涯教育体系の確立に関する報告書」を提出。報告書の趣旨は、昭和46年（1971）4月1日に発表された「秋田県第3次総合開発計画」に盛り込まれた。同計画の「2－3 生涯教育の推進と人間能力の開発」には「従来の学校中心の与えられた教育から『求められる教育』『開かれた教育』『みたまれた教育』を生涯にわたって保障する、いわゆる生涯教育の必要性が高まる」とし、「全ての県民に生涯にわたる自己啓発の機会を保障するとともに『生きがいをめざし、いつでも、どこでも学び合う』自己教育運動の推進を展開し、新しい教育的風土を醸成していくことが必要である」と謳われている。

◆ 「秋田県生涯教育推進要綱」

昭和46年（1971）4月1日、秋田県教育庁社会教育課内に生涯教育企画班が設置される。7月から翌年3月にかけて、生涯教育企画班の職員と県民代表31名により生涯教育推進懇談会が5回実施され、その成果は、昭和46年11月1日に策定された「秋田県生涯教育推進要綱」に反映された。「秋田県生涯教育推進要綱」は、生涯教育推進の基本方針を定めたものであり、施策に対する理解と積極的な参加が呼び掛けられている。

◆ 生涯教育推進本部

昭和47年（1972）4月1日、生涯教育推進本部が設置される。この本部は、同年3月30日に知事の定めた「生涯教育推進本部設置要綱」に基づき、既存の行政組織には属さない知事直属の組織として発足した。設置の目的は、生涯教育について県民の意見や要望を取り入れ、県の各機関が実施する教育的事業を総合的に企画調整し、生涯教育を効果的に推進することにあった。本部及び事務局の構成員は次のとおりである。

〔本部長〕 小畑勇二郎（知事） 〔副本部長〕 松橋藤吉（副知事）、伊藤忠二（教育長）

〔参与〕 寺田光和 〔事務局長〕 鎌田 宏（教育庁参事）

〔事務局次長〕 有明 暢（農政部参事、教育庁参事）〔事務局参事〕 高橋 司（教育庁参事）

〔事務局主査〕 尾張龍雄（土木部監理課主査、教育庁社会教育課主査）

〔事務局主事〕 渡辺孝一郎（教育庁社会教育課主事）

〔事務局幹事〕 角田 忠（自治研修所主査）、伊藤千鶴子（民生部福祉課主査）、小浜孝城（環境保健部医務薬事課主査）、北島愛之助（農政部農産普及課主査）、越中良平（産業労働部商工課主査）、柴田昭一郎（林務部林政課主査）、堀川 進（企画室主査）、佐藤 寿（青少年交通対策室長補佐）、由利忠四郎（教育庁社会教育課社会教育主事）、阿部裕治（県警本部防犯課少年補導官）

◆ 生涯教育推進協議会

昭和47年（1972）「生涯教育推進本部」同様、「生涯教育推進本部設置要綱」に基づき「生涯教育推進協議会」が設置された。この協議会は、本部長の諮問についての答申と建議を行うものとされ、次の29名の委員が本部長から委嘱された。

中村ギン（秋田市・秋大付属幼稚園教頭）、宮原忠美（阿仁町・阿仁合保育園長）、一ノ関敏弘（五城目町・秋田県青年団体連絡協議会事務局長）、高橋徳之助（太田町・元大曲中学校長）、伊藤徳次郎（大曲市・大曲農業高等学校長）、藤島主殿（秋田市・秋田大学教育学部長）、○佐藤敬夫（秋田市・秋田青年会議所）、○鈴木辰美（協和町・秋田県農業近代化ゼミナール連絡協議会長）、佐藤 貞（五城目町・五城目町婦人会）、藤原礼次郎（大館市・「竹村」人事課長）、○長谷山包子（秋田市・県社会教育委員）、小西俊孝（河辺町・花き生産者連絡協議会長）、佐藤亮一（大曲市・「ヤマサ」専務）、柿崎貞治（秋田市・秋田県教職員組合執行委員長）、寺田九空（秋田市・芸術文化協会副会長）、小林忠雄（秋田市・体育協会常務理事）、吉田耕太郎（男鹿市・男鹿市図書館協会委員）、佐藤欣一郎（大曲市・県老人クラブ連合会長）、○森 可昭（秋田市・秋田魁新報社政治部長）、○石川嘉明（秋田市・ABS報道局長）、片岡尚人（秋田市・ボーイスカウト秋田連盟コミッショナー）、○島田博司（秋田市・NHK放送部長）、○古村精一郎（秋田市・前秋田市教育委員長）、○加藤 茂（由利町・前町村会長）、菊地 茂（秋田市・浄円寺住職）、河野敬介（西目村・公民館長）、渡辺勝蔵（鷹巣町・教育長）、最上源之助（大曲市・市長）、豊沢正雄（男鹿市・パイロット市町村）

この中で氏名に○印がついている人物は、生涯教育推進協議会の常任委員として委嘱され、会長は古村精一郎氏が選出された。古村氏は広報紙『生涯教育』1に次の言葉を寄せている。

高校生の頃、英語の授業で「教育する」という単語を英訳してみろとあてられ、無造作に「ティーチュ」と応えた。先生はDというイギリス人であったが「それは間違いだ」と叱られた。「教師をテイチャーと言うのでは？」と答えたが、D先生はますます真顔で叱る。「では何というのがよいのですか？」

「ブリング・アップ」

この語は「育てる」という意味だとばかりに覚えていた。その時以来、私は教育という語の主成分は育てることで、詰め込むことではないと思っている。

◆ 秋田県生涯教育推進協議会「生涯教育の付託課題についての報告書」

昭和49年（1974）1月18日、昭和48年度第2回生涯教育推進協議会において、付託課題第2「県民の学習活動を奨励援助するための指導者の活動をどのように推進したらよいか」と第3「教育的事業を体系化するためにどんな措置が必要か」が話し合われた。

このうち、2番目の課題の解決案として、県は生涯教育講師団を置き、市町村は生涯教育奨励員を置くという案が出されている。

秋田県における生涯教育は、小畑知事のトップダウンで始まるが、知事のアイデアが政策として実現されるまでには、生涯教育推進本部のスタッフ（県庁各部局の職員）のみならず、秋田県生涯教育推進協議会の委員の働きが大きかった。

推進協議会に付託された課題の中から、生涯教育講師団と生涯教育奨励員のアイデアが誕生している。

〈参考資料〉秋田県教育委員会『秋田県生涯教育推進要綱』（1971年）、秋田県生涯教育推進本部事務局『生涯教育』1（1972年6月）、秋田県生涯教育推進本部『昭和47年度 秋田県生涯教育推進本部のあゆみ』（1973年）、同『昭和48年度 生涯教育推進の概要』（1973年）

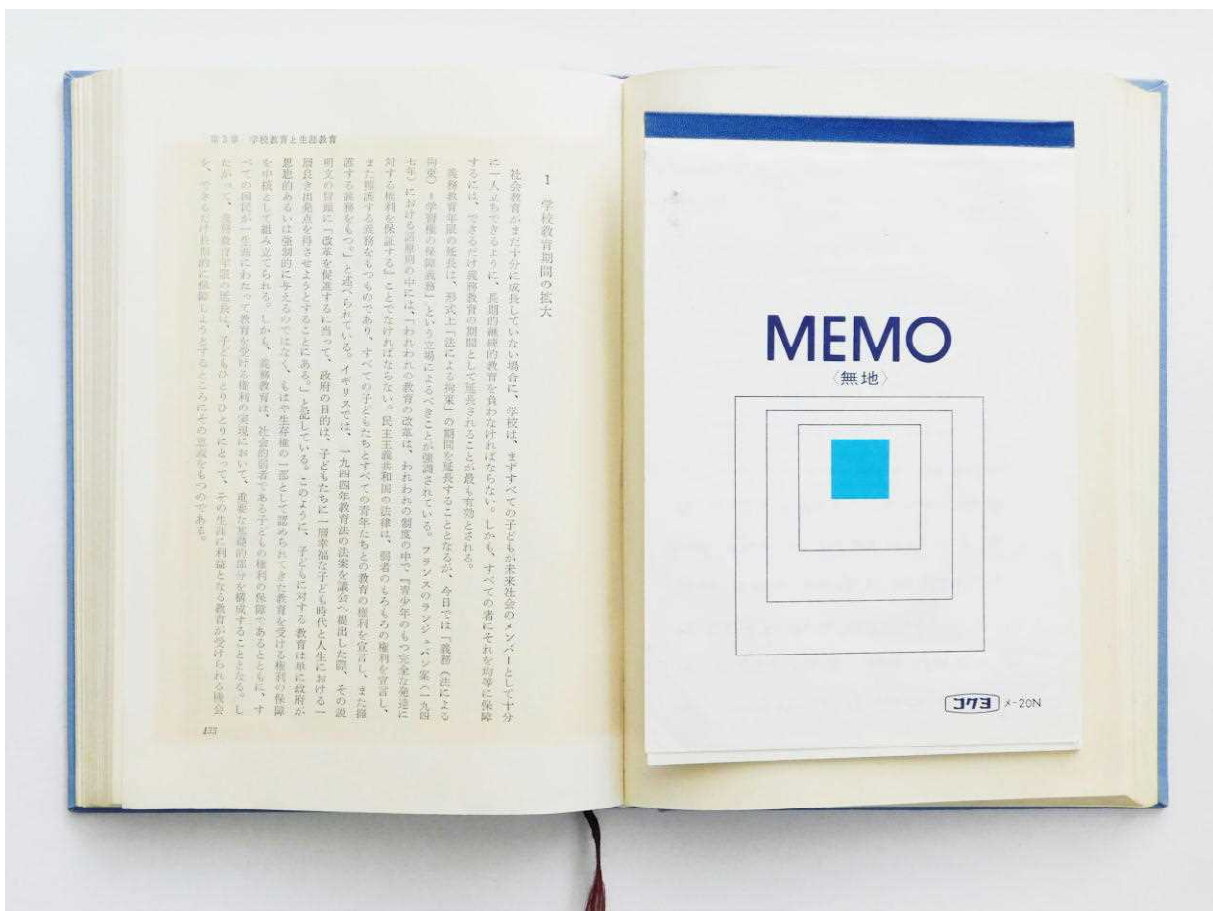
〈新資料〉小畑知事の生涯教育観

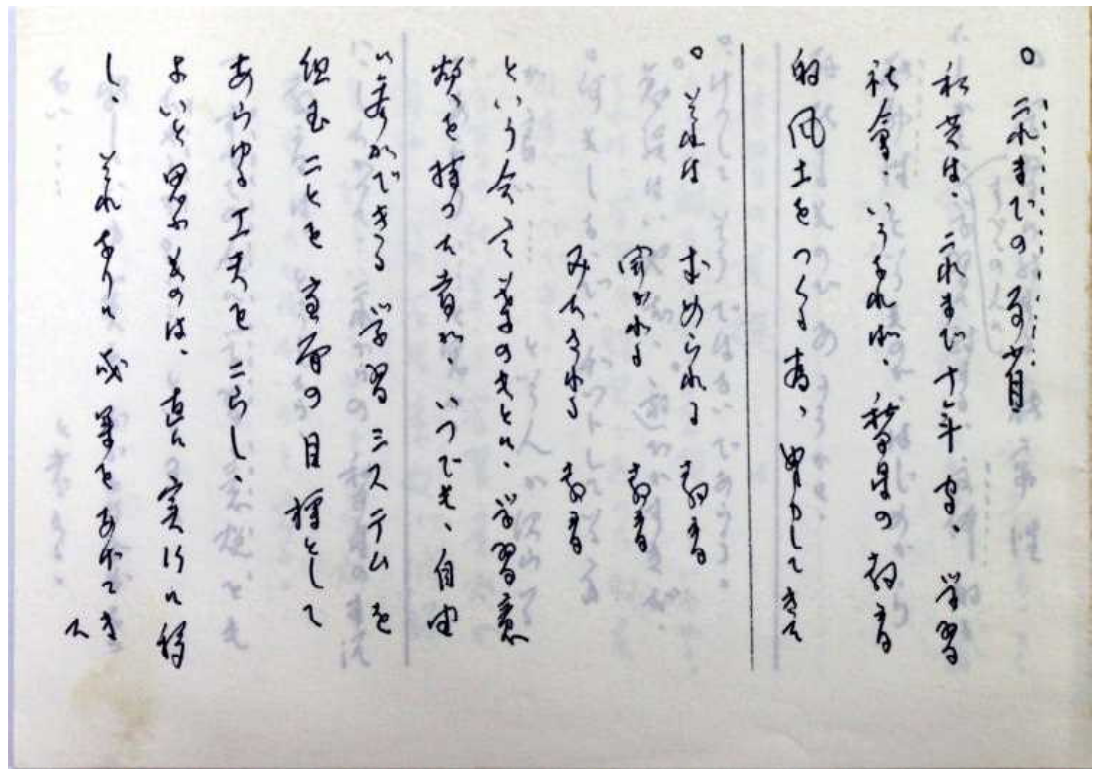
小畑知事が生涯教育の施策を進めるに当たり参考にしたのは、森 隆夫著『生涯教育』（1970年）である。

秋田県生涯学習センター所蔵「小畑文庫」には、知事が愛読した『生涯教育』の原本がある。本を開くと、そこかしこの頁に傍線が引かれ、行間や余白への書き込みも多い。

本冊子を編集するに当たり、この本を改めて調査したところ、頁の間に小畑知事直筆のメモ7枚が挟まっていることが分かった。小畑知事は『生涯教育』を読みこみ、そこから秋田県の生涯教育体制の構築に向けて、どのような考えをめぐらし、未来を展望したのか？

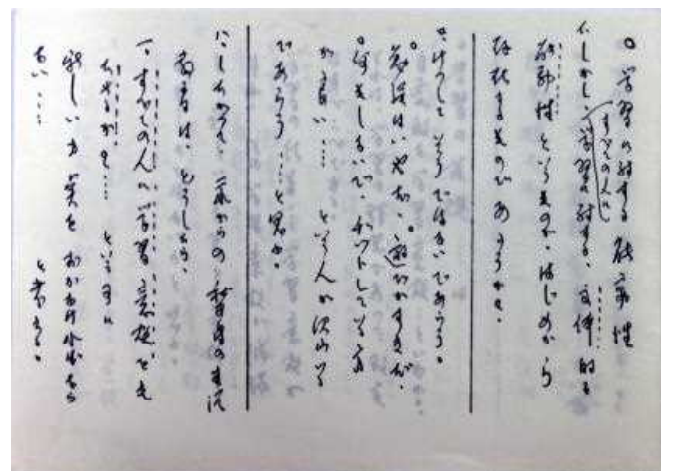
ここでは、知事の生涯教育観が記されているメモ全文を翻刻したい。



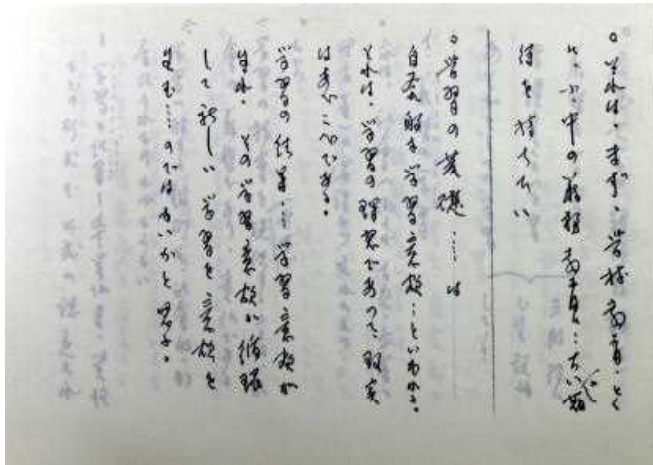


○これまでの反省
 私共は、これまで十年間、学習
 社会、いふなれば、秋田県の教育
 的風土をつくる為、努力してきた。

○それは、求められる教育
 開かれる教育
 みたされる教育
 という合言葉のもとに、学習意
 欲を持った者が、いつでも、自由
 に参加できる学習システムを
 組むことを当面の目標として、
 あらゆる工夫をこらし、
 よいと思ふものは、直に実行に移
 し、それなりに成果をあげてきた。



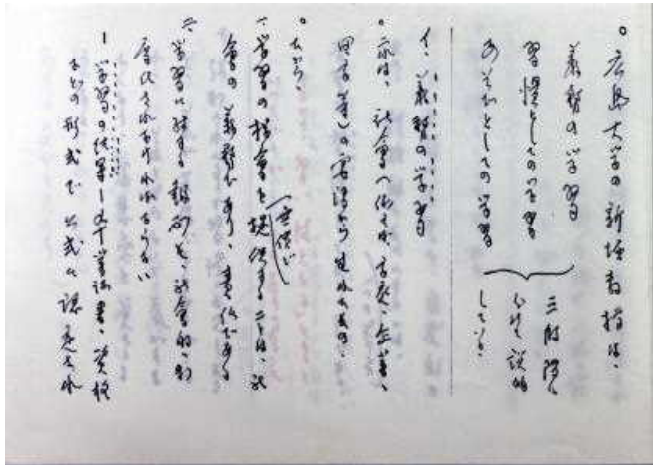
ハ、したがって、これからの秋田県の生涯
 教育は、どうしたら、
 一、すべての人に学習意欲をも
 たせるか？……という事に
 新しい力点をおかなければなら
 ない……と考える。



○それはまず、学校教育、とくに、小・中の義務教育に…大いに期待を持ちたい。

○学習の基礎…は、
自発的な学習意欲…といわれる。
それは学習の理想であって、現実
はあべこべである。

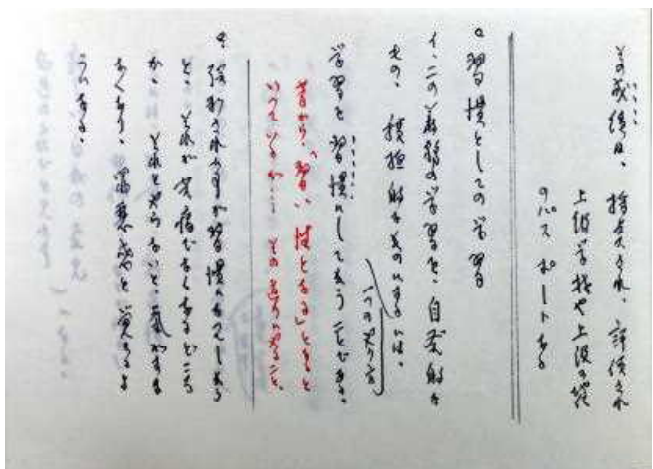
学習の結果…学習意欲が
生れ、その学習意欲が循環
して、新しい学習を意欲を
生む…のではないかと思ふ。



○広島大学の新堀教授は、
義務の学習
習慣としての学習
あそびとしての学習

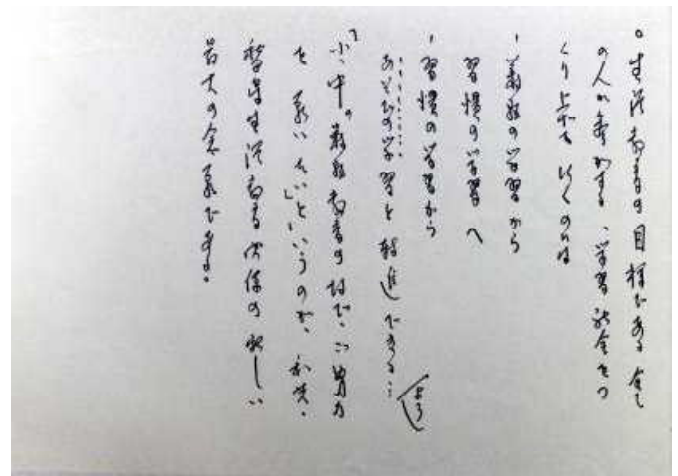
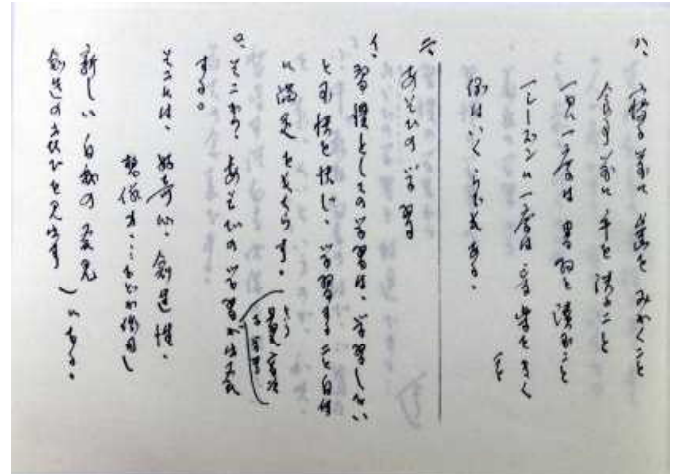
三段階に
分けて説明
している。

イ、義務の学習
○これは、社会（例えば家庭、企業、
国家等）の要請から生まれたもの。
○だから、
一、学習の機会を無償で提供することは、
社会の義務であり、責任である。
二、学習に対する報酬を社会的に制
度化されなければならない。
— 学習の結果—卒業証書、資格
などの形式で公式に認定され、



その成果は、採点され、評価され、
上級学校や上級の地位
のパスポート（に）なる。

○習慣としての学習
イ、この義務の学習を自発的なもの、
積極的なものにする一つのやり方には、
学習を習慣にしようことである。
（朱書）
昔から「習性となる」となるといつて
いるが…その通りにやること。
ロ、強制された事が習慣になってしま
うと、それが苦痛でなくなるどころ
か、それをやらないと、気がすま
なくなり、罪悪感を覚えるよ
うになる。



* 翻刻文（ ）の語句は訂正した

- ハ、寝る前に歯をみがくこと。
食事前に手を洗ふこと。
一日に一度は書物を読むこと。
一シーズンに 一度は音楽をきくこと。
例はいくらでもある。
- ニ、あそびの学習
- イ、習慣としての学習は、学習しないと不快を（感）じ、学習すること自体に満足をもたらす。
- ロ、そこから、あそびの学習という最も高次な学習が出發する。
- そこには、好奇心、創造性、想像力：などが作用し
新しい自我の発見
創造のあそびを見出す になる。

○生涯教育の目標である、全ての人が参加する、学習社会をつくり上げていくのには、義務の学習から習慣の学習へ習慣の学習からあそびの学習と転進できる：よう「小・中の義務教育の場で、ご努力を願いたい」というのが、私共、秋田県生涯教育関係の新しい最大の念願である。

メモの1枚目に「私共は、これまで十年間、学習社会、いうなれば、秋田県の教育的風土をつくる為に努力してきた」という文言があることから、このメモが書かれたのは、小畑知事が昭和54年（1979）4月に引退した翌年、昭和55年（1980）頃と考えられる。

小畑知事は県知事引退後「秋田県生涯教育推進協議会」会長に就任し、昭和57年（1982）10月5日に亡くなるまで会長職を勤めた。知事は10年かけて秋田県の生涯教育体制を作りあげ、昭和55年（1980）には秋田県生涯教育センターも開所している。

メモの冒頭には「これまでの反省」とあり、更なる改善を考えていたことが分かる。

生涯教育推進パイロット市町村の指定

昭和46年（1971）、県は生涯教育を推進するため、生涯教育推進パイロット市町村に大曲市（現大仙市）、鷹巣町（現北秋田市）、西目村（現由利本荘市）を指定した。この節では、県の指定基準、市町村が県に提出することを求められた実績報告書の視点、そして指定されたパイロット市町村の動きから、県は市町村にどのような生涯教育事業を期待したのかをふり返ってみたい。

◆ パイロット市町村選定基準

昭和46年（1971）県は生涯教育推進パイロット市町村に大曲市、鷹巣町、西目村を指定した。三市町村の指定について、同年10月7日、秋田県立体育館で開催された第23回全国連合小学校長会秋田大会での記念講演で、小畑知事は次のように述べている。

市の代表である大曲市では、0歳児教育に力を入れ、生後10か月目から3歳までの乳幼児の生活指導に手をつけておりますが、市長さんが大変な力の入れ方で、31名の乳幼児に保姆と助手を合わせて11名の人をつけて世話しております。一方、学校教育と社会教育との連携を図るため、学社研究会を設けて学校教育から社会教育への拡大も研究しております。

町の代表である鷹巣町では、地域を主体に生涯教育を進めようとしておりますが、各集落にボランティアを委嘱しており、そうした体制の中で幼児相談所、学校開放講座スポーツ教室等を開設いたしております。

村の代表である西目村は、戦前から全村教育を実施しておるところで、これまで公民館を中心に成人教育に力を入れて参ったので、今度は、これを小・中・高の各学校教育と、どう有機的に結び付けていくかということに重点を置き、この村独自の生涯教育を展開しようとしております。

すなわち、パイロット事業に大曲市・鷹巣町・西目村が指定されたのは、県北・中央・県南の地域区分と自治体の規模、そして推進体制が整備されそうな市町村だったことによる。

◆ パイロット市町村に指定された大曲市・鷹巣町・西目村の動き

〈大曲市〉

大曲市では、市役所・教育委員会による生涯教育プロジェクトチームと公民館・図書館・教育研究所による生涯教育推進委員会が組織され、市民の自発的な学習に対する援助が始まった。



▲「生涯教育を考える市民の集い」（10月8日）

プロジェクトチームは「明るく住みよいまちづくり運動の推進」「地域課題解決の推進」「生涯教育情報の提供」等を進める。一方、推進委員会は「事業の実施」「学習意欲を高める活動」「社会教育団体の育成」等を進めるものとして役割分担を行った。

昭和47年度には市民教養講座12コースを開設。10月8日には大曲市勤労青少年ホームで、知事、県教育長を招いての「生涯教育を考える市民の集い」（約

生涯教育推進パイロット市町村の指定

350人)を実施。昭和48年4月「大曲市生涯教育推進センター」が設置され、生涯教育活動の一層の推進が図られた。

〈鷹巣町〉

鷹巣町では、町民210名が生涯教育推進委員に、10名が生涯教育研究員に委嘱され「生涯教育を語る座談会」「生涯教育推進大会」が実施された。

昭和47年度には、町長を本部長、教育長を副本部長とする鷹巣町生涯教育推進本部が作られた。11月18日、鷹巣町公民館で知事出席のもと「生涯教育をすすめる町民の集い」が開催された。昭和48年度には「生涯教育を語る会」、49年度には「生涯教育を語る町民の集い」が実施され、着実に生涯教育の浸透が図られた。



▲「生涯教育をすすめる町民の集い」
(11月18日)

〈西目村〉

西目村では、昭和46年度、生涯教育推進研究委員会を設置し、生涯教育研究集会を実施している。昭和47年度には生涯教育推進会議や生涯学習奨励室を設置するとともに、村民の学習グループ作りを進めた。

昭和48年2月22日には、西目村公民館で知事出席のもと「生涯教育をすすめる集い」が実施された。そして昭和48年度から50年度にかけて、生涯教育の体制が整備され、村民への浸透も図っている。



▲「生涯教育をすすめる集い」(2月22日)

昭和46年度に生涯教育推進パイロット事業の委託を受けた3市町村では、直ちに行政内部の体制を作り、住民への理解を図っている。その方法は自治体によって異なるが、5年間で軌道に乗せていることは共通している。また、それぞれの自治体で開かれた生涯教育推進の集会には小畑知事が参加しており、ここにも知事の熱の入れようが窺える。

3市町村の事業予算を見ると、3市町村の中でも鷹巣町が最も多かったことが分かる。大曲市、鷹巣町、西目村以外のパイロット事業の指定は、昭和47年度から50年度にかけて行われている。その市町村名は、第2章昭和46年度を参照されたい。

パイロット3市町村の事業予算						(単位:千円)
年度区分	46	47	48	49	50	自主財源合計
県委託費	200	500	500	500	500	
大曲市財源	8	184	1,501	295	298	2,286
鷹巣町財源	207	1,154	1,028	605	1	2,995
西目村財源	53	576	813	719	186	2,347

秋田県における「生涯教育」は、昭和45年、小畑知事の発案から始まった。課題は「生涯教育」を県内の自治体にどのように広めるかにあった。県は、翌年から年度ごとに3市町村をパイロット事業として委託し、各自治体の「生涯教育」体制づくりと地域住民への浸透に努めた。指定を受けた自治体では、知事の意向をよく理解し、それぞれの方法で目的の達成を図った。現在、自治体の生涯学習事業は、地域ごとに趣向を凝らしたユニークなものが多いが、その源流はパイロット事業にあるといえる。

〈参考文献〉秋田県生涯教育推進本部事務局『秋田県の生涯教育—10年の足跡—』(1980年)、小畑勇二郎『生涯教育のすすめ 秋田県の目指すもの』(秋田県教育庁内生涯教育研究班、1971年)、秋田県生涯教育推進本部『昭和47年度 秋田県生涯教育推進本部のあゆみ』(1973年)

パイロット市町村の動き ―西目村『生涯学習情報 学習サロン』から―

昭和46年度（1971）、西目村（現由利本荘市西目町）は大曲市、鷹巣町とともに「生涯教育推進パイロット市町村」に指定された。村では、翌47年4月20日から、広報紙「生涯学習情報にしめ」を月刊で発行。同紙は48年4月、「のびる」に名称を変更するが、村の生涯学習関係の記事は、同年6月から『村報にしめ』のうち1頁が「学習サロン」としてまとめて掲載された。由利本荘市中央図書館では、西目村が発行した「生涯学習情報にしめ」「のびる」「学習サロン」を合冊した『生涯学習情報 学習サロン』を所蔵している。

この節では『生涯学習情報 学習サロン』に綴られた広報紙から、村民に生涯教育が浸透していく様子を追ってみたい。

◆ 生涯教育パイロット村1か年をふり返って（「にしめ 第2号」昭和47年5月5日）

昭和47年（1972）2月22日、西目村公民館で村民127名が参加し「生涯教育推進研究集会」が開かれた。「にしめ 第2号」には、当日行われたグループ討議で、参加者が出した意見が掲載されている。

- ・年齢階層ごとの集会はあるが、家族ぐるみの幅広い集会と公民館利用を考えたらどうか。
- ・種々のグループをもっと村で認めて、世話と援助を与えては。
- ・生涯学習のための指導員を配置したら。
- ・学習のための声かけ運動を展開しては。色々な教育事業についてのPRが不足。
- ・生きがいを求めていく学習、職業の悩みを解決させてくれる機会を作ってほしい。

「にしめ 第2号」では「学級講座案内」として、5月6日に公民館で開かれる書道教室と同9日に開かれる生花教室を告知している。これらの教室は既に開かれていた教室である。

昭和47年6月、村では松葉学級、寿学級、主婦学級、リフォーム教室を相次いで開講した。西目村の生涯教育は、女性対象の教室を生涯教育の教室と位置付け、さらに、女性を対象とする新規教室の拡大を図ったのである。

◆ “教養・趣味”を通して生きがいを（「にしめ 第10号」昭和47年9月5日）

今、書道・料理・生花・リフォーム教室が開設されており、他に写真・演劇・音楽・バレエ・陶芸・郷土史・参禅読経の会が同好者によって行われています。さらに、御希望によって、踊り・民謡・茶道・人形押絵・短歌・俳句・家庭看護・尺八三味線・美術等、同好の会の方々の会（講座）の開設、会場、通知、その他についてお世話したいと思います。

上は「にしめ 第10号」の記事である。昭和47年9月の時点で、村の生涯教育教室は女性中心の教室に加えて、男性向けの同好会が発足していたことが分かる。加えて、多方面の趣味をもつ人を集めての新しい教室発足も考えていたことが窺える。

スポーツ分野の教室が開催されたのは、昭和49年（1974）9月26日からである。対象は婦人。毎週木曜日午前10時から11時30分まで、種目は卓球とバドミントンだった。（「学習サロン 第56号」）お昼前の主婦が参加しやすい時間帯であるが、この頃になると、主婦が家を空けることに対して、他の家族の抵抗感が薄くなっていることも見落とせない。

◆ 昭和48年2月22日「生涯教育をすすめる集い」参加者の声

昭和48年2月22日、小畑知事出席のもと西目村公民館で「生涯教育をすすめる集い」が開かれた。「にしめ 第23号」には、この会に参加した方々の声が掲載されている。

村の生涯学習をすすめる集いに出席しました。一見堅苦しく聞こえる生涯教育も出席してみて、決して難しく考えることはないと思いました。私にとっては30数年生きてきた人生の反省と、これからどうあるべきかを考えて話し合う唯一の場であると安らぎを覚えました。15人の学習事例発表があり、稲作や農業に命を燃やしながら研究し続ける若者の発言、婦人会・若妻会・寿学級の日頃の学習発表も、一つひとつ考えながら聞くことができました。最後に県生涯教育推進本部長である知事の激励の言葉を頂き、これからは生涯教育パイロット指定村の名にふさわしくするために、村一人一人が積極的に新しい知識を、そして生きがいのある人生を送りたいと思いました。(佐藤アサ子)

生涯教育とは何だろうかよく分からない。知事が提唱したことは知っていた。でも自らの目で知りたいたいと思い参席した。15人の事例発表を聞き、私はすごく勉強させられた。

これが生涯教育か、何も特別のものでない、「人間死ぬまで勉強である」そのことが生涯教育である。しかし私たちにとって最も大切なことは、与えられたことをするのはなく、自分たちで作っていかねばならない。

私は席上こう思った。「西目村民は花を愛し、物を育てる心を作ろう」と。そして、健康で、明るい美しい花を西目村全部に育てよう。(斎藤 久)

二人の参加者に共通するのは、学ぶ決意を抱き、郷土西目村を背負って立つ気概をもったことである。生涯教育を推進しよう、どのような小さな会にも参加しようという小畑知事の思いと行動力は、県民一人一人の心を動かしていった。

◆ 昭和50年2月21日「生涯教育をすすめる集い」参加者のグループ討議

- ・昔のような近隣社会を作ろう。心の豊かさをもち、みんなが声かけ運動を展開しよう。
- ・コミュニティづくり、生涯教育推進は個人の心を豊かにし、豊かな郷土づくりを行うのだということを基本に考え、住民みんなが、個人としては、家庭では、集落では、村では何をなすべきかを考え、強力に実践に当たるべきだ。
- ・壮年層の学習組織がない。組織作りと集まりを考えてほしい。

「何のために学ぶのか」生涯教育推進3年で村民が出した答えは、コミュニティづくりのための教育だった。生涯教育が、単なる個人の満足感にとどまるようではないという意見は、時代を超える普遍性があり注目に値する。

豊かになる生活と個人主義の台頭。公民館に集う女性と、家に引きこもりがちな男性。生涯教育開始直後に西目村で浮き彫りになった課題は、令和の時代になっても、なお解決していない問題と思われる。

〈参考文献〉西目村生涯教育推進会議『生涯学習情報 学習サロン』（由利本荘市中央図書館所蔵、L090-カク）

県民への「生涯教育」の浸透と市町村の動き

昭和48年（1973）1月、秋田県生涯教育推進本部は、秋田市200人、秋田市以外の市町村各100人を無作為に抽出し、生涯教育の理解度について調査を行った。本節では、そのアンケート結果と4年後の昭和52年度の県内市町村の生涯教育講座の開設状況に着目し、知事が提唱した生涯教育が県内の自治体にどのような形で広まったのかを考えてみたい。

◆ 各市町村別「生涯教育理解度調査」集計

アンケートの調査結果について、秋田県生涯教育推進本部事務局発行の広報紙「生涯教育」第4号に、『生涯教育という言葉をよく聞く』及び『聞いたことがある』が全体の78.3%

昭和48年1月「生涯教育理解度調査」集計結果

自治体名	生涯教育 という言葉 聞いたことが ある	生涯教育 は大事だ と思う	情報がよ く届く	自治体名	生涯教育 という言葉 聞いたことが ある	生涯教育 は大事だ と思う	情報がよ く届く
秋田市	83.8	83.9	32.3	金浦町	80.0	77.1	45.7
能代市	61.5	76.9	43.6	象潟町	66.6	88.9	27.8
横手市	79.3	82.8	48.3	矢島町	87.8	87.9	48.5
大館市	88.4	84.6	30.8	岩城町	76.9	89.7	51.3
本荘市	84.0	96.0	56.0	由利町	83.8	93.5	45.2
男鹿市	72.9	83.8	62.2	大内町	75.6	85.4	53.7
湯沢市	71.8	75.0	40.6	西目村	91.4	88.6	77.1
大曲市	92.5	88.9	59.3	鳥海村	84.0	84.1	59.1
鹿角市	66.6	89.3	38.9	東由利村	60.0	86.2	50.0
小坂町	69.6	87.9	57.6	神岡町	75.7	93.9	57.6
鷹巣町	85.1	89.4	57.5	西仙北町	66.6	88.9	55.6
比内町	77.0	91.7	52.8	角館町	77.5	85.0	55.0
森吉町	62.8	77.1	31.4	六郷町	60.8	73.9	52.2
阿仁町	88.8	100.0	46.7	中仙町	96.4	100.0	32.1
田代町	69.6	72.7	30.3	田沢湖町	83.3	72.2	33.3
合川町	66.6	90.9	42.4	協和町	100.0	93.5	51.6
上小阿仁村	67.8	71.4	46.4	太田町	53.0	78.1	40.6
琴丘町	82.3	85.3	50.0	南外村	87.5	93.8	62.5
二ツ井町	72.9	94.6	54.1	仙北村	87.0	90.3	45.2
八森町	87.2	91.5	48.9	西木村	86.6	93.5	56.7
山本町	90.3	96.8	48.4	千畑村	64.2	85.7	42.9
藤里町	66.6	66.7	26.7	仙南村	70.0	86.7	53.3
八竜町	73.5	82.4	55.9	増田町	53.3	83.3	43.3
峰浜村	82.9	90.2	68.3	平鹿町	79.3	93.1	58.6
五城目町	85.7	71.4	53.6	雄物川町	90.2	90.2	53.7
昭和町	82.1	89.3	75.0	大森町	75.8	93.1	44.8
八郎潟町	77.1	77.1	42.9	十文字町	72.7	97.0	54.5
飯田川町	90.0	96.7	50.0	山内村	55.8	76.5	41.2
天王町	83.3	77.8	44.4	大雄村	73.3	83.3	60.0
若美町	79.1	95.8	58.3	稲川町	95.5	88.9	68.9
井川村	88.6	84.1	50.0	雄勝町	85.7	100.0	51.4
大潟村	87.5	91.7	66.7	羽後町	66.6	84.4	42.2
河辺町	86.1	94.4	69.4	東成瀬村	76.0	96.0	60.0
雄和町	75.8	86.2	51.7	皆瀬村	100.0	68.2	31.8
仁賀保町	66.6	88.9	40.7	平均	78.3	86.6	49.9

を占めているが、『いつ、どんな会が開かれているかの情報がよく届いているか』については、『はい』と答えた人が49.9%と若干低い率を示している。しかしながら、生涯教育に対する認識は、県民にかなり浸透してきていることはいかかわれる」と分析している。

当時の秋田県民にとって「生涯教育」という言葉は聞き慣れないもので、しかも小畑知事が「生涯教育」を打ち出してから2年しか経っていない。昭和48年度からは、生涯教育に関するテレビ番組が始まっている。このことにより、生涯教育に対する県民の意識・関心は徐々に高まっていったと考えられる。

県民への「生涯教育」の浸透と市町村の動き

◆ 市町村における生涯学習講座・教室のはじまり

県は、市町村における生涯教育事業の推進を図るため、昭和46年度からパイロット市町村の指定を始め、昭和48年度には、市町村の生涯教育推進体制の整備・支援を重点施策とした。各市町村では、生涯教育推進体制を構築し、それまで独自で取り組んでいた講座・教室等を生涯教育の事業として位置付けていった。

昭和52年度 市町村別生涯教育講座・教室実施状況(抜粋)

自治体名	書道	生け花	園芸盆栽	料理	民謡	茶道	俳句	短歌	健康保健	手芸	囲碁	陶芸	謡曲	絵画	民踊	編み物	和裁	将棋	合計
鹿角市	1	1	1	1	1	1	1		1	1	1		1			1	1	1	14
大館市	1	1	1	1		1		1	1		1	1	1	1		1	1		13
鷹巣町	1	1		1					1				1	1	1		1		8
比内町	1			1	1			1	1		1	1	1						8
森吉町		1		1	1				1							1			5
阿仁町		1	1	1	1	1			1			1			1	1			9
琴丘町	1		1			1	1					1							5
山本町	1		1				1	1	1			1	1	1					8
峰浜村	1			1			1			1				1					5
昭和町	1					1			1	1					1				5
河辺町					1		1	1		1		1	1						6
金浦町	1	1	1			1	1	1						1					7
象潟町	1	1	1	1	1	1	1	1			1			1				1	11
岩城町	1	1		1	1	1				1									6
由利町	1	1		1	1	1				1					1				7
大曲市		1	1	1		1	1	1	1	1		1	1	1					11
神岡町	1	1	1	1												1			5
角館町	1	1		1		1		1	1			1							7
田沢湖町			1								1	1						1	4
仙北町		1	1	1		1			1	1									6
南外村		1									1				1		1		4
千畑村	1	1	1				1							1					5
横手市	1		1	1	1				1	1		1			1	1	1		10
平鹿町	1	1	1	1	1	1	1	1		1	1			1	1		1	1	14
雄物川町	1	1	1		1		1	1											6
大森町	1	1	1		1	1	1	1		1	1	1		1	1				12
山内村		1	1		1		1	1			1		1					1	8
大雄村	1	1			1					1						1			5
稲川町		1	1		1	1	1	1			1		1					1	9
東成瀬村	1		1		1		1				1		1			1			7
合計	21	21	19	16	16	15	15	13	12	12	11	11	10	10	8	8	6	6	230

上の表は、昭和52年度における県内一部市町村の生涯教育講座の実施状況である。市町村で最も開設されていたのは、書道と生け花の講座や教室で、園芸盆栽、料理、民謡、茶道の順に並んでいる。これを見ると、地域の住民が何を「生涯教育」と考えていたのかが分かる。

知事が推し進める「生涯教育」に、各市町村は独自に行っていた講座・教室を生涯教育事業と位置付けた。地域住民にとって生涯教育とは、地元の公民館に通い、書道・生け花・園芸盆栽・料理・民謡等を学ぶことだった。民間カルチャー・スクールが普及していない時代、公民館で開かれる講座や教室が、地域住民にとっての生涯教育だった。

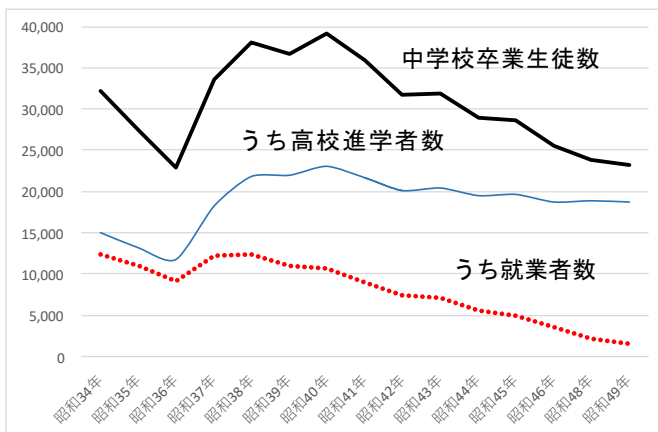
〈参考文献〉秋田県生涯教育推進本部『昭和47年度 秋田県生涯教育推進本部のあゆみ』（1973年）、秋田県生涯教育推進本部『昭和48年度 秋田県生涯教育推進の概要』（1973年）、秋田県生涯教育推進本部事務局『生涯教育』4（1973年5月）、同『生涯教育情報』13（1977年12月）

学社研 ―太田町の生涯教育―

昭和48年1月調査「生涯教育という言葉聞いたことがあるか？」で最も低かったのは太田町（現大仙市太田町）だった。（Topics 08参照）しかし太田町では、昭和41（1966）学校教育・社会教育合同研究会（学社研）が発足し、行政・住民一体の地域コミュニティづくりを進めていた。この節では、もう一つの生涯教育「学社研」を見てみたい。

◆ 家庭教育向上の必要性

秋田県内の中学校卒業生と進路



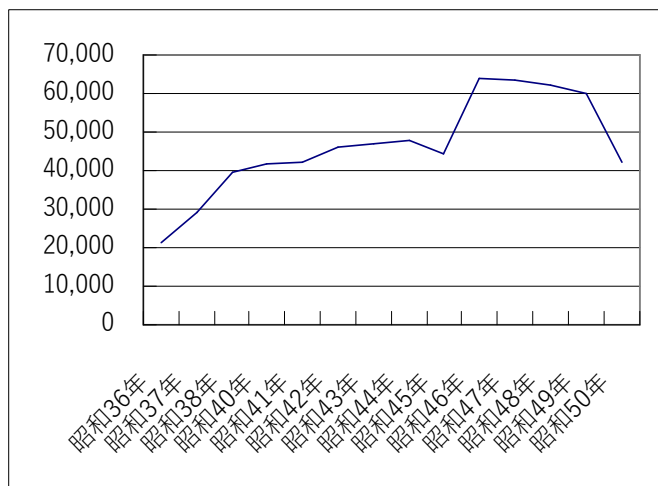
昭和30年代から始まる高度経済成長期は、秋田県内の中学校卒業生の進路にも如実に現れた。昭和34年（1959）の高校進学率は46.5%だったのが、昭和39年には60%、そして10年後の昭和49年には80%を超えている。

加えてもう一つの変化は、出稼ぎ者の増加である。昭和39年（1964）出稼ぎ問題に取り組んでいた浅利尚介社会教育主事（教育庁南出張所仙北分室）は次のように語っている。

「父親が毎年6か月間出稼ぎに出ていくと、その子は義務教育期間9年のうち半分の4年半を片親だけの環境で過ごすことになる。出稼ぎ家庭の子どもの作文をみても、彼らが父を慕う強い気持ちを知ることができる。人格形成に大きな影響のある時期における家庭教育の欠除が一番恐ろしい」

父親のいない家庭の教育力をどのように保つか。太田村（昭和44年より町制施行）が出した答えは、地域ぐるみでの教育だった。

秋田県内の出稼ぎ者数の推移



◆ 学社研の発足

昭和40年（1965）太田中学校福原市郎校長は、県教育庁南出張所に、子どもの健全な育成は学校教育・社会教育一体となって取り組むべきと提案。これを受けて、昭和41年、県南地区で「学社合同研究会」が発足し、大曲仙北地区では太田村、横手平鹿地区では十文字町、湯沢雄勝地区では稲川町がモデル市町村となった。

太田村では、学校と公民館・PTA・老人クラブ・親の会・婦人会・青年会・こども会等、地域の社会教育関係諸団体による「学校教育・社会教育合同研究会（学社研）」を発足させている。

◆ 自治省モデル・コミュニティ地区の指定

昭和47年（1972）7月3日、太田町の東部地区（旧長信田村の地域）が自治省のモデル・コミュニティ地区に指定される。町では地区住民の話合いを重ね、コミュニティづくりの方向性を右の表のように決めた。

東部地区コミュニティのテーマと内容

テーマ	内 容
自然環境	美しい自然を生かすコミュニティ
生活環境	安全で住みよいコミュニティ
健康	健康で働き、余暇を楽しむコミュニティ
出稼ぎ	家族が共に暮らせるコミュニティ
生きがい	子どもに夢を、老人に生きがいを与えるコミュニティ
人の和	助け合いの輪を広げるコミュニティ
生涯学習	みんなで学び合うコミュニティ
文化	郷土を愛し、文化を育てるコミュニティ

この年は、奇しくも県が「秋田県生涯教育推進本部」を設置した年で、テーマの一つに「生涯学習」の語が見える。

しかし、太田町の「生涯学習」は、他の市町村に見



▲ 学社合同研究会（昭和43年）



▲ 花いっぱい運動（昭和49年8月）

られたような趣味の教室ではなく、地域をつくる人材育成のためのものであり、花いっぱい運動・交通安全運動等、目に見える形で町づくりの成果を積み上げていった。

なお、太田町は昭和52年（1977）10月16日、コミュニティ活動の推進が認められ、全国177団体の一つとして自治大臣から表彰を受けている。（県内では、太田町の他に八竜町、十文字町、湯沢雄勝広域市町村圏組合が受賞）

◆ 学社研から生涯教育へ

学社研の中核は、教育長、東小学校・南小学校・北小学校の各校長、太田中教諭、大曲農業高等学校太田分校教諭、南幼稚園主任で構成された企画委員会だった。また、太田町教育委員会は、幼・小・中・高・社会教育の一環一体化した生涯教育を確立し、コミュニティづくりに適応する人間育成を重点とすることを打ち出した。学校はコミュニティセンターの役割を担い、教師が地域づくりのリーダーとして活躍した。

学社研のリーダーは、生涯教育奨励員を兼任した。昭和50年代に入って、コミュニティ活動が定着してくると、各奨励員は、自宅玄関前に「ブルーの窓口」の看板を設置し、地域における「生涯教育」の普及と学習相談の役割を担った。

太田町では、生涯教育推進開始以前に、学社研活動が軌道に乗っていた。昭和47年、生涯教育の概念が学社研運動に加味されるが、町が志向したのは、地域づくりのための「生涯学習」だった。今日「学びたい人が、学んだだけで終わりでよいのか」と生涯学習の意義が問われ、地域コミュニティづくりのための生涯学習の必要性が提唱されている。太田町の取組は、時代のニーズを先取りする形で進められていた。

〈参考資料〉『県勢要覧』（各年度）、鈴木孝治「秋田県太田町東部地区」（『地方自治』1973年7月）、東北教育学会編『コミュニティと教育』（1977年3月）、太田町『モデルコミュニティ計画（案）』（1973年）、太田町『合併40周年記念特集 広報おおた』（1995年）、秋田県広報協会『あきた』30（1964年11月）、秋田県教育委員会『秋田県の社会教育』（1974年）、[写真]（大仙市太田公民館所蔵）



シンボルマーク



キャッチフレーズ



秋田県コミュニティカレッジマーク



秋田市 関係各 家

このシンボルマークは入選作品で
「生」という文字をさがにだったもの

学ぶ輪がひろく心と郷土の未来
親と子が楽しく学ぶ明るい秋田
学んでふやそう知識と友を



秋田市 関係各 家

このマークは入選作品で、白・白・白
緑・緑・緑の「秋」を象徴、「知識の輪」と
未来への発展、生を象徴したもので

◆ 生涯教育の広報強化

秋田県生涯教育推進本部が、生涯教育のキャッチフレーズとシンボルマークの募集を決めたのは4月15日。時期的なことを考慮すると、キャッチフレーズとシンボルマークの募集は、生涯教育の広報強化の一環として計画されたものであるといえよう。

◆ キャッチフレーズとシンボルマークの募集について

〔主催〕 秋田県 〔後援〕 秋田魁新報社 〔応募資格〕 秋田県に在住する者であること
〔題材〕 生涯教育をテーマにしたものであること 〔送付先〕 秋田県生涯教育推進本部事務局
〔締切日〕 昭和48年 5 月20日
〔入賞発表〕 最優秀賞 1 名、優秀賞 2 名を審査委員会で決定し本人に通知し、6 月17日
に秋田魁新報で発表
〔応募方法〕 キャッチフレーズ、シンボルマークともに応募は一人何点でも可。
シンボルマークは、10×15cmの画用紙かケント紙に、できるだけ水彩か墨
を用いて一色で仕上げ、さらに、作品にデザインの意図を書いた紙を添付
する。キャッチフレーズは官製はがき一枚に一点とする。

◆ 応募作品審査委員と応募点数

[キャッチフレーズの部] 井上隆明（秋田魁新報社文化部長）、佐々木完二（県広報課長）
高橋彰三郎（県教育庁指導主事）、阿部七郎（秋田魁新報社広告局次長）、鎌田 宏（生涯教育推進本部主席参事）

[シンボルマークの部] 佐野祐司（秋田県工業試験場デザイン科長）、中安正衛（秋田魁新報社広告局長）、渡部景一（前秋田県中学校校長会長）、高橋千代三郎（秋田県芸文協副会長）、寺田光和（生涯教育推進本部参与）

– 26 –

キャッチフレーズとシンボルマークの制定

なかったが、キャッチフレーズは229点、シンボルマークは101点の応募があった。

審査会は、5月24日、秋田県総合庁舎4階会議室で行われた。

◆ キャッチフレーズ入選作品と審査委員の声

[最優秀賞] 学ぶ輪が ひらく心と 郷土の未来 野呂金悦（比内町）

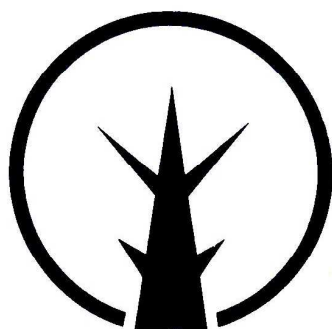
[優秀賞] 親と子が 楽しく学ぶ 明るい秋田 川口憲晃（秋田市）

学んでふやそう 知識と友を 菅原妙子（八郎潟町）

[講評]・応募が多く喜ばしかった。生涯教育は「人の和、明るい生活をつくる」「一生の幸せをつくり、生きがいを感じる」「継続していくことが大事だ」という意味のことが盛られていて（県民の中に生涯教育の）理解が進んでいると思った。

・限られた少ない字数の中で表現しようとする苦心が全作品ににじみ出て困った。

◆ シンボルマーク入選作品と審査委員の声



[最優秀賞]

越後谷 巖（秋田市）

〈デザインの意図〉

「一」人生を通じて、教育の普遍、円満な達成を念願。
「生」秋田杉育成になぞらえ、生涯教育の向上進展を表徴。生涯教育の「生」をかたどる

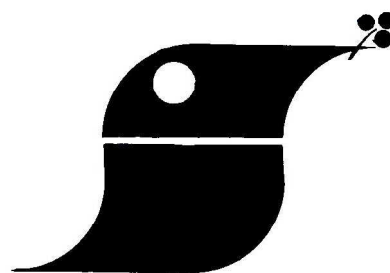


[優秀賞]

吉川文夫（秋田市）

〈デザインの意図〉

生涯教育は、人々が協力しあい、充実した生活を送ることが必要なので、男女を問わず手を取り合い、未来に向かって進んでゆこうとするものをデザインした



[優秀賞]

武藤英明（秋田市）

〈デザインの意図〉

生涯教育の頭文字「S」を三つ葉をくわえた小鳥にデザインした。幸福を運ぶ鳥

[講評]・予想外に応募作品が多かったのは、県民の生涯教育に関心が高いということを感じていると思われる。

・当選した最優秀の作品は、生涯教育の一生を表現し、人生何か一つを生涯を通して学び取るという意味と、秋田杉をもって生涯教育の進展する姿をかたどっているのがよかった。

秋田県広報課（編）「広報資料」7月号（昭和48年6月20日）によると、秋田県の生涯教育のキャッチフレーズとシンボルマークが決定したのは、昭和48年6月10日とある。時間的余裕が全くない中で、フレーズ、マーク両方合わせて330点の応募があったことは、当時の県民の間における生涯教育への関心の高さを窺うことができる。

〈参考資料〉「キャッチフレーズとシンボルマーク関係綴」（秋田県生涯学習センター所蔵）

生涯教育奨励員の誕生

令和2年の時点で、県内の市町村で活躍している生涯学習奨励員は595名。平均年令は67.5歳、最も長い方は奨励員歴44年のキャリアをもっている。

生涯学習奨励員が「生涯教育奨励員」として誕生したのは昭和49年。県内各市町村では、この年から生涯教育奨励員を配置していった。この節では、生涯教育の推進の切り札として設置された「生涯教育奨励員」誕生の様子を見ていきたい。

◆ 地域の中で誰が生涯教育を担うのか？

昭和49年（1974）2月、秋田県生涯教育推進協議会が提出した「生涯教育の付託課題についての報告書」の中に生涯教育奨励員の概念が登場する。

- | | |
|-----------|--|
| 1 専門指導者 | 専門指導者は、体系的・専門的分野での指導者であり、行政組織における指導者と有志的指導者によって構成される。 |
| 2 生涯教育奨励者 | 地域・職域・グループ等において生涯教育の特技リーダーとなり、活動を通じて住民の学習活動を奨励援助する指導者。 |

この当時、知事が生涯教育を推進すると訴えても、それを聞いた側は「誰が生涯教育を担うのか」という疑問が浮かんだに違いない。その疑問に対する明確な答えがここにある。

すなわち、専門的な知識・技術をもった指導者が学習活動を推進し、その活動を奨励援助するのが「生涯教育奨励者」としている。「生涯教育奨励者」は、翌49年「生涯教育奨励員」として各市町村で制度化されていくが、その活動に求められたのは、自ら学びつつ、地域の学習活動を世話する学習ボランティアだった。

◆ 生涯教育奨励員の誕生

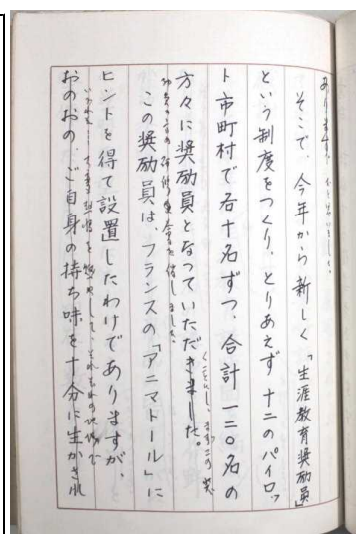
昭和49年、鷹巣町・西目村・大曲市・山本町・男鹿市・稲川町・鹿角市・河辺町・平鹿町・能代市・五城目町・西仙北町（生涯教育パイロット市町村）に生涯教育奨励員が設置される。

9月4日「楽しい生涯教育の集い」で小畑知事が挨拶した言葉の中に次の一文がある。

私はかねがね生涯教育を推進してゆく上で最も大切なのは、何といっても学習意欲を誘発する指導者を充実することだろうと思っております。その指導者は、県や市町村等行政側の指導者だけでなく、むしろ住民の中にあって学習しようとする人の仲間づくりに努めたり、自分のもっている特技なり教養をもって学習者を励まして活気を与える、いわゆる民間の指導者が一番必要だと思いました。

そこで、今年から新しく「生涯教育奨励員」という制度をつくり、とりあえず12のパイロット市町村で各10名ずつ、合計120名の方々に奨励員となっていただくことにし、まずこの奨励員の方の研修会を催しました。

この奨励員は、フランスの「アニマトール」にヒントを得て設置したわけですが、いずれも大変熱情を燃やして、それぞれの地域でボランティア活動を展開されておりまして、地域の方々から大変好評を博しております。



▲「楽しい生涯教育のつどい」
知事原稿
知事自身の手による文章の
推敲に注目したい

フランスの「アニマトール」とは「生命に動きを与え、活気づける」という概念から生まれたフランスの国家資格の生涯学習専門職員である。小畑知事はフランスの制度を輸入し、秋田県版のアニマトールを作ろうとした。これが生涯教育奨励員だったのである。

◆ 秋田県市町村生涯教育奨励員協議会結成大会

昭和51年（1976）10月14日、県正庁において「秋田県市町村生涯教育奨励員協議会結成大会」が小畑知事臨席のもとに開催された。協議会は各市町村の奨励員が、地域を超えて連携を深め、生涯教育推進運動を充実するために自発的に結成したもので、結成大会では「私たちの誓い」が採択された。

私たちの誓い

本県生涯教育に活力を与える新しいタイプの民間指導者として、各市町村に置かれた奨励員制度は、昭和49年度に始まり、発足当初は12市町村120名でありましたが、現在は全県44市町村575名に達し、年を逐って充実しつつあります。

この時に当たって、本年度は県生涯教育推進の基本方針を地域主導に置くことになり、その一環として、新たに市町村に地域の生涯教育推進の中核となる奨励室（ブルーの窓口）が設けられ、奨励員並びに地域住民のよりどころができましたことは、まことに喜ばしい限りであります。

この貴重な時期に呼応し、本日ここに奨励員同志待望のネットワークである奨励員協議会を結成し、優しさと楽しさを基調とした魅力溢れる地域主導の本県生涯教育の推進に、大きく寄与することになりました。

この際、私ども関係者一同は心を新たにし、本県生涯教育の再出発の心構えをもって、生涯教育奨励室（ブルーの窓口）の拡充と、期待される奨励員活動の実践を通し、いよいよ本県生涯教育の振興と新展開を図ることを、ここに参加者一同心から決意し誓うものであります。

昭和51年10月14日

市町村生涯教育奨励員協議会結成大会

小畑知事は、秋田県における生涯教育の真の広まりは、行政側の指導者によるものではなく、地域住民の中で、自ら学びつつ、学習者を励まし、活気を与える生涯教育奨励員の活躍にかかっていると考えていた。

採択された「私たちの誓い」は、秋田版「アニマトール」として、秋田県生涯学習50年の歴史の中で、燦然と輝いている。



▲ 秋田県市町村生涯教育奨励員協議会結成大会

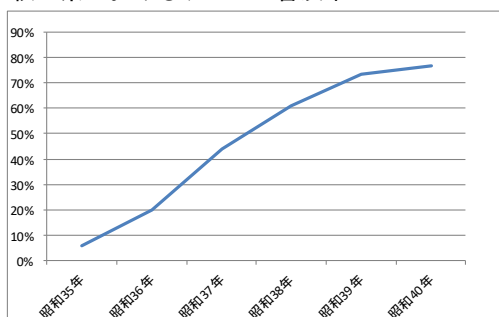
〈参考文献〉「昭和48年度 生涯教育の付託課題についての報告書」（秋田県生涯教育推進本部『秋田県の生涯教育－10年の足跡－』1980年）、同「市町村における生涯教育の進め方－実践事例を中心として－」、大津尚志・橋本一雄・降旗直子「フランスの余暇センターにおける市民性教育」（『武庫川女子大学大学院 教育学論集』7、2012年）、「知事祝辞挨拶」（秋田県公文書館所蔵、010102-00014）、秋田県生涯教育推進本部事務局『生涯教育情報』2（1976年）

放送県民大学

「最高度に発達したテレビが最低級の文化を流し、視聴者の想像力や思考力を低下させる＝『一億総白痴化』」評論家大宅壮一の言葉である。湧き上がる文化人のテレビとメディア批判を傍目に、県では、広報に計り知れない力をもつテレビを生涯教育に活用した。この節では、多くの県民が受講した「放送県民大学」をふり返ってみたい。

◆ 県内におけるテレビの普及

秋田県におけるテレビの普及率



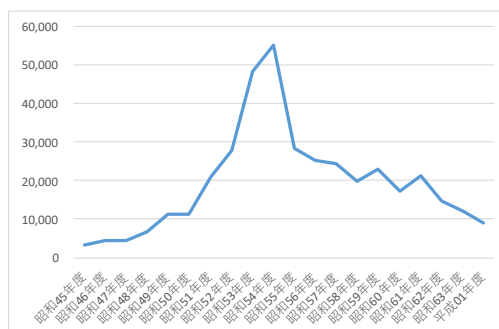
昭和28年（1953）2月1日、NHK東京テレビジョンにより、日本で最初のテレビ放送が始まる。秋田県でテレビ放送が始まるのは、昭和34年（1959）12月25日、NHK秋田放送局の開局による。

民放は、ABS秋田放送が昭和35年（1960）4月1日、AKT秋田テレビは昭和44年10月1日、AAB秋田朝日放送は平成4年（1992）10月1日に放送を開始している。

本県におけるテレビの普及率は、昭和35年（1960）には5.8%だったが、昭和40年（1965）には76.4%に増えている。テレビはわずか5年で全世帯の3/4が持つようになった。

◆ テレビ難視聴地域解消事業補助金

テレビ難視聴地域解消事業補助金の推移



テレビ受像機普及とともに問題化したのは、テレビ映りだった。県境地域では他県の映像の方がよく映り、山間部地域では電波の受信が良好でなかった。県庁内でこの問題に対処したのは教育庁社会教育課で、昭和45～47年度に「へき地地域テレビ共同視聴施設整備費補助金」事業を開始し、平成3年度まで、市町村が行う受信アンテナやミニサテ（極微小電テレビ局）の工事費への補助事業を行った。最も多額

になったのは、昭和54年度で5,494万円に及んでいる。県がテレビ映りを改善する事業に補助金を出したのは、テレビは教育のために必要との小畑知事の判断があったからである。

◆ 当時の人気番組

右の表は昭和53年（1978）2月、秋田市教育委員会が秋田市保戸野桜町町内を対象に行った、テレビ番組の視聴率調査の結果である。教養番組や生活番組が多いことに気付く。

秋田市保戸野地区における視聴率の高いテレビ番組

順位	NHK	視聴率	ABS秋田放送	視聴率	AKT秋田テレビ	視聴率
1位	黄金の日々	66.5	すばらしい世界旅行	62.6	3時のあなた	21.9
2位	風見鳥	61.9	知られざる世界	52.2	世界の旅シリーズ	15.5
3位	新日本紀行	46.5	時事放談	38.7	小川宏ショウ	15.5
4位	きょうの料理	20.7	驚異の世界	31.6	つくしんぼ	14.2
5位	明るい農村	20.6	ごちそうさま	24.2	秋田市政の窓	14.2

「どのような手立てを講じれば県民に『生涯教育』の言葉と理念が浸透するのか」

小畑知事が出した答えは「生涯教育」の放送利用だった。昭和49年（1974）4月、ABS秋田放送「たのしい生涯教育」を皮切りに、民放二社で生涯教育番組が始まった。

◆ 放送県民大学

昭和47年度「放送県民大学」が始まる。最初は秋田経済大学の「商店経営コース」、翌48年度は、幼児をもつ母親を対象として聖園学園短期大学に「幼児と家庭教育コース」を開設。49年度には聖霊女子短期大学に「国際理解コース」、50年度には秋田大学に教育・鉱山・医学の三学部を総合した「人間と環境コース」（51年度に「現代の科学コース」に改称）が開設された。

受講者は次のステップで学習を進めた。

① 指定された番組（商店経営コースは

NHK総合「1億人の経済」、幼児と家庭教育コースはNHK教育「お母さんの勉強室」・ABS秋田放送「すぎの子ひろば」、国際理解コースはNHK教育「英語会話」、現代と科学コースはNHK大河ドラマ・「NHK特集シルクロード」他）を視聴し、個人で学習を進める。

② 年6から9回、大学のスクーリングに参加する。（例：幼児と家庭教育コースでは、午前は大学で託児、午後は幼児と母親が一緒になって保育の実習を行う）

③ 番組や講義の中で分からない点は、所定の質問カードに記入し各大学に送付する。質問に対する指導は大学の講座担当教員が当たり、年6回発行の会報に質問と回答を掲載する他、スクーリングで指導を受ける。

放送県民大学は、昭和58年まで続けられ、受講生総数は5,045人に上った。

放送県民大学の参加者数

	秋田経済大学	聖園学園短期大学	聖霊女子短期大学	秋田大学	合計
昭和47年度	163				163
昭和48年度	130	92			222
昭和49年度	123	79	112		314
昭和50年度	96	100	140	54	390
昭和51年度	56	66	123	90	335
昭和52年度	50	180	124	92	446
昭和53年度	64	217	141	114	536
昭和54年度	43	227	143	162	575
昭和55年度	72	178	132	127	509
昭和56年度					483
昭和57年度					763
昭和58年度	80	33	111	85	309

* 昭和56年度、57年度の各大学の受講生数は不明



▲ 秋田経済大学放送県民大学
開講式（昭和48年5月6日）



▲ 聖園学園短期大学で開講された放送県民大学「幼児と家庭教育コース」



◆ 放送利用県民セミナー

昭和59～62年度、放送県民大学を発展・継承した「放送利用県民セミナー」が開かれる。スクーリング会場が事業を受託した県内18市町村の公民館等になり、利便性が図られた。

今から40年以上前、メモをとりながらテレビ番組を視聴した受講生がいた。幼子を連れて短大に通った若い母がいた。生涯教育の放送利用の歴史をひもとくと、知事の徹底した方針と、学ぶことで豊かな人生を生きようとした多くの県民の姿が浮かび上がる。

〈参考資料〉『県勢要覧』（各年度）、『秋田県の社会教育』（各年度）、秋田県教育委員会・NHK秋田放送局『社会教育における放送利用研究セミナー 集録』1（1977年）、秋田県教育委員会『秋田県放送利用県民セミナーの記録』（1988年）、野中和郎「秋田県における放送利用学習の現状」（財団法人 全日本社会教育連合会『社会教育』34-11、1979年11月）、同「秋田の生涯教育50年に思う」（『秋田さきがけ』2020年11月5日）

秋田県生涯教育センター（現秋田県生涯学習センター）の開所

昭和55年（1980）4月1日、秋田県の生涯教育推進の中心的総合施設として「秋田県生涯教育センター」が開所した。延床面積6,299.6㎡、鉄筋コンクリート造、地上5階、地下1階の建物は「生涯教育を専門とする施設としては、当時、日本はおろか世界でも例を見ない」（昭和55年度秋田県市町村生涯教育奨励員協議会における小畑会長挨拶）ものだった。この節では、秋田県生涯教育センター開所までの軌跡を見ることにしたい。

◆ 秋田県生涯教育センター設立理念の萌芽

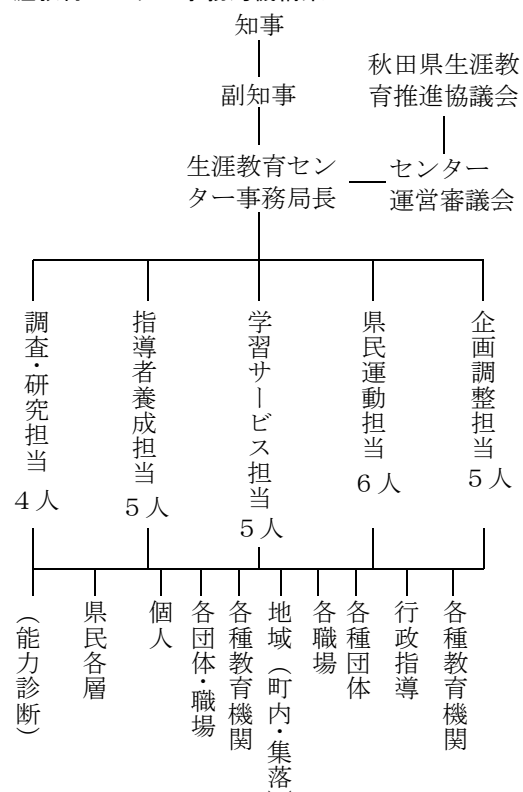
秋田県生涯教育センターの設立は、昭和45年（1970）4月1日発足の「生涯教育プロジェクトチーム」が、同年12月に提出した「生涯教育体系の確立に関する報告書」に述べられている。

この報告書で、プロジェクトチームは、生涯教育体系を構築するに当たり、既存の教育機関を次のように位置付けることを提唱している。

- ・ 学校を生涯教育体系の一環に取り込む。
- ・ 社会教育は、学校教育と密接な連携を保ち、特に成人教育を担当する。
- ・ 農政・林務・産業労働部が主管する教育施設・試験場・研修所等は、産業学園体系として連合し、職能教育の場と指導者を提供する。
- ・ 厚生部は、主に社会不適応集団の教育に協力する。
- ・ 保健所は、生涯教育の保健部門について協力する。特に幼児と老人に力を入れる。

つまり、県の全ての教育機関を、生涯学習推進のもとに位置付けたのである。そして、報告書では、これらの各種教育機関、団体の中心として、上の図の組織をもつ秋田県生涯教育センターを置くことを提唱した。

生涯教育センター事務局機構案



◆ 秋田県生涯教育推進協議会の報告書

昭和48年（1973）2月、秋田県生涯教育推進協議会は「生涯教育の付託課題についての報告書」を提出する。この中で、生涯教育の推進と実践のため各種教育機関・施設を体系化し、県域一円を対象とした総合施設「秋田県生涯教育センター」の設置が要望された。

◆ 秋田県生涯教育センターの在り方の検討始まる

昭和52年（1977）4月、生涯教育推進本部事務局、建築課、社会教育課で構成された「生涯教育センター建設庁内検討委員会協議委員会」が発足し、建設内容の検討が始まる。

また、同年6月には、常任委員、学識経験者、関係機関等による生涯教育センター建設協

秋田県生涯教育センター（現秋田県生涯学習センター）の開所

議委員会が発足し、県民の意見や要望を反映した、具体的なプラン作りが始まった。昭和53年（1978）5月12日に開かれた生涯教育推進協議会委員・本部講師団合同会議の席上、小畑知事は次のように挨拶した。

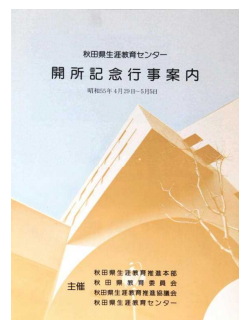
53年度の生涯教育の推進方針につきまして〈中略〉最も大きな事業は、生涯教育センターの建設であります。これは地上5階、地下1階、鉄筋コンクリート建築で延べ約6,250平方米、総事業費約13億円、場所は秋田市の県立体育館南の筋向かいを予定しております。このセンターは、建物もさることながらその内容が大事であります。

例えば、センターの機能の中にコミュニティ・カレッジの考えを導入できないか、或いは一般教養及び職業教養に関する高等教育相当の普通コース、教養及び技術の放送利用による学習コース、専門的資格を取れる社会通信教育のコース、生活学術文化等の課題を短期間に学習するコース等を設定することはどんなものか、今いろいろ構想を練っておりますが、以上のようなことについて皆さんの率直なご意見を拝聴いたしたいと考えております。

注目したいのは、小畑知事は当初より「コミュニティ・カレッジ」の構想をもっていたことである。「コミュニティ・カレッジ」は、開所後の県生涯教育センターの教育・研修事業の中核となっていた。

◆ 秋田県生涯教育センター開所

昭和55年（1980）4月26日、秋田県児童会館、秋田県立子ども博物館、秋田県生涯教育センターの落成式典が執り行われた。



▲ 三館合同の落成式と生涯教育センター定礎式

生涯教育センター開所記念行事案内 ▲

次の文は、秋田県生涯教育センターの定礎に納められた「定礎銘」である。

生涯教育 それは教育のよみがえりを告げる警鐘であり 秋田の生涯教育の歩みは まさに日本の生涯教育を照らす曙光であった

この十年の記念すべき年に当たって 県民の豊かな学習活動を助長し 全ての人びとの自己実現を図るため ここに秋田県生涯教育センターを設置する

県民が有限の人生の中で 無限の可能性にいどみ 豊かな文化を創造し 秋田の新しい教育的風土が醸成されることを祈念し ここに永遠（とわ）のいしずえを定める

昭和五十五年四月二十六日

秋田県知事 佐々木喜久治

開所記念行事は4月29日から5月5日にかけて行われ、一般県民1,670名が参加した。

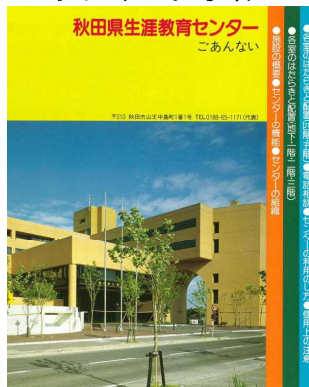
◆ 県民の声

秋田県生涯教育センターの開所を、当時の秋田県民はどのように捉えたか。横手市・荒川吉弥氏の言葉を紹介したい。

全国に先がけて秋田市山王中島町にこのたび、県民文化創造の殿堂・秋田県生涯教育センターの完成を見るに至り、県民にとって誠にありがたき幸せ、この上ない喜びであります。この素晴らしい新装の殿堂こそ、県民の生命の泉、県民の希望の源としての誇りで、この御事業に御尽力なされた先輩各位の御誠意に県民自体、感謝の念を深く刻んで、活用に充実に努力をもち、80年代秋田県教育のあり方に大きな活気を浴びる新生涯教育の発祥を見たのであります。

荒川氏は、県生涯教育センターの開所を秋田県における「新生涯教育の発祥」と見ている。県生涯教育センター開所から40年。私たちは、この感動を忘れてはならない。

◆ 秋田県生涯教育センターに求められた機能



▲ [パンフレット] 秋田県生涯教育センター

秋田県の生涯教育は、昭和45年の推進開始以来「全ての県民に生涯にわたる学習の機会と場を保障するとともに、生きがいを目指し、いつでも、どこでも、学び合うという、新しい教育的風土を醸成しようとする実践活動」として進められてきた。秋田県生涯教育センターの開所により、秋田県の生涯教育の概念は右頁の図のようになった。システム上は、家庭教育、学校教育、社会教育の各段階が有機的に結び付いたが、これを具現化する鍵は、各段階の結び付きをいかに強めるかにかかっていた。

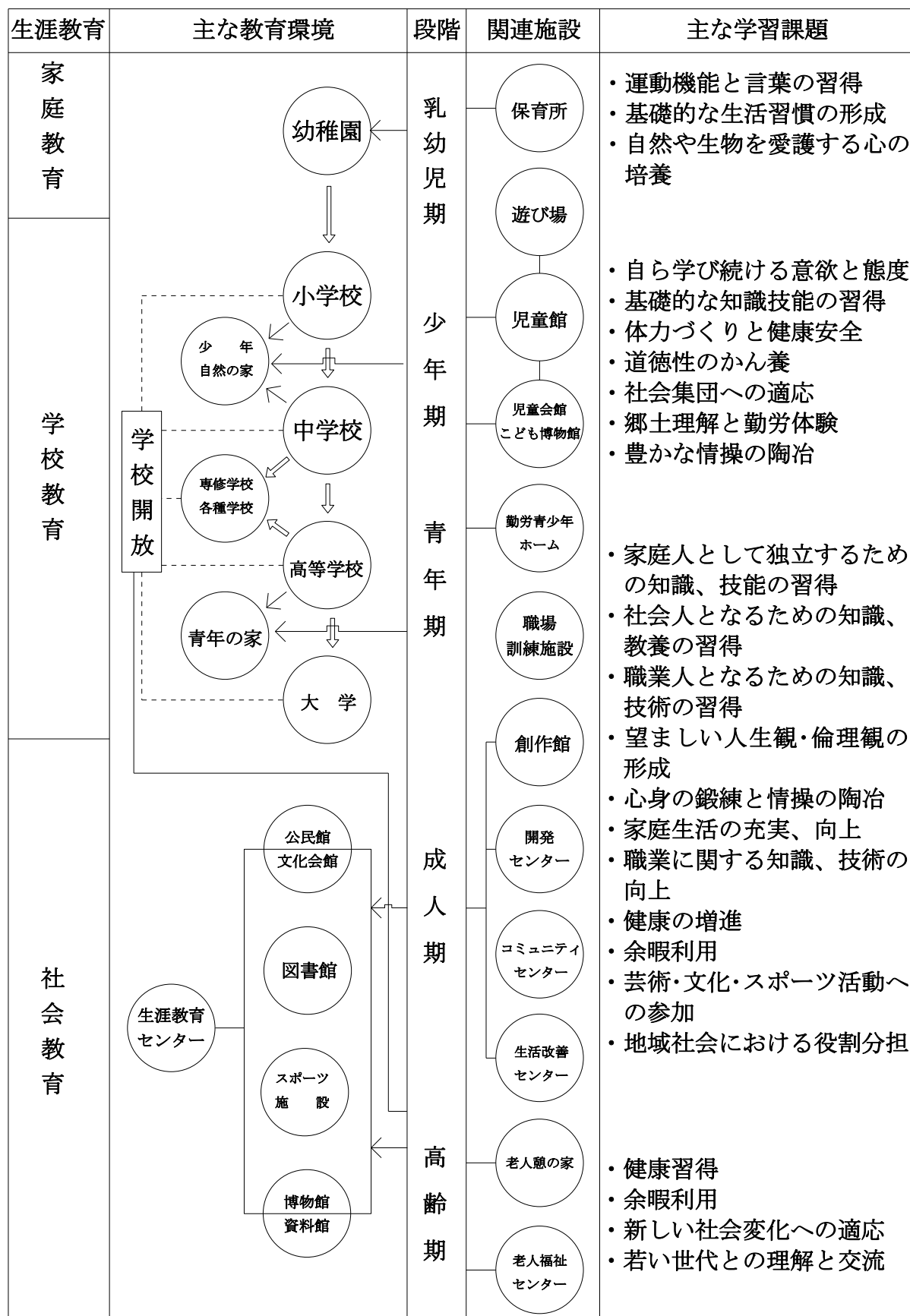
秋田県生涯教育推進協議会による、昭和58年（1983）3月の『当面する生涯教育の課題についての報告』を見ると「幼児教育の充実」「学校教育と社会教育の連携のあり方」「生涯教育関連団体の連携による地域学習の推進」の重要性を訴えており、とりわけ3番目については、県生涯教育センターと市町村との共同研究の拡充が必要だとしている。

秋田県生涯教育センター設立の理念は、昭和45年（1970）小畑知事の生涯教育推進の提唱とともに生まれた。それから10年を経てのセンター開所は、小畑県政における生涯教育推進の大きな目標だったといえる。秋田県生涯教育センターは、平成元年（1989）4月1日「秋田県生涯学習センター」へ名称が変わり今日に至る。センター開所直後に始まった「秋田県コミュニティ・カレッジ」は、現在「あきたスマートカレッジ」として続いている。

〈参考文献〉生涯教育研究チーム「生涯教育体系の確立に関する報告（案）」（1970年）、秋田県生涯教育推進本部事務局『昭和52年度 生涯教育推進のあゆみ』、秋田県生涯教育推進本部『生涯教育情報』16（1978年5月）、『同』19（1978年8月）、『同』28（1980年3月）、『同』29（同年7月）、秋田県生涯教育推進本部『生涯教育推進体制のあらまし』（1982年）、秋田県生涯教育推進協議会『当面する生涯教育の課題についての報告』（1983年）、秋田県生涯教育推進協議会・生涯学習研究開発委員会『生涯学習プログラム（研究試案）』（1985年）、「知事祝辞挨拶」（秋田県公文書館所蔵、010102-00033）

秋田県生涯教育センター（現秋田県生涯学習センター）の開所

生涯にわたる教育のための主な環境と学習課題

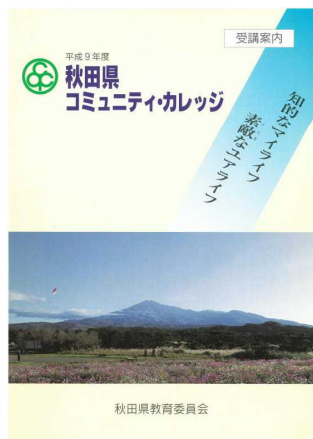


秋田県生涯教育推進本部『生涯教育推進体制のあらまし－昭和57年度版』（1982年）

「秋田県コミュニティ・カレッジ」から「あきたスマートカレッジ」へ

「秋田県コミュニティ・カレッジ」は、昭和55年（1980）秋田県生涯教育センター開所3か月後に始まった学習講座である。「秋田県コミュニティ・カレッジ」は幾度かの名称変更を経て、現在「あきたスマートカレッジ」として連綿と続いている。この節では、秋田県生涯学習センターで開催されてきた学習講座の変遷から、生涯学習を取り巻く時代の変遷を読み解いていきたい。

◆ 秋田県コミュニティ・カレッジ（昭和55年度～平成9年度）



▲【パンフレット】平成9年度
秋田県コミュニティ・カレッジ
（最終年度）

昭和55年（1980）7月27日に開講した「秋田県コミュニティ・カレッジ」は、県生涯教育センターで履修するコースとNHKテレビ大学講座の視聴を中心に履修するコースがあった。

センターで履修するコースは「英米文学原書講読コース」や職業教育分野である「職業生活研究コース」といった、履修者の高度な素養が求められる講座を開設したところに特徴がある。

テレビ大学視聴コースは「放送県民大学」の流れをくむもので、毎週月～土曜日放送の「NHKテレビ大学」を視聴し、レポートの提出と年6回のスクーリングによって履修するものであった。このコースは、昭和58年度まで開設された。

昭和58年度「秋田県コミュニティ・カレッジ」は、県北・中央・県南の三地区で開催されるようになり、それぞれ「北コミュニティ・カレッジ」「中央コミュニティ・カレッジ」「南コミュニティ・カレッジ」と呼称された。

職業教育の講座は昭和63年度まで、英語・英会話系の講座は平成8年度まで実施された。また、平成9年度には、一年のみであるが「ハングル基礎」を開講している。

◆ あきた県民カレッジ（平成10年度～平成19年度）



▲ あきた県民カレッジ学習手帳

「あきた県民カレッジ」は、約3,000時間に及ぶ自由時間を、豊かな人間性を磨く機会として捉える「遊・学3000」の標語のもと平成10年度に始まった。講座はカレッジ主催講座と連携講座があり、カレッジ主催講座には、県生涯学習センターで開催する「あきた学専修コース」と地域課題や地域づくりを考える「広域的課題コース」、そして秋田経済研究所と聖霊女子短期大学を会場に行う「現代リフレッシュ学コース」があった。

カレッジ連携講座は、県生涯学習センター以外の市町村公民館・大学・短大等が実施する講座で、参加者にはセンター主催の講座と同じ学習単位が認められるシステムが採られた。平成13年度からは「学びのボランティア」募集が始まり、翌14年度には「マナビィ・スタッフ」と名称がつけられ養成研修が始まる。研修では、県民カレッジ受講修了者が、学んだ成果を社会に還元するため、新たな講座の企画・運営や情報誌の発行を学んだ。なお、マナビィ・スタッフ養成研修は、平成18年度まで実施された。

◆ 美の国カレッジ（平成20年度～平成23年度）

平成20年（2008）6月28日に開講した「美の国カレッジ」は、地域活性化を支援する講座が盛り込まれていた。これは秋田県を取り巻く、人口減少問題への意識の高まりを反映してのことである。

講座開始初年度、上小阿仁村と潟上市で「地域マイスター養成講座」を開講し、地域を元気にするための人材育成を開始した。翌21年度の「あきた学専門講座」には「あきた学ー秋田で元気に！」が開かれる。それまで「元気」を標榜するセンターの講座は「元気up！健康ゼミ」のように、個人の健康増進・体力維持を目的とする講座に使われる用語であったが、社会的活力の底上げを図ることを目的として使われたのは、これが最初である。



▲[パンフレット]美の国カレッジ（初年度）

◆ 美の国アクティブカレッジ（平成24年度～平成26年度）

平成23年（2011）9月、秋田県生涯学習推進本部は「秋田県生涯学習ビジョン」を策定し「全ての県民が行動人（こうどうびと）になる」ことを目標に掲げた。平成24年度「美の国カレッジ」に「アクティブ」がついたのは、この「行動人」の理念を反映してのものである。

従前の「あきた学専門講座」は「あきたふるさと学講座」となり、その講座の中に「あい LOVE あきた」が設けられた。参加者に郷土愛と誇りを呼び覚ます画期的な講座である。

◆ あきたスマートカレッジ（平成27年度～現在）

平成27年（2015）4月25日に開講した「あきたスマートカレッジ」は「活発な・粋な・高性能な」等を意味する「スマート」の語がついた。平成28年度からは「東大史料編纂所特別講座」が開かれ、県の歴史史料を活用した専門家の研究成果を県民に直接還元したり、平成29年度からは「ビデオで地域紹介をしよう」「地方創生のファシリテーターになろう」等の講座が開かれ、学んだことを生かして行動するという行動人の理念を、実践的に支援する学習機会が創られたりしている。

「あきたスマートカレッジ」が大きく変わるのは、平成30年度以降である。この年、社会の共生社会への視点をもった「点訳ボランティアになろう」が開設された。

令和元年度には「地域・家庭応援隊エアンベで活動しよう」「地域の魅力発信ーおらほの地域自慢ー」「『障害者スポーツ』を通じて障害者の生涯学習について考えよう」が開かれた。

令和2年度は「障害のある方のための防災スキル」を実施した。昨今、県生涯学習センターが取り組んでいるのは、地域への誇りをもち、かつ社会的弱者を支える知識・技能をもった人材の育成である。今後、県生涯学習センター主催の講座がどのように彩られていくのか、大いに期待したい。

秋田県生涯教育センター・生涯学習センターで開かれた講座は、生涯学習は誰にとって、何のために必要なのか、という問題意識のもとに開講されてきた。この50年間をふり返ってみると、文化・教養系中心のラインナップから、地域コミュニティ存続のためのスキルアップを目的とした講座が主流を占めるようになってきている。

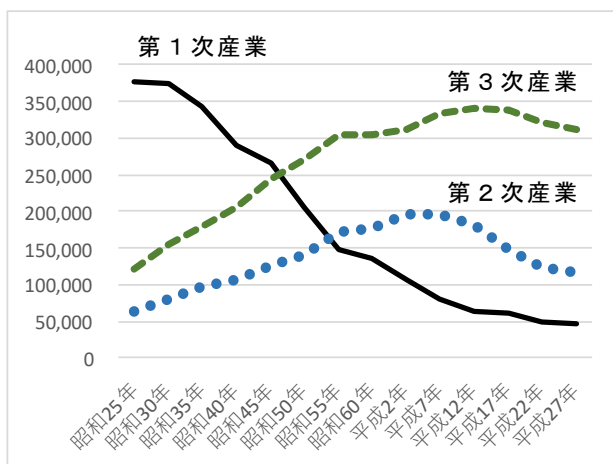
〈参考文献〉「秋田県コミュニティ・カレッジ」、「あきた県民カレッジ」、「美の国カレッジ」、「美の国アクティブカレッジ」、「あきたスマートカレッジ」（各年度の学習案内）

生涯教育における企業内教育・職業教育

小畑知事は、生涯教育とは学校教育・社会教育・家庭教育のみならず、企業内教育をも包含していると考えていた。この節では、生涯教育の一環として行われた企業内教育・職業教育の実施と、その終焉について見てみよう。

◆ 生涯学習における企業内教育の必要性

産業別就業者数の変遷



小畑知事が生涯教育の推進を図った背景には、秋田県民の就業形態の変化がある。昭和30年代以降、第1次産業に従事する人の数が減り、一方で第2次・第3次産業に従事する人の増加が顕著になった

農業・林業・水産業の従事者が、他の業態に就き、それまでの生業が兼業となる。この変化の中で、県民の中に必要なスキルを学びたいというニーズが生まれた。

小畑知事は、企業内教育の必要性について次のように語っている。

これまでの企業内教育は企業サイドからのものが多かったと思います。新入社員と管理者が対象で、中間層の教育が欠けていたように思います。しかも、仕事が単純であればあるほど、まじめな従業員は働く意欲を失うという状況が生まれてきております。

これからの企業内教育は、経営の手段として従業員の教育を考えるのではなく、仕事を通して自己を生かしていくために必要な、新しい段階の教育が大切であることを示しているわけであります。

◆ ヤクルト能代営業所・能代市公民館連携事業「ヤクルト婦人学級」の例

昭和47年（1972）、能代市公民館によると、29%の就労婦人が「現金収入が増えて家計が楽になった」と考えているが、その一方で「家事がおろそかになった」「健康を損ねた」「子どもの教育が心配」との、職業と家事の両立に悩んでいると報告している。

ヤクルト能代営業所では、能代市公民館と連携し、能代営業所管内の従業員を対象に、昭和48年11月から翌年3月にかけて婦人学級を実施。内容は、公民館が原案をつくり、従業員の希望を取り入れて決定した。その際、学習希望が一番多かったのは自分や家族の健康で、参加対象者全員が婦人学級未経験者であることから、講義形式を減らす工夫をしている。

ヤクルト能代営業所は、職業教育の中心は、従業員の人づくりであり、次年度以降は接客

昭和48年度ヤクルト婦人学級

日 時	テーマ	内 容	会 場
11月19日	開講式・働く婦人の健康① 体力測定	体力測定	市民体育館
12月17日	働く婦人の健康② 病気	血液比重測定	能代保健所
1月	働く婦人の健康③	料理実習	中央公民館
2月19日	これからの親と子のつきあい方	母親としての心づかい	中央公民館
3月24日	閉講会	講義「米価の決め方」	中央公民館

技術や対人関係を講座内容に加えることを決めていた。

◆ 秋田県コミュニティ・カレッジにおける職業教育

昭和55年（1980）に実施された「生涯教育に関する県民の意識と活動の実態調査」によると、一般社会人の学習者が取り組んでいる学習内容は、男女とも「職業に関する知識・技術」が最も多かった。同55年、秋田県生涯教育センターの開所に伴い始まった「秋田県コミュニティ・カレッジ」には、職業教育関連講座が開設されていた。

さらに、昭和57年度からは、活力ある職場づくりを目指すことを目的に「職場小集団セミナー」として再スタートした。講師は、産業能率大学経営研究所の職員、秋田経済法科大学の教員、県内企業の管理職が勤めた。リニューアル1年目の57年度は、県内25企業から88名の受講生が参加、2年目の58年度は、25企業から95名が参加している。

当時、県内企業に従事する労働者の研修は、同業組合、商工団体、職業訓練機関の他、公的機関団体が主催する研修に参加するのが主流で、職場小集団活動を導入している企業はごく少数だった。

時代が昭和から平成に移り、企業が社員教育を独自で行うようになったことで、県の事業としての職業教育・企業内教育は役割を終えた。

秋田県コミュニティ・カレッジにおける職業教育関連講座

年 度	講座名	主な講義内容
昭和55年度	職業生活研究コース	職場の人間関係、文章表現の技法と演習
昭和56年度	豊かな職業生活をめざすコース	広告・宣伝の理論と技法
昭和57年度	職場小集団セミナー	小集団の作り方、問題発見を進める技法
昭和58年度	職場小集団セミナー	問題の発見と解決活動を進める技法
昭和59年度	職場小集団セミナー	基礎コース（グループ討議、課題の設定他） 応用コース（燃える小集団活動を展開するためのリーダー・支援者の在り方他）
昭和60年度	職場の教育セミナー	部下の指導、職場の状況を把握する方法
昭和61年度	職場の教育セミナー	小集団活動や管理者等のあり方
昭和62年度	職場の教育セミナー	基礎コース（基本的なビジネスマナー） 管理者コース（人事・労務管理、問題解決能力の向上）
昭和63年度	職場の教育セミナー	前期（職場の人材育成） 後期（企業における管理者行動）

昭和57年度特別講座「職場小集団セミナー」カリキュラム

項 目	内 容
小集団の作り方	メンバーの適正規模、編成範囲、リーダーの選び方、目標の取り上げ方
リーダーの在り方とトレーニング	リーダーの役割と心得、活動の在り方、リーダーシップ養成の方法等
問題発見・解決活動を進める技法	討議の進め方、統計技法の使い方、問題解決技法の使い方等
活動意欲の高め方	変化に富む魅力的活動の在り方、自律的活動の奨励、活動スキルの洗練法等
活動のまとめと見直し	進行状況のCheck、活動のまとめと報告、評価と見直し方、記録・整理等



▲ 昭和63年度 職場の教育セミナー

県が進める生涯教育は、地域・職場・家庭・学校等あらゆる生活の場で、人びとの成長段階に即応した学習が行われることが基本であった。企業内教育・職業教育は、その一環をなすもので、生産や販売の向上に役立つ内容ばかりでなく、自己啓発を取り入れるカリキュラムを企業に求めた。昭和55年に秋田県生涯教育センターが開所すると、昭和63年度まで、専門的な講義も行われる職業教育を実施した。

〈参考文献〉小畑勇二郎『生涯教育の構想とその実践』秋田県生涯教育推進本部（1973年）、秋田県教育委員会『職場における学習活動の事例集』（1976年）、秋田県生涯教育推進本部・秋田県生涯教育センター『生涯教育情報 秋田』55（1984年1月）

生涯教育から生涯学習へ

「生涯教育」と「生涯学習」では何が異なるか？
この節では、二つの語の理念の整理から法制化に至る過程を見ることにしたい。

◆ 昭和56年 中央教育審議会答申「生涯教育について」

昭和56年（1981）6月、中央教育審議会は「生涯教育について」を答申する。答申は「生涯教育の意義」について、次のように述べている。

今日、変化の激しい社会にあって、人々は、自己の充実・啓発や生活の向上のため、適切かつ豊かな学習の機会を求めている。これらの学習は、各人が自発的意思に基づいて行うことを基本とするものであり、必要に応じ、自己に適した手段・方法は、これを自ら選んで、生涯を通じて行うものである。その意味では、これを生涯学習と呼ぶのがふさわしい。

この生涯学習のために、自ら学習する意欲と能力を養い、社会の様々な教育機能を相互の関連性を考慮しつつ総合的に整備・充実しようとするのが生涯教育の考え方である。言い換えれば、生涯教育とは、国民の一人一人が充実した人生を送ることを目指して生涯にわたって行う学習を助けるために、教育制度全体がその上に打ち立てられるべき基本的な理念である。

このような生涯教育の考え方は、ユネスコが提唱し、近年、国際的な大きな流れとして、多数の国々において広く合意を得つつある。また、OECDが、義務教育終了後における就学の時期や方法を弾力的なものとし、生涯にわたって、教育を受けることと労働等の諸活動とを交互に行えるようにする、いわゆる“リカレント教育”を提唱したのも、この生涯教育の考え方によるものである。

ここで注目すべき第一は「生涯学習」と「生涯教育」の理念を整理している点である。すなわち、学習者が自発的意思に基づく学習が「生涯学習」、それを支える社会の教育機能を「生涯教育」としている。ちなみに、国の公の文書の中で「生涯学習」という語が使われたのはこの答申が最初である。第二は、生涯教育を義務教育終了後の教育として捉えるのではなく、教育全体を生涯教育の視点から構築しようとしている点である。そして第三は、この考え方は世界的な潮流としている点である。

◆ 昭和62年 臨時教育審議会答申と文部省生涯学習局の設置

昭和59年（1984）8月、総理大臣の諮問機関として臨時教育審議会が置かれ、昭和60年（1985）から62年（1987）にかけて4次にわたる答申を出した。最終答申である第4次答申では、「個人の尊厳、自由・規律、自己責任の原則に基づく個性重視の原則」、「学校教育中心の考えから脱却する生涯学習体系への移行」、「国際化や情報化等の変化への対応」の3点を改革の視点とし、生涯学習体系への移行を主軸とする教育体系の総合的再編成が提言された。

昭和60年（1985）6月の臨時教育審議会第1次答申直後、内閣に教育改革推進会議が設置され、7月には文部省内に教育改革推進本部が設置される。昭和62年（1987）10月「教育改革に関する当面の具体的方策－教育改革推進大綱－」が閣議決定され、昭和63年（1988）6月、文部省は社会教育局を廃して生涯学習局を設置し、筆頭部局とした。

◆ 自治体へ伝播する組織改編の流れ

文部省の組織改編の動きは全国へ波及し、各都道府県、市町村教育委員会では、既存の社会教育部（課）から生涯学習部（課）への機構改革が相次いだ。

秋田県では、平成元年（1989）4月1日に「秋田県生涯教育推進要綱」を全面改定し「秋田県生涯学習推進要綱」を制定し、生涯学習推進体制の整備を社会教育行政の重点施策とした。同日「秋田県生涯教育センター」は「秋田県生涯学習センター」となり、5月26日には「秋田県市町村生涯教育奨励員協議会」が「秋田県生涯学習奨励員協議会」に改称している。

◆ 「生涯学習」理念の法制化

平成2年（1990）1月、中央教育審議会は「生涯学習の基盤整備」についてを答申する。ここで注目すべきは、地域における生涯学習の中心機関として「生涯学習センター」の設置を提言していることである。

地域における生涯学習をより一層推進していくためには、学習機会を提供するだけでなく、人々が学習機会を選択したり、自主的な学習活動を進めることについて援助を行うことも大切である。今後は特に、生涯学習に関する情報を提供したり、各種の生涯学習施設相互の連携を促進し、人々の生涯学習を支援する体制を整備していくことが重要である。このため、それぞれの地域の生涯学習を推進するための中心機関となる「生涯学習推進センター」（以下、「推進センター」という。）を設置することが必要と考えられる。この「推進センター」は、その果たすべき機能や人々の学習活動圏の広がりにかんがみ、都道府県が設置し、次に掲げる事業を集中して行うことが適当である。

なお、現在でも、これらの事業の一部を行う機関を設置している都道府県もあり、これらについては、その機能を一層充実することにより、「推進センター」として整備を図っていくことが望まれる。

- 1 生涯学習情報の提供及び学習相談体制の整備充実に関すること
- 2 学習需要の把握及び学習プログラムの研究・企画に関すること
- 3 関係機関との連携・協力及び事業の委託に関すること
- 4 生涯学習のための指導者・助言者の養成・研修に関すること
- 5 生涯学習の成果に対する評価に関すること
- 6 地域の実情に応じて、必要な講座等を主催すること

なお、放送大学との連携・協力を行うこと

この答申を受けて、平成2年（1990）6月「生涯学習の振興のための施策の推進体制の整備に関する法律（生涯学習振興法）」が制定される。

平成18年（2006）教育基本法が改正され、第3条に生涯学習の理念が規定され、生涯学習体系の法的根拠が確立された。

秋田県の生涯教育は、昭和56年（1981）の中教審答申よりも早く開始され、生涯学習センター設置についても平成元年の中教審答申よりも早かった。秋田県の動きは時代の先端を行くものであり、言い換えると、秋田の方式に時代が追いつく構図だったといえる。

〈参考資料〉『教育委員会月報』483（1990年11月）、千葉聡子「学校教育における生涯学習理念理解の問題性」（文教大学教育学部『教育学紀要』39、2005年）、井上講四「生涯教育（学習）政策・研究の今日的状況とその諸相」（『琉球大学生涯学習教育研究センター研究紀要』1、2007年）、笹井宏益・中村 香『生涯学習のイノベーション』玉川大学出版部（2013年）、河野和枝「日本の生涯学習政策の動向と課題」（『北星学園大学社会福祉学部 北星論集』51、2014年）

秋田県における生涯教育・生涯学習大会の変遷

昭和52年（1977）11月4日「生涯教育推進全県大会」が開かれる。全県大会は、昭和63年度に「秋田県生涯教育県民のつどい」に、さらに、平成7年度から16年度にかけて「秋田県生涯学習フェスティバル」に名称変更。平成17年度からは「秋田県生涯学習・社会教育研究大会」となり今日に至っている。

この節では、毎年開催される生涯教育・生涯学習の成果発表の場が、時代とともにどのように変化したのかを追ってみたい。

◆ 生涯教育推進全県大会（昭和52年度～昭和54年度）、生涯教育推進研究大会（昭和56年度～昭和62年度）



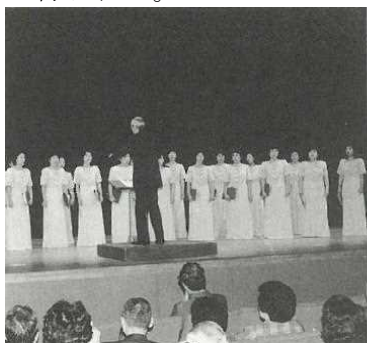
秋田県主催の生涯教育大会の最初は、昭和52年（1977）11月4日、第100回種苗交換会の協賛事業として開かれた「生涯教育推進全県大会並びに講演会」である。（会場：秋田県立大曲高等学校）大会は、小畑知事の挨拶、生涯教育奨励員の活動発表の後、午後、酒井広氏（NHKチーフ・アナウンサー）による「くらしと生きがい」の講演が行われた。「生涯教育推進研究大会」は、昭和56年に「生涯教育推進研究大会」と名称を変更し、昭和62年度まで毎年開催された。

◆ 秋田県生涯学習県民のつどい（昭和63年度～平成6年度）

「秋田県生涯学習県民のつどい」は、生涯学習社会に対応し、幼児から高齢者まで各世代で楽しく学習活動を進めている県民が一堂に集い、日頃の学習体験や文化活動を発表しあう会である。前年度まで開催されていた「生涯教育推進研究大会」を発展させた会で、平成6年度まで毎年開かれた。

昭和63年度に開催された最初の「つどい」は、県生涯教育センターと県児童会館を会場に、奨励員・関係者・一般県民等、約750名が参加。会は佐々木喜久治知事の挨拶で始まり、実践発表の後、秋田市けやき平幼稚園児による体操、秋田和洋女子高校の民謡、児童文化クラブの民謡、河辺町奨励員による舞踊、秋田女声合唱団によるコーラス等が披露された。

その後、青木一雄氏（元NHKアナウンサー）による「ゆうもあで活かす人間関係」の講演が行われた。



▲ 秋田女声合唱団



▲▲ 和洋女子高校 ▲ 河辺町奨励員



▲ 秋田市けやき平幼稚園児体操

秋田県における生涯教育・生涯学習大会の変遷

◆ 秋田県生涯学習フェスティバル（平成7年度～平成16年度）

年一回の生涯学習活動の発表の会が、祭典的な色彩を帯びたのは、平成7年度から16年度にかけて開かれた「秋田県生涯学習フェスティバル」である。

平成7年（1995）10月13日から15日にかけて開催された「秋田県生涯学習フェスティバル'95 in あきた」は秋田市内7会場で行われ、ジョイナスフェスティバルや熱気球体験乗船会も実施された。



▲ ジョイナスフェスティバル

生涯学習フェスティバル'95 in あきた

月 日	事業名	会 場	内 容
10月13日	オープニングセレモニー	県児童会館	式典・記念講演他
10月13日～27日	生涯学習創作展	県生涯学習センター	生涯学習活動作品展示
10月13日～14日	生涯学習創作コーナー	県生涯学習センター	創作活動への挑戦
10月14日～15日	ジョイナスフェスティバル	ジョイナス	アマチュアバンド・コンクール、囲碁・将棋講習、公開対局
10月14日～15日	少年少女チャレンジ講座	県生涯学習センター・県立子ども博物館・県立図書館	パソコン、星座観察、しかけ絵本づくり
10月14日	ファミリー広場	市民グラウンド	熱気球、ボーイスカウトコーナー、ガールスカウトコーナー他
10月15日	グレートアカデミー学園祭	県生涯学習センター	学習活動の紹介・講演
10月13日～15日	企業福祉機器展	県生涯学習センター	ニューメディア、福祉機器の紹介
10月14日	少年少女サークル活動研究協議会	県児童会館・県生涯学習センター	児童・生徒の体験発表、講演、体験コーナー
10月15日	学習ボランティア交流会	市文化会館	講演、パネルディスカッション
10月13日～15日	自主活動紹介コーナー	県生涯学習センター	自主活動グループの作品、パネル等の展示



▲ 生涯学習創作展



▲ 熱気球



▲ ファミリー広場フリーマーケット

秋田県生涯学習フェスティバルは平成8・10・12年度は秋田市、9年度は大館市、11年度は大曲市、13年度は能代市、14年度は本荘市、15年度は湯沢市、16年度は男鹿市で開催された。

◆ 秋田県生涯学習・社会教育研究大会（平成17年度～現在）

「秋田県生涯学習・社会教育研究大会」は、平成16年度男鹿市で開催された「秋田県生涯学習フェスティバル」におけるイベントの一つとして始められた。平成17年度以降、多額の予算を必要とするフェスティバルは開催されなくなり、「秋田県生涯学習・社会教育研究大会」が生涯学習の成果発表の場となり、今日まで続いている。

秋田県の生涯教育・生涯学習の成果発表の会は、最初はつましやかに開いていたものが、平成に入り巨大なイベントと化し、再びつましやかな会に戻る歴史をたどった。

生涯学習を推進するに当たり、本当に必要なことは、人の集う華やかな祭典なのか、地に足のついた活動発表の場なのか。秋田県生涯学習50年の歴史は、私たちに一つの問いを投げかける。

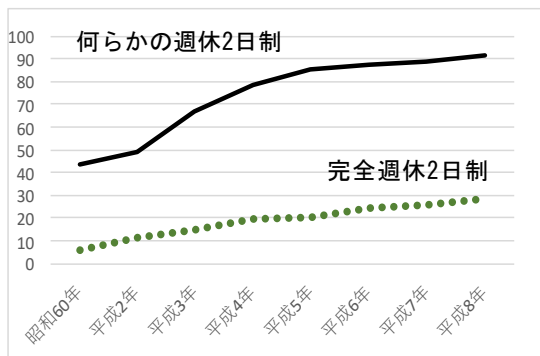
〈参考文献〉秋田県生涯教育推進本部事務局『生涯教育情報』14（1978年2月）、秋田県生涯教育推進本部・秋田県生涯教育センター『生涯教育情報 秋田』88号（1988年11月）、秋田県生涯学習推進本部・秋田県生涯教育センター『豊かさへの旅』40（1995年12月）、『秋田県の生涯学習・文化財保護 施策の概要』（各年度）

社会の変化に対応する生涯学習

平成時代、県はそれまでにない生涯学習の取組を行っている。この節では、ボランティア、青少年育成、定住外国人への日本語教育問題を取り上げ、事業開始の背景を探る。

◆ 「生涯学習ボランティア」概念の始まり

週休2日制の企業数割合



厚生労働省「賃金労働時間制度等総合調査」(1996)
より作成

平成初年代(1990年代)週休二日制を採用する企業が多くなる。

平成3年度、県は、労働者の余暇時間増加を見据え、様々な分野で学習した成果を公民館等の社会教育施設でのボランティア活動に生かす「社会教育施設ボランティア活動推進事業」を実施した。しかし、この時代、県民の間に「ボランティア」という言葉や概念は十分に浸透していなかった。平成6年、県発行のガイドブックには次のようにある。

- ・「私は***という活動をボランティアでやっています」と使うように心掛けてください。
- ・ボランティア活動は「私はやりたいからやっているのだ」という気持ちを身に付けることが大切です。
- ・ボランティア活動は責任の重い使命感が必要な活動です。
- ・人のために働いたとしても、お金をもらうことを目的とした活動は、ボランティア活動とはいいいません。
- ・ボランティア活動といえば、老人ホームや障害をもった人のために何かをすることだと思っている人も少なくないかもしれませんが、福祉活動だけがボランティア活動ではありません。

そして「公民館・図書館・博物館・資料館・青少年教育施設等で、学びながら活動し、活動しながら学ぶ、この全ての営みが生涯学習ボランティアです」と説明している。

こうした中、平成7年(1995)に発生した阪神・淡路大震災で多くのボランティアが活動したこともあり、この年は日本における「ボランティア元年」として記憶されている。また、平成9年(1997)第52回国連総会は、満場一致で2001年を「ボランティア国際年(International Year of Volunteers)」とすることを定め、ボランティアの理解・参加促進のための環境整備・ボランティアネットワークの強化・活動の促進が図られることになった。

平成13年(2001)秋田県生涯学習センターでは、生涯学習ボランティア活動の開始を告知し、翌年、ボランティア・グループには「マナビィ・スタッフ」の名称が付いた。

◆ 就職氷河期世代への支援

平成10年代は、若者の就職難が社会問題化し、メディアは「就職難世代」「失われた世代(Lost Generation)」と呼称した。その中で、フリーター(非正規雇用者)やニート(Not in Education, Employment or Training)の若者への政策的支援が急務となった。

この頃の県の施策を見ると、それまでにない新たな取組を開始している。第一は、平成14年度から始まる「地域教育力・体験活動等推進事業」である。その中心は「おやじ変身！講座」である。アウトドア・ブームの到来や育児に力を入れる父親の推奨等もあり、父は仕事、母は家事・育児という家族像、父親像の変革に一石を投じた。

第二は、平成16年度開始の「ゆうスペース」、17年度開始の「青少年居場所づくり事業」、18年度開始の「なまはげキャンプ」である。これらは、対人関係に悩む若者当人を対象とした事業である。就労困難な厳しい社会であっても負けない人材育成を図っている。

第三は、平成18年度に始まる「元気な母ちゃん・父ちゃん子育て支援事業」「地域で進める親子国際理解推進事業」である。

一見すると、これら3つの事業の関連性は見えないが、社会的弱者となった若者を支援するという点で繋がっている。また、この問題解決の切り札として登場したのが、家族の力、地域コミュニティの力だった。

◆ 定住外国人教育への視野

農村における結婚難、後継者不足問題に対する国際結婚の取組は、昭和58年（1983）県南地域から始まった。平成6年（1994）県内の在留外国人の数は、多い順に、韓国・朝鮮（928人）、フィリピン（642人）、中国（288人）だった。

（平成9年に韓国・朝鮮、中国、フィリピンの順となり、平成10年に中国が一位になる）

県教育庁では、平成7年度から日本語教育推進事業を開始。成人を対象とする日本語教室を県内10地域に開設し、平成12年度まで継続した。翌13年度からは日本語教室の運営が市町村に切り替わることを見据え、平成11年度より日本語指導者研修会を実施。

平成14年度から「外国籍県民等交流サポートセンター」を県内9市に設置し、各ブロックに「国際交流コーディネーター」や「国際交流サポーター」を配置して、市町村の日本語教室と連携して地域を支援するシステムを作った。



▲ 平成11年度 日本語指導者研修会

県をあげての定住外国人への日本語教室開設支援は全国でも数少ない事業であるが、これを実施した背景は、急増する外国人へのことばの教育は、県主導でなければ難しかったからに他ならない。

県がボランティア育成を開始するきっかけは週休2日制の導入、青少年の人材育成事業に取り組むのは就職氷河期の若者支援、日本語教育実施のきっかけは定住外国人の増加があった。県が行ってきた様々な生涯学習の施策は、時代ごとに起きる社会の変化に対応するものであったことが分かる。

〈参考文献〉秋田県教育委員会『社会教育施設ボランティアガイドブック』（1994年）、石沢真貴「社会参加支援としての定住外国人教育の役割と課題」（『秋田大学教育文化学部研究紀要 人文科学・社会科学』62、2007年）

連携・協働の推進

平成18年（2006）、教育基本法が改正され、学校・家庭・地域相互の連携・協力の重要性が示された。平成20年（2008）中央教育審議会は「新しい時代を切り拓く生涯学習の振興方策について―知の循環型社会の構築を目指して―」を答申した。

平成23年（2011）9月、県は「秋田県生涯学習ビジョン」を策定し、「知と行動が結び付いたクリエイティブな循環型社会」の推進を提唱した。

学習者が学んだことを何に、どのように生かすのか、クリエイティブ（創造的・独創的）な循環型社会とは何か、模索と議論はどこに到達したのか、この節では、この問題をたどってみたい。

◆ 「行動人」理念の登場

平成23年（2011）9月、秋田県生涯学習推進本部は「秋田県生涯学習ビジョン」を策定する。活力ある秋田になるためには、県民一人一人が学んだことを行動に結び付けることが大切であり、そのような活動をする人を「行動人（こうどうびと）」と名付けた。そして、同ビジョンでは、全ての県民が「行動人」になることを目指すとした。

翌24年10月、県は、県内各地で学んだことを生かして行動している人を「行動人」として紹介するホームページを開設。ホームページ開設から2年後の平成26年（2014）には「行動人」として紹介された県民は4万人を超え、活力ある秋田の視覚化に大きな役割を果たした。



▲長沢 薫氏（書家）
による揮毫

◆ 個人の要望から社会の要望へ

ここで注目したいキーワードは「活力ある秋田」である。秋田県生涯学習センター主催の「美の国カレッジ」で、地域を元気づける講座がいつ始まったのかを調べると、平成21年度「あきたで元気に」が最初である。また、平成24年度からは「あいLOVE あきた」がスタートしている。ここには、人口減少、高齢化、少子化、地域活力の減退が問題視される中で、郷土に誇りをもち、地域の活力を維持するための生涯学習が必要との判断があった。

Topics02や08で記したが、秋田県内の自治体における生涯教育は、自治体独自で既に始めていた書道・生け花・園芸といった趣味の教室を、小畑知事が推進する生涯教育の講座に転用する形でスタートした経緯をもっている。県生涯学習センターにおける講座を見ても、毎年のラインナップの中心は歴史（郷土史）であり、古文書学に力を入れた年もあった。

しかし、平成20年代に入り、県の施策の方向性として、生涯学習の目的は、個人の要望に基づく教室・講座の開設から、地域のため、社会のための生涯学習へと方針を定め、「学校・家庭・地域の連携協力関係の構築」「学校への支援」「家庭教育への支援」に力を入れるようになった。

◆ 企業との連携事業例（県）

平成29年度、秋田県生涯学習センターと株式会社秋田銀行との連携により「あきぎん長生き学校課外授業」を実施した。秋田銀行は県の高齢化問題に対応するため、平成27年度、「あきぎんエイジフレンドリーバンク宣言」を制定し、「長生きの秘訣を学び合う」をコンセプト

トに「あきぎん長生き学校」を開校し、平成28年4月より実際の授業を行っている。

連携のテーマは「秋田が誇る健康パワー！ーこんなにすごい秋田の発酵食文化ー」で、平成29年（2017）11月18日、横手市わいわいプラザで開催した第1回は、53名の参加。翌年2月24日、松與会館で開催した第2回は、大雪にもかかわらず94名の参加者があった。

企画から運営まで、講座の全局面を協働で実施したことで、県生涯学習センター及び秋田銀行双方にとって得るものが大きな事業となった。

平成30年度、県生涯学習センターは「官・民・学連携講座」をスタート。「あきぎん長生き学校」は同講座の中でも連携講座の一つとして実施された。「官・民・学連携講座」は、民間企業や大学と連携し、令和2年度も継続して行われている。

◆ 企業との連携事業例（市町村）

市町村教育委員会と企業の連携・協働事業の例は数多いが、特に注目したいのは、美郷町教育委員会と日本航空秋田支店の取組である。平成25年度、両者は連携協力協定を締結し、同年「JALほんもの講座 学校では受けられない授業ーJALの翼ー」に始まり、毎年、日本航空職員を講師に迎えての学習教室や飛行機の格納庫や整備場を見学する現地学習を開催。平成30年度は「JAL特別教室『空と飛行機の世界展』」を開催している。

◆ 障害のある方への支援

平成29年度、文部科学省は、従来の学校教育を中心に展開されてきた特別支援教育施策を就学前や学校卒業後も含めた総合的な取組として展開していくことが必要であるとの認識から、生涯学習局に「障害者学習支援室」を設置した。

県においても生涯学習推進本部に「障害者のための生涯学習支援連絡協議会」を設置し、障害者の生涯学習支援モデル事業を開始した。

令和元年度、県生涯学習センター「あきたスマートカレッジ」で特別企画講座「『障害者スポーツ』を通じて障害者の生涯学習について考えよう」（3回）を実施。令和元年（2019）9月、県生涯学習センター中2階の社会教育資料コーナーのレイアウトを見直し、ボッチャのコートを設けた。また、障害者スポーツコーナーの隣に、災害時の避難所で役立つアウトドアの技術や道具を紹介する防災コーナーを開設した。



▲ 中2階に設けられたボッチャコート

児童数の減少に伴い、県内各地で学校の統廃合が進められている。広い校区をもつ学校と地域の連携・協働の体制づくりは、社会教育行政の再構築と機能強化を図る好機である。

「知と行動が結び付いたクリエイティブな循環型社会」をどのようにつくるか？

新たな生涯学習のスタイルは、学校・地域・企業の連携・協働、そして障害のある方を地域づくりのパートナーとして参画させる形で歩み始めた。

〈参考文献〉『生涯学習課だより』（各号）、秋田県生涯学習センター『生涯学習センターだより』（各号）、同センター『平成30年度調査研究報告書 連携・協働による地域活性化事例に関する調査研究』（2019年）

秋田県生涯学習・社会教育研究大会「記念大会」

令和2年（2020）11月13日（金）秋田県生涯学習推進50周年、生涯学習奨励員結成45周年、秋田県生涯学習センター開所40周年を記念し「秋田県生涯学習・社会教育研究大会『記念大会』」が催された。コロナ禍にあつて、参加者の安心・安全と、多くの参加を両立させるため、メイン会場の県生涯学習センターからオンラインで配信し、参加者は県内全25市町村の29か所のサテライト会場で視聴するスタイルをとった。

◆ 佐竹敬久秋田県知事式辞（抄）



昭和45年（1970）、当時の小畑勇二郎知事のリーダーシップにより、県庁内に「生涯教育研究プロジェクトチーム」が結成され、昭和46年度に始まる「秋田県第3次総合開発計画」においては、県政の三本柱の一つに「生涯教育の推進と人間能力の開発」が掲げられました。当時、生涯教育が必要とされた理由として、社会経済情勢や価値観の変化、情報化の急速な進展等に対応できる人間を育てるためと説明されていました。

日々膨大な情報が飛び交い、刻々と新たな価値観が生み出される現代にあつては、自ら課題を見付け、考えを発信することや、学んだ成果を日常生活に生かしていくことが、学びの重要な要素として求められております。

◆ 安田浩幸秋田県教育委員会教育長挨拶（抄）



「人生100年時代」にあつて、学校で学ぶ期間は十数年程度であることを考えますと、人生の大半は、社会の中で自ら学びを求めていくことになります。

生涯学習においては、学びを通して自分の能力や資質を伸ばしていくだけではなく、学んだ成果を行動に結び付け、周りの人々を巻き込みながら循環させていくことが何より大切とされています。皆様におかれましては、本日の記念大会を、地域における「学びの輪」を一層広げていくための契機としていただけますと幸いに存じます。

◆ 森田千枝子秋田県生涯学習奨励員協議会長挨拶（抄）



私たち生涯学習奨励員の活動は「いつでも、どこでも、誰でも」が「ともに学び、ともに笑い、ともに助け合う」という、普段の暮らしの中に見いだせる「心豊かな空間づくり」、そのための何気ない「つなぎ役」、これが私たちの大きな役割であり、過去45年間の奨励員活動の根底に据えられてきたものと考えます。今後、私たち奨励員は一丸となって、今まで以上に住みよい地域、誇れる秋田を目指して頑張る所存です。

◆ 記念鼎談（抄）

○新妻二郎氏（岩手大学名誉教授）

時代は、大規模から小規模へ、集中から分散へ、グローバルからローカルへと変化しています。

東日本大震災の被災地に関わる中で、避難所指定を受けていない公民館が避難所として機能したり、公民館が住民同士の繋がる場になったりしたのを見ました。繋がり作りが地域作りの根幹であり、「他者とどう関わるのか」というのが、いざという時の住民の本当の力になることを感じました。



○佐藤智子氏（東北大学准教授）

地域の問題をみんなで協働して解決に繋げていくことが大事です。そのためには、様々なことについて住民が話し合い、物事を決めるプロセスを地域の中につくる必要があります。

「持続可能な地域づくり」のためには、目的の共有を地域課題の解決に繋げていくことが必要ではないでしょうか。

これまで日本では、生涯学習は「一人で自由に自分のために行う、自己実現とか趣味・教養的な学び」と捉えられがちでした。しかし、ポール・ラングランの「生涯教育」の中核は、社会教育と学校教育を一体のものとして総合的に教育を編成し、学校も社会教育も全体性をもって教育を捉えるということにありました。

従って、学校教育と社会教育や、その他教育に関わっている活動をしている組織・機関を繋ぎながら、コーディネート役割を果たすのが大事です。



○原 義彦氏（秋田大学教授）

ダーウィンが考える「生き残る生物」とは、最も力が強い生き物ではなく、頭のよい生き物でもなく、変化を察知して、変化に対応してきた生き物でした。それゆえ、私たちも社会の変化を受け止めることが求められます。50年前と現在の地域づくりは全く異なりますし、去年と今年も全然違います。その変化をうまく逃さずに捉えている地域が「持続可能」な地域といえます。

50年後の人たちに「ボーっと生きてんじゃねーよ！」（NHK『チョコちゃんに叱られる!』）と言われないために、我々が前を向いて、将来に向けて、地域づくり・生涯学習・生涯教育に関わっていくのが、まさに未来をつくるということではないでしょうか。



エピローグーそして未来へー

第1章トピックスの最後は、生涯教育・生涯学習の原点、今日に至る50年の回顧、そして、今後の展望を記しておきたい。

◆ 原点

昭和48年（1973）2月22日「西目村生涯教育をすすめる集い」に出席した小畑知事は「激励のことば」として、次のように述べている。

まず最初に、なぜ生涯教育を提唱するのかについて申したい。

一部には中央教育審議会の先取りであるとか、中央のお先棒をかつぐものとかいう考えもあるが、そうではない。

私は4期16年知事に在職してみて、結局、政治も行政も教育に始まり、教育に帰着するということを悟り、45年2月、庁内にプロジェクトチームを設け、県教育委員会を中心に、この問題について研究検討をして頂き、さらに、昨年度からは試行錯誤の気持ちで、鷹巣町をはじめとする三市町村を生涯教育のパイロット市町村に指定して実施に踏み切ると同時に「生涯教育推進要綱」を策定し、これに基づき、本年度からは知事部局と教育委員会とが一体となって「生涯教育推進本部」を設置した。

従って、中央の動きに迎合しようとするものでなく、全く県独自の構想で、生涯教育を取り上げたものである。〈中略〉

特に生涯教育の必要性を痛感したのは、憲法第26条の規定である。旧憲法にあっては、教育は義務であったが、新憲法にあっては教育を人間の権利とみている。とすれば、国や地方公共団体は、教育を受ける権利を生涯にわたって保障しなければならないと思う。

従って、生涯学習ならよいが、生涯教育はいかにも押しつけがましく抵抗を感じるということをよく聞くが、それは、個人個人が学習する立場からすると生涯学習でもよいが、責任ある地方公共団体の立場からして教育を受ける権利を積極的に保証するという観点に立って敢えて生涯教育とした。〈中略〉

県民が、だんだんと生涯教育に対する関心を高め、秋田県に一つの教育的風土を築き上げてゆくことが、私の念願である。

小畑知事は語る。「教育は権利である。それを保障するのが行政の役割である。それゆえに『生涯教育』の語を使う」と。生涯教育・生涯学習の施策の原点にあるのは、崇高な使命感である。

権利を保障する以上、県民は学ぶ権利を行使してほしい。これも小畑知事の強烈なメッセージである。知事は自著『秋田の生涯教育』で次のように語っている。

県民の方々が「全ての基本は教育である。そしてそれは誰のためではない。自分自身の生きがいのためである」と考え、教育を尊重し実践することによって生涯教育が本当に根付き、新しい教育的風土が生まれるものと思います。

◆ 回顧

昭和48年（1973）5月3日、小畑知事臨席のもと「大曲市生涯教育センター」開所式典が行われる。当時の市の広報を見ると「市民のみなさまが、生活や仕事に必要な知識や趣味を深めるため『生涯教育』『市民教養講座』をこの5月から開きます」とある。教室のラインナップを見ると、生け花、茶道、家庭料理、書道、謄写技術、人形と押絵等21教室が並んでいる。

上のグラフは、県民の家計収支の推移である。昭和40年代の高度経済成長期、県民の家計収入は、数年を経ずして倍増し、次第に貯蓄が増えていったことが分かる。

また、この時期は、県民が余暇時間をもつことができるようになった時期にも当たる。

Topics15に記したが、昭和40年代は、第1次産業従事者が減少し、第2次・第3次産業従事者が増加している。専業農家には、休日や余暇時間が無い。しかし、就業時間が定められた工業やサービス業の従事者には、余暇時間がある。

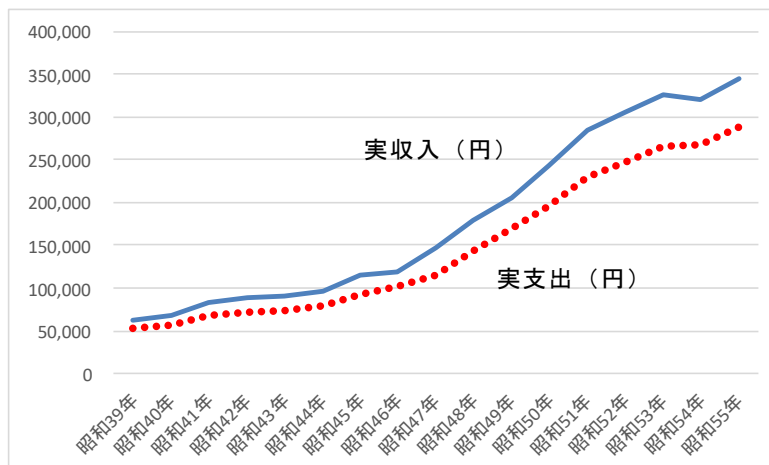
生活の豊かさと相まって、時間的な余裕ができたことで、趣味をもつことができる状況が発生したのである。

昭和40年代、県内の市町村が、趣味の教室を生涯教育の教室としたのは、地域住民に文化的な趣味をもたせ、それを育むことこそ、生涯教育と考えていたことによる。

これは県においても同じで、昭和52年度から始まる年1回の生涯教育・生涯学習の大会においても、日頃の学習発表の場として作品展示や茶会が行われた。また、昭和55年度に始まる県生涯教育センター「秋田県コミュニティ・カレッジ」においても、歴史や文化等、趣味・教養系の講座が毎年開かれた。

この路線が大きく変わるのが平成10年代後半である。学びの成果を自分一人の世界で完結するのではなく、地域のために生かすという視点が生まれた。右肩上がりの経済成長が終わり、就職難世代や定住外国人、障害者への支援、災害発生時のコミュニティの在り方等がクローズアップされる度に、それらの課題を解決することが、生涯学習にも求められるように

秋田県民の家計収支の推移



▲「昭和53年度本荘市由利郡生涯学習活動家のつどい」作品展示コーナー



▲「平成4年度 生涯学習県民のつどい」で開かれた茶会（県生涯学習センター中2階）

▲令和2年11月、左の写真と同じ場所では、災害発生時の避難所におけるライフスタイルに関する展示が行われている

なった。

秋田県生涯教育・生涯学習50年の歴史は、時代の要請、次々と起こる社会問題に対し解決の糸口を求めて、柔軟に対処してきた歴史といえよう。

◆ 展望

生涯学習推進100周年を遠くに見据えつつ、これからの生涯学習はどうあるべきか。秋田県生涯学習50周年の歴史を経た令和2年度における今後の方向性を示したい。

1 学ぶ人が生きる充実感を感じる生涯学習

昭和45年12月、県が最初に検討した『生涯教育体系の確立に関する』報告書に、生涯教育の必要性は、生活を豊かにし、人生そのものを充実したものとするためとある。「自分はこう生きよう」と決め、活力と熱意をもつことで充実した人生を送る。秋田県の生涯教育・生涯学習の原点はここにある。この原点は、いつまでも忘れずにいたい。

2 持続可能な地域を構築するための生涯学習

昭和45年の生涯教育がスタートした頃から、生涯教育の目的を、豊かな地域コミュニティを構築するためのものとする人たちがいた。しかし、人口減少と地域活力の減退が社会問題として認識されるようになった平成10年代後半から、生涯学習の分野においても「地域」「活性化」「元気」の言葉が見られるようになった。また、平成23年度、県が「自ら学んで身に付けた知識・技能を生かして行動する人」を育成することを打ち出した背景にも同様の問題意識があった。地域住民がつながりをもって支え合う地域を作るための生涯学習という視点は、この先も、もち続ける必要があろう。

3 時代の変化に柔軟な生涯学習

秋田県生涯学習50年をふり返ると、生涯教育・生涯学習のテーマは、高齢者・若者・子育て世代・定住外国人・障害者への支援等、時代ごとに起きた様々な社会的課題に対応して変化したことが分かる。生涯学習が、時代の要請に応えるものであるためには、過去の成功体験にとらわれない柔軟な発想が必要である。

◆ 最後に

最後に、小畑知事の言葉を紹介し、未来の秋田県民へのメッセージとしたい。

せっかちに成果を求めず、地道に一步一步前進することが肝要でしょう。

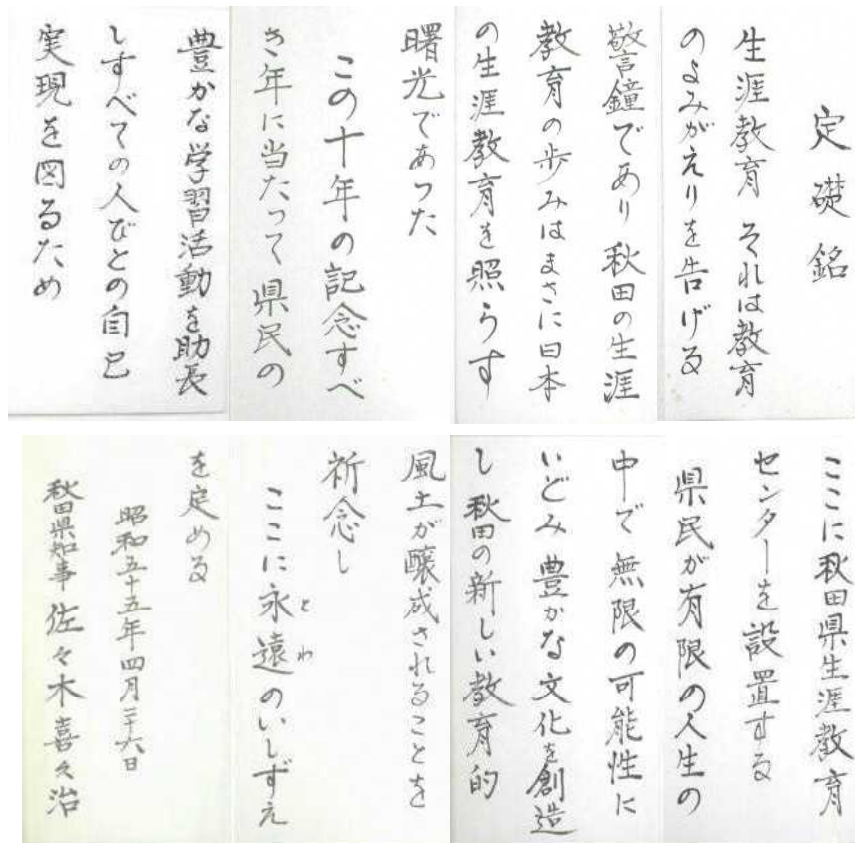
春の慈雨がゆっくりと大地にしみ入って、やがて万物に精気を与え、花を開かせるように、息長く続けていく心構えであります。

行けど行けど 果てしも見えぬ 花野かな

〈参考文献〉『県勢要覧』（各年度）、秋田県公文書館所蔵「知事祝辞挨拶」（010102-00009）、小畑勇二郎『秋田の生涯教育』全日本社会教育連合会（1978）、同『生涯教育の構想とその実践』秋田県生涯教育推進本部（1973）、『広報おおまがり縮刷版』（1985）

秋田県生涯学習50年史

第2章 秋田県生涯教育・生涯学習50年のあゆみ



昭和55年（1980）4月26日

秋田県生涯教育センター定礎銘

（「知事祝辞挨拶」秋田県公文書館所蔵、010102-00033）

昭和45年度 [昭和45年（1970）4月1日～昭和46年3月31日]

月 日	事 項
4月1日	生涯教育研究チームが編成され、生涯教育プロジェクトの検討が始まる 〈班長〉田口 勇（社会教育課長） 〈連絡員〉猿橋岩雄（社会教育課主任社会教育主事） 西 英子（社会教育課社会教育主事）、高橋 司（学務課管理主事） 高橋利夫・豊島敬子・原 公子（指導課指導主事） 大友康二（保健体育課指導主事）、渡辺俊雄（教育センター教育相談研究室長） 向山 清（教育センター指導主事）、渡部二郎（青年の家社会教育主事） 加藤 巖（福祉課老人福祉係長）、伊藤 実（婦人児童課児童福祉指導員） 武田憲雄（農産普及課専門技術員）、青木正司（労政課課長補佐） 竹内敏雄（職業訓練課課長補佐）
12月1日	生涯教育研究チーム「生涯教育体系の確立に関する報告書」を提出

〈コラム－あの日あの時〉「本県における生涯教育取組への経緯」（抄）三上 博

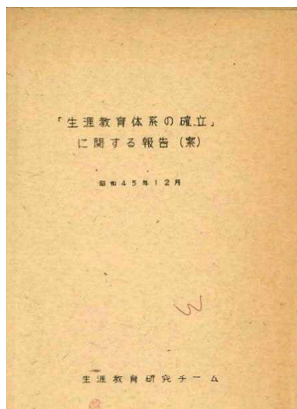
昭和44年、県総合調整課では「第3次総合開発計画」策定の作業が進められていた。この計画は、知事の指示により、行政各分野の基本理念を確立し、その実現を目指した施策を打ち立てるということで進められた。

教育については、当時、国立教育研究所長であった平塚益徳先生が、全国教育研究所連盟の会議で話された、ユネスコで議論されている「生涯教育」を計画スタッフに紹介し、これを本県教育の基本理念のよりどころにしてはどうかと提案し、プロジェクトチームで研究を進めてもらう方向が決まった。

昭和45年の4月か5月であったと思う。小畑知事は、伊藤教育長及び教育庁の各課長との会議の席で、計画策定の一環として、生涯教育についてプロジェクトチームで研究するよう要請した。教育長は「生涯教育については、今、日本でこの本（森 隆夫（著）『生涯教育』昭和45年2月）一冊しかなく、秋田県でこれを取り上げることは時期尚早である」と反論した。しかし知事は「私はその本を読んで、今後の教育理念としてとても大事なことだと思った。ぜひ研究を進めてほしい」と再度要請した。そして教育委員会から11名、知事部局から5名、計16名からなる生涯教育研究プロジェクトチームが発足した。

第3次秋田県総合開発計画では、その研究成果を踏まえ生涯教育の推進と人間能力の開発が県政の3つの主要課題の一つとして取り上げられたのである。

（秋田県教育委員会編『秋田県の生涯学習・社会教育50年のあゆみ』1999年）



〈コラム－現代史への招待〉「生涯教育体系の確立に関する報告書」

昭和45年（1970）12月1日、生涯教育研究チームが提出した、秋田県の生涯教育に関する施策の方向性を述べた最初の報告書である。

全ての県民にひとしく教育の機会を保障するため、学校教育、職場での職能教育、社会教育、地域の学習グループ等を生涯教育体系の中に位置付け、幼年期から老年期に至るまでの発達段階に応じた生涯教育体系を確立することを提唱している。

生涯教育の具体化に必要な施策として、人材登録・指導者育成といった人材登用とともに、生涯教育の中核機関として「秋田県生涯教育センター（仮称）」を設置することも提唱している。

昭和46年度 [昭和46年(1971) 4月1日～昭和47年3月31日]

月 日	事 項
4月1日	『秋田県第3次総合開発計画』に生涯教育推進が位置付けられる
5月9日	生涯教育担当職員と県民代表31名により、県生涯教育推進懇談会開催(全5回)
5月20日	生涯教育推進パイロット市町村指定 ・昭和46年度以降継続指定:大曲市・鷹巣町・西目村 ・昭和47年度以降継続指定:男鹿市・山本町・稲川町 ・昭和47年度追加指定以降継続指定:鹿角市・河辺町・平鹿町 ・昭和49年度以降継続指定:能代市・五城目町・西仙北町 ・昭和50年度以降指定:森吉町・若美町・大雄村
10月1日	「生涯教育を考える県民のつどい」(県内8か所)
10月7日	小畑知事記念講演「生涯教育について」(全国小学校長会、秋田県立体育館)
11月1日	「秋田県生涯教育推進要綱」制定
11月8日	『生涯学習指導の手びき』刊行
12月1日	秋田県生涯教育推進研究集会(県内8か所)
1月	知事決裁により「秋田県生涯教育推進本部設置要綱」制定

〈コラムー現代史への招待〉小畑知事記念講演「生涯教育について」

昭和46年(1971)10月7日、秋田県立体育館で行われた第23回全国連合小学校長会秋田大会において、小畑勇二郎知事は「生涯教育について」と題して記念講演を行った。

知事は、秋田県で生涯教育が必要である理由として、社会経済情勢の急速な進展、社会における価値観の変化、情報の洪水と大量消費、余暇時間の増大等に対応するため、そして立派な人間を育てるためであるとしている。

この講演で注目すべきは、次の言葉である。

「本来は、生涯教育の体系を国が作り上げ、その中で、学校教育をどう位置付けるかということを考えるべきだと思います。しかし、文部省が国全体としての生涯教育の体系を作り上げ、これを実施に移すとなると容易ならざることがありまして、まだまだ相当の間があると思います。その点、県は力がないかわり、身軽でありまして、県民の皆さんがその気になれば、できることからすぐにでも手をつけられるわけでありまして」

昭和40年代中期、生涯教育に関して、秋田県は国よりも先行していたのである。

小畑勇二郎『生涯教育のすすめ 秋田県をめざすもの』秋田県教育庁内生涯教育研究班(1971年)

〈コラムーあの日あの時〉パイロット市町村 大曲市民へのインタビュー(抄)

高田社会教育係長 熊谷キエ子さんは生涯教育をどのように受け取っておられますか?

熊谷 人間の教育・学習は一生を通じて必要だと思います。生活学校(月1、2回)では合理的な消費生活について、お茶の間教室(月1回)では、生活設計や家庭教育等、主婦にとって大切な学習をしております。

高田 現代っ子について、どう感じておりますか?

熊谷 子ども特有の冒険心やガキ大将中心の遊びは減りましたね。こうした問題について親の勉強が必要だと思います。

高田 大曲市に希望したいと思っていることはありますか?

熊谷 私の生きがいは子どもの成長です。親子が一緒に楽しめる市民体育館が欲しいです。それから、市民が心から望む学習内容を調査する必要があるのではないのでしょうか。

「広報おおまがり」1971年11月(『広報おおまがり縮刷版』1985年)

第2章 年 表

昭和47年度 [昭和47年（1972）4月1日～昭和48年3月31日]

月 日	事 項
4月1日	「秋田県生涯教育推進本部」（本部長：知事、事務局長：鎌田 宏・教育庁参事）設置
4～3月	放送利用学習の推進（放送個人学習奨励事業9市町村、放送利用促進研究事業6市町村）
5月1日	昭和47年度パイロット指定市町村（男鹿市・山本町・稲川町）担当者打合会（県庁）
5月17日	秋田経済大学「放送県民大学」開講式
5月4日	生涯教育推進協議会委員の委嘱 ・推進本部長（県知事）の諮問機関として、29名の県民代表による推進協議会を設置 ・協議会委員のうち8名は、常任委員会委員に委嘱
6月1日	広報誌「生涯教育」第1号発刊
7月20日	〔座談会〕三笠宮寛仁親王殿下「生涯教育について」（西目村公民館）
9月1日	「生涯教育を推進するための県職員のサービスの取り扱いについて」制定
11月10日	県生涯教育推進集会（県正庁）知事挨拶、事例発表：鷹巣町・稲川町・河辺町他
11月11日	市町村生涯教育推進担当者会議（県正庁）推進体制等について協議
11月18日	生涯教育をすすめる町民の集い（鷹巣町公民館）小畑知事出席
11月20日	生涯教育推進のための実態調査（全市町村へ生涯教育推進状況、年度末までの進め方、推進上の困難点について調査）
1月10日	生涯教育についてアンケート（秋田市200人、秋田市以外の市町村各100人の計7,000人を無作為に抽出し、生涯教育の理解度についてアンケート）
研究テーマ	生涯学習推進協議会 第1分科会「家庭を充実させるための方策について」 同 第2分科会「高齢者に対する社会的配慮について」 同 第3分科会「社会人としての文化奉仕活動について」 同 第4分科会「消費者活動の普及方策について」



▲ 秋田経済大学「放送県民大学」開講式



▲ 生涯教育推進協議会第1回協議会



▲ 県生涯教育推進集会（県正庁）



〈コラムーあの日あの時〉「生涯教育」発行

昭和47年4月1日設置の「秋田県生涯教育推進本部事務局」は、生涯教育を推進する全国初の組織だった。事務局では県民に生涯教育をアピールするため、6月1日に広報誌「生涯教育」を発行。題字は小畑知事の揮毫で、記事は小畑知事「生涯教育発刊によせて」、古村精一郎（県生涯教育推進本部常任委員長）「糧」、「生涯教育推進本部の発足」、「常任委員から」、小林 操（鷹巣保育園長）「一生をかける」、「教育施設めぐり 県青年の家」、鎌田 宏（県推進本部事務局長）「花の言葉が聞ける人」。「生涯教育」は47年度は4回、48年度以降は年5回発行された。

昭和48年度 [昭和48年(1973) 4月1日～昭和49年3月31日]

月 日	事 項
4月15日 ～	テレビ番組 (ABS)「たのしい生涯教育」放映開始 4月15日 生涯教育を語る 5月20日 スポーツに親しむ 6月17日 消費者は考える 7月15日 みんなで学ぼう 8月19日 青少年育成とボランティア活動 9月16日 老後の生きがい 10月21日 衛生教育と保健婦活動から 11月18日 雄勝町学校教育社会教育合同研究会から 12月16日 ボランティア活動点訳と手話 1月20日 主婦と生活作文 2月17日 農村青年の学習活動
4月25日	生涯教育キャッチフレーズとシンボルマーク募集 (5月20日まで)
5月3日	大曲市生涯教育センター開所式 (大曲市) [記念講演] 小畑知事
5月10日	鷹巣町生涯教育研究集会 (鷹巣町)
7月2日	琴丘町生涯教育懇談会 (琴丘町)
7月22日	聖園学園短期大学「放送県民大学」開講式
8月8日	稲川町美しく温かい町づくり推進大会 (稲川町)
9月7日	生涯教育推進集会 (山本町) 本部長挨拶、藤原英夫教授講演
9月9日	雄勝町推進集会 (雄勝町)
9月21日	全国公民館大会 (北海道北見市) [講演]「生涯教育の構想とその実践」小畑知事
10月1日	生涯教育に造詣の深い有識者を生涯教育顧問に委嘱 藤原英夫 (大阪大学)、村井 実 (慶應義塾大学)、森 隆夫 (お茶の水女子大学)、塚本哲人 (東北大学)、大野連太郎 (国立教育研究所企画室長)、伊藤忠二 (公立学校共済組合常勤理事)、村松 喬 (東海大学)
10月7日 ～	テレビ番組 (AKT)「あすを拓く生涯教育」放映開始 10月7日 物から心の時代へ 11月4日 人生80年、さてあなたは 3月3日 小畑知事に聞く
10月29日	雄勝町学社合同研究公開 (雄勝町公民館)
11月3日	大曲市生涯教育集会 (大曲市) [講演] 長谷山包子 (生涯学習推進協議会常任委員)
11月4日	河辺町生涯教育推進集会 (河辺町) [講演] 石川嘉明 (生涯学習推進協議会常任委員)
11月14日	全県生涯教育推進集会 (秋田市県立体育館)
11月19日	大潟村生涯教育学習会 (大潟村公民館)
11月20日	男鹿市生涯教育振興大会 (男鹿市) [講演] 森 隆夫 (お茶の水女子大学)
11月25日	協和町生涯教育推進集会 (協和町) [講演] 森 可昭 (生涯学習推進協議会常任委員)
12月1日	西仙北町生涯教育研究会 (西仙北町)
1月10日	雄和町推進協議会 (雄和町)
2月22日	西目村生涯教育をすすめる集い (西目村) [講演]「豊かな生活のために」小森健吉 (仏教大学)
2月	秋田県生涯教育推進協議会「生涯教育の付託課題についての報告書」 1 県民の教育的要望に応じて、各種教育機関・施設をどのように体系化したらいいか 2 県民の学習活動を奨励援助するための指導者の活動をどのように推進したらいいか 3 教育的事業を体系化するためにどんな措置が必要か
3月17日	生涯教育町民大会 (羽後町三輪公民館) 知事講演「県内における生涯教育の動向」
3月27日	鹿角市生涯教育推進大会 (鹿角市)
3月31日	鷹巣町生涯学習を語る会 (鷹巣町)、山本町生涯教育研究推進協議会 (山本町)



▲ 聖園学園短期大学「放送県民大学」開講式と保育実習

第2章 年 表

昭和49年度 [昭和49年(1974) 4月1日～昭和50年3月31日]

月 日	事 項
4月1日	パイロット市町村に生涯教育奨励員を設置
4月8日	河辺町生涯教育推進集会(河辺町)
4月21日 ～	テレビ番組(ABS)「たのしい生涯教育」放映開始 4月21日 いつでも、どこでも、だれでも(協議会委員長:菊池 茂) 5月19日 こどもの夢を育てよう(河辺町) 6月16日 まず健康、まず生産、まず調和 7月21日 パイロット市町村めぐり(鹿角市) 8月18日 パイロット市町村めぐり(大曲市) 9月15日 学ぶ輪の広がりと深まりを求めて(峰浜村) 10月20日 パイロット市町村めぐり(男鹿市) 11月17日 この人に聞く(お茶の水女子大学教授 森 隆夫) 12月15日 パイロット市町村めぐり(平鹿町) 1月19日 パイロット市町村めぐり(西目村) 2月16日 企業内教育((株)イシヤマ) 3月16日 総括と新年度の構想(本部事務局次長:有明 暢)
5月1日	県庁各部局が個別に設置していた講師団を「生涯教育講師団」として再編成
5月5日 ～	テレビ番組(AKT)「明日をひらく生涯教育」放映 5月5日 がんばれ新入社員 7月7日 わが家の生涯教育 9月8日 スポーツを楽しもう 11月3日 過去と未来をつなぐ県立博物館 1月12日 みんなで考えよう 3月2日 ママとチビッ子
5月10日	八郎潟町生涯教育推進協議会(八郎潟町公民館)
5月14日	生涯教育奨励員研修(山本町森岳、5月15日まで)
6月16日	聖霊女子短期大学「放送県民大学」開講式
6月19日	第1回「秋田県生涯教育センター構想委員会」開催
7月28日	山本町たのしい生涯教育のつどい(山本町)
9月4日	楽しい生涯教育のつどい(秋田県立体育館)
10月～	秋田県生涯教育推進協議会が付託課題を検討し、報告書を提出 10月提出 生涯教育の観点から学校教育をどのように進めたらよいか 12月提出 コミュニティにおける生涯教育の進め方をどのようにしたらよいか
11月13日	生涯教育を考える職場管理者・教育担当者セミナー(秋田市、2日間)
11月4日	西仙北町生涯教育の集い(西仙北町刈和野小学校)[激励の言葉]小畑知事
11月6日	象潟町生涯教育推進集会(象潟町)
11月10日	生涯教育をすすめる河辺町のつどい(河辺町)[激励の言葉]小畑知事
11月13日	秋田県立大館少年自然の家開所(大館市)
11月14日	若美町生涯教育推進集会(若美町)[激励の言葉]小畑知事
11月17日	田代町生涯教育を考える集い(田代町)
11月19日	雄物川町生涯教育推進集会(雄物川町)
11月20日	東成瀬村学社合同研究公開(東成瀬村)
11月29日	大内町生涯教育をすすめる町民の集い(大内町)
12月4日	角館町生涯学習のつどい(角館町)
12月12日	太田町生涯教育推進集会(太田町)
1月26日	八郎潟町生涯教育の集い(八郎潟町)
2月23日	五城目町生涯教育を語る会(五城目町)
2月25日	稲川町生涯教育推進集会(稲川町)



▲ 建設工事中の秋田県立博物館と展示品(模型)作製作業 聖霊女子短期大学「放送県民大学」開講式 ▲

昭和50年度 [昭和50年(1975) 4月1日～昭和51年3月31日]

月 日	事 項
4月1日	秋田県生涯教育推進本部、生涯教育推進策として「一人一学習運動」提唱
4月	生涯教育奨励員、15市町村、240名に増員
5月5日	秋田県立博物館開館(秋田市金足鳩崎)
6月	秋田県生涯教育センターの建設適地調査 ・秋田市内の県有地8か所を現地調査し、それぞれの立地条件を調査 秋田県生涯教育推進本部が、県小学校長会、県中学校長会、県高等学校長会に 「生涯教育の観点に立った学校教育の進め方」に関する研究を委託
7月1日	秋田県生涯教育センター設置協議会開催
11月	秋田県生涯教育推進協議会が付託課題について報告書を提出 「市町村における生涯教育の進め方ー実践事例を中心としてー」
3月	県小学校長会、県中学校長会、県高等学校長会が委託研究の報告書「生涯教育と学校教育」を提出 秋田県生涯教育推進本部「幼稚園・保育所の一体的運営～実践事例集～」

〈コラムーあの日あの時〉「放送県民大学「商店経営」講座を受講して」(抄)

昭和48年4月、公民館の勧めで、秋田経済大学放送県民大学の受講生の一員として出席しました。NHK教育テレビ「商店経営」を見て、テレビ学習で知り得なかったことは、質問カードにより講師の指導を得て、年6回のスクーリングに通い勉強する仕組みでした。

スクーリングの講師には、秋田経済大学、NHKの諸先生をはじめ、小畑知事、県商工会議所会頭等多数で、質疑応答、真剣さの中にも、ユーモアを交えて、10時より4時まで語り合いました。

内容は、経営者として、一従業員として、現在一番身近な問題、求人難・省力化・簿記指導・協業化・小規模小売店のスーパーへの対応策・大型店の新人教育・フランチャイズ・システム、最近の問題、石油危機等商店経営に必要なありとあらゆる問題を語り合う有意義な会でした。

修了式には小畑知事の生涯教育の講演もあり、最後の一言に、郡部の西目より3名の受講生が来られたことを喜んでくださいました。

今年の放送県民大学は「一億人の経済」と題して開かれるとのこと。誰でも学べる講座ですので、村民が一人でも多く受講することを望みます。

鈴木幸徳「商工経営通信講座」(西目村『村報にしめ 学習サロン』47、1974年5月)

〈コラムーあの日あの時〉生涯教育？障害教育？

ある奨励員がこんなことを言っていました。

「『今日、生涯教育関係の会議で公民館まで行ってきます』と姑に言ったら『ショウガイ教育って、事故で障害を受けた人たちへ何か教育するのか』って…私、ちょっと返事に困ってしまって、おかしいやら情けないやら…」

確かに、70歳を超えた老人には耳新しい言葉で、正しく早く理解している人は少ないことでしょう。正しく早く理解してもらおうと、せっかちに、がむしゃらに話したり、進めたりしては、かえって裏目に出ることがあります。あせらずゆっくりと運動を進めることが必要です。

このお姑さんに限らず、まだまだ理解していない人たちは多く、一人でもよいから正しく理解してもらうため、奨励員の仕事は大切なのだと思います。

五城目町 斎藤妙子「活動からの話題」(市町村生涯教育奨励員協議会事務局『生涯教育奨励員会報 あきた』1、1977年1月)

第2章 年 表

昭和51年度 [昭和51年(1976) 4月1日～昭和52年3月31日]

月 日	事 項
4月1日	生涯教育奨励室（ブルーの窓口）の設置 ・県は、市町村における生涯教育奨励員の活動拠点として生涯教育奨励室の設置を促進し、運営費の1/2（30万円）を助成
4月18日 ～	秋田魁新聞広告 4月18日「日常生活に生きる学習」、6月20日「開かれた学校 市民大学講座」 7月18日「ブルーの窓口の紹介」、9月19日「ブルーの窓口と一体になり活動する奨励員」 10月17日「朝、夕、親子読書で本に親しむ習慣」、11月21日「奨励員の活躍の状況」 1月4日「生涯教育年頭のあいさつ」、1月20日「伝統行事や祭り、豊かな心を育てる」 3月20日「町や村に学ぶ輪を広げよう」
5月25日	秋田県生涯教育奨励員連絡協議会発起人会（総合庁舎）
6月1日	第1回秋田県生涯教育推進協議会（議会会議室）
6月3日	第1回秋田県生涯教育推進本部講師団会議（議会会議室）
7月8日 ～	生涯教育奨励員前期研修会（1） ・中央（7月13日、県正庁）、県北（7月13日、大館市中央公民館） 県南（7月15日、横手市民会館）
8月11日 ～	県庁だより「楽しい生涯教育」(ABS秋田放送) ・8月11日「一人一学習」、11月27日「奨励員の活動とブルーの窓口」 3月19日「わがグループと今後の課題」
10月14日	秋田県市町村生涯教育奨励員協議会結成大会（県正庁）（会長：寺田忠夫） 「秋田県市町村生涯教育奨励員協議会会則」制定
11月28日 ～	「明日をひらく生涯教育」(AKT秋田テレビ) 11月28日「奨励員活動と相談」、3月27日「あすを考える」
12月1日 ～	生涯教育奨励員前期研修会（2） ・阿仁町公民館（12月1日）、昭和町公民館（12月2日）、天王町公民館（12月10日）
1月1日	「生涯教育奨励員会報 あきた」創刊（1,000部）
2月17・18日 2月21・22日	生涯教育奨励員後期研修会 ・県北（2月17・18日、大館市十二所大滝グランドホテル） ・県南（2月21・22日、大曲市角間川ホテル田畑荘）



▲ 秋田県市町村生涯教育奨励員協議会結成大会（10月14日）
滝沢弘一氏（設立発起人）の趣旨説明「地域主導による生涯教育の新展開は、奨励員一同が描き続けてきた思い。私たちは、この新しい展開の先兵となる。一日も早く全市町村に奨励員が設置されることを期待したい。協議会を通じて連携を強め、地域のために尽くしたい」



▲ ブルーの窓口看板
（西仙北町公民館）



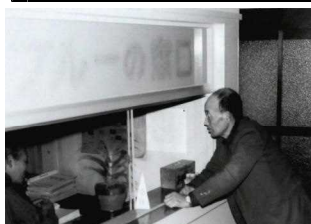
▲ ブルーの窓口
（平鹿町役場）



▲ 一人一学習運動看板（平鹿町役場）

昭和52年度 [昭和52年(1977) 4月1日～昭和53年3月31日]

月 日	事 項
4月1日	「生涯教育奨励室・生涯教育奨励員設置運営要綱」制定 生涯教育センター建設庁内検討委員会発足
4月17日	秋田魁新聞広告 4月17日「学習計画やよい方法の相談をブルーの窓口へ」 5月15日「学ぶグループ作りや学ぶ方法の相談を奨励員に」 6月19日「豊かな環境づくりのため苗を育て花を咲き満ちた生産の学習にも励みましょう」 7月17日「郷土の歴史、植物、動物を学び、自らをきたえたり積極的に環境を豊かにしましょう」 8月21日「お互いに交流し学ぶ輪を広げましょう」 9月18日「高齢者の方々から昔からのしきたり、お話、工芸品のつくり方を学びましょう」 10月16日「一人一学習に励みましょう」 11月20日「学習成果を発表しお互いに学び合いましょう」 12月18日「親子読書等を楽しみ、家族みんなの一人一学習を深めましょう」 1月4日「ブルーの窓口、奨励員の拡充強化、小畑本部長他、年頭挨拶」 2月19日「計画を立てて学習を続けましょう」 3月19日「みんな学習の一步を踏み出す準備をしましょう」
5月10日	秋田県市町村生涯教育奨励員協議会総会(県正庁)
5月18日～	奨励室設置協議 5月18日、二ツ井町・八森町 5月19日、八竜町・藤里町 5月20日、小坂町 5月25日、大内町・矢島町・鳥海村 5月26日、仁賀保町・金浦町・西目町 5月28日、本荘市
6月1日	秋田生涯教育センター建設協議委員会発足 市町村協議 6月1日、六郷町・角館町 6月2日、羽後町・皆瀬村 6月3日、湯沢市 6月24日、大館市・北秋田郡・鹿角市 7月6日 五城目町
6月29日	生涯教育奨励員研修会(横手市民会館他7会場)
8月30日～	地域学習発表会 8月30日稲川中学校 9月1日鷹巣阿仁広域圏民会館 9月7日五城目町民センター 9月15日河辺町公民館 9月22日平鹿町中央公民館 10月23日大館市立中央公民館 10月26日由利町公民館 11月6日山本町中央公民館
11月4日	生涯教育推進全県大会並びに講演会(大曲高校) ・[講演]「くらしと生きがい」酒井 広(NHKチーフアナウンサー)
2月22日	生涯教育奨励員代表者会議並びに研修会(山本町中央公民館)[講演]「夢と人生」



▲左より 西仙北町・大曲市・鷹巣町・金浦町の生涯教育奨励室(ブルーの窓口)

〈コラムー現代史への招待〉「生涯教育奨励室・生涯教育奨励員設置運営要綱」を読む

この要綱の冒頭に生涯教育奨励室と生涯教育奨励員の設置目的が記されている。

生涯教育奨励室(ブルーの窓口)は、県民一人一学習の推進を図るための拠点として、生涯教育に関するあらゆる相談に応じ、行政機能及び社会資源を効果的に活用して、適切な助言指導を行うとともに、生涯教育の推進に関する情報の収集、提供等の諸事業を実施して、生涯教育の拡充強化を図るものとする。

生涯学習奨励員は、市町村長等からの委嘱に基づき、地域における生涯教育の中心的活动者として、市町村における住民の学習活動を奨励し、地域主導による生涯教育の推進充実に努めるものとする。

秋田県生涯教育推進本部事務局『秋田県の生涯教育ー10年の足跡ー』(1980年)

第2章 年 表

昭和53年度 [昭和53年(1978) 4月1日～昭和54年3月31日]

月 日	事 項
4月1日	秋田県立保呂羽山少年自然の家開所(大森町八沢木)
4月10日	由利耕心大学開校(西目町公民館) 毎月1回の出校日
4月16日 ～	秋田魁新聞広告「各地で多彩な学習計画が企画されております。進んで参加しましょう」 6月18日「放送を利用して学習を広げましょう」 7月16日「明日の飛躍のため成人学習を盛りあげましょう」 8月20日「夏祭り盂蘭盆会を終えて静かにふるさとからまなぶ学習会を計画しましょう」 9月17日「みのりの秋・健康の秋・スポーツの秋地域ぐるみの体力づくりに進んで参加しましょう」 10月15日「日ごろの学習成果を発表して、明日へのステップにしましょう」 11月19日「ふだんの生活に役立つリフォーム、日曜大工、調理等の学習を広げましょう」 12月17日「いよいよ年の暮れです。冬の学習は身近な素材から孔版、リフォーム等について計画しましょう」 1月4日「生涯教育センターの建設、一人一学習をモットーに生涯教育の推進」小畑本部長年頭の挨拶 2月18日「ふるりの自然、伝承、先覚に学ぶよう努めましょう」 3月18日「各地で学習の成果を反省し、新年度の学習計画を立てましょう」
4月24日	秋田県生涯教育奨励員協議会総会(県正庁)
6月25日 ～	県庁だより「楽しい生涯教育」(ABS秋田放送) 6月25日「やさしい民芸品づくり」、7月19日「一人一学習をめざして」、7月30日「涼を求めて親子で歩こう」、10月14日「薬草で健康に」
7月9日	スポット放送「明日のために」 7月9日「水泳で健康な夏」、12月3日「リフォームで生活改善」、2月25日「生涯教育の回顧と展望」
8月30日	生涯学習をすすめる県民の集い(県民会館)
10月31日	生涯教育推進全県大会兼講演会(秋田市教育会館)
2月22日	生涯教育奨励員代表者会議並びに研修会(男鹿市)



▲ 生涯教育推進全県大会



▶ [パンフレット] 生涯教育をすすめる県民のつどい



〈コラムーあの日のあの時〉昭和53年度 生涯教育奨励員協議会総会から

この総会で、県生涯教育推進本部事務局野村愛三次長が、生涯教育奨励員協議会の発展段階と活動の在り方について次のように話している。

〈導入期〉昭和46年度から50年度は、理論・理念の形成期

〈浸透期〉昭和51年度・52年度は、地域主導體制の確立という推進基盤の形成期

そして、昭和53年度は、県生涯教育提唱8年目を迎え、センターの建設に伴う発展、成熟期への出発と位置付けている。野村氏は、生涯教育奨励室と奨励員を中核とした地域推進体制を、一層充実強化し、秋田県生涯教育センターを頂点とする県民学習活動網の整備に努め、昭和53年度の重点事業として次の5項目を掲げた。

- (1) 秋田県生涯教育センターの建設 (2) ブルーの窓口と生涯教育奨励員活動の充実強化
- (3) 生涯教育奨励員協議会広域圏地域組織の確立 (4) 生涯教育の普及啓発活動の推進
- (5) 市町村生涯教育推進本部機能の強化

秋田市町村生涯教育奨励員協議会事務局『生涯教育奨励員会報 あきた』9(1978年5月)

昭和54年度 [昭和54年（1979）4月1日～昭和55年3月31日]

月 日	事 項
4月15日 ～	秋田魁新聞広告「各地で幼児から高齢者までの学習が始まっております」 5月20日「秋田県の生涯教育・真の豊かさを求めて」6月17日「あなたは今何を学んでいますか」 7月15日「生涯教育奨励員」11月18日「親子読書のすすめ」12月16日「ボランティア活動」 1月4日「年頭のあいさつ」2月17日「地域の人材を活用しよう」
4月30日	秋田県知事に佐々木喜久治就任
5月25日	生涯教育担当者会議（千秋会館、市町村担当者79名・事務局14名） ・[テーマ] 9年目を迎えた秋田県の生涯教育を真に地域主導で展開するにはどうしたらよいか ・[重点目標の確認] ①生涯教育と社会教育の関係、②学校教育にどう対応してもらうか、 ③ブルーの窓口の定義、④市町村本部長会議や担当者研修等での生涯教育の定着化
5月30日	秋田県市町村生涯教育奨励員協議会総会（県正庁）
6月12日	県庁各部署に生涯教育推進幹事を1名ずつ任命
7月8日	テレビ放映「明日のために」（ABS秋田放送）「梅雨時の家の手入れ」8月11日「ろばた講座」合川町11月10日「老人と子ども・風づくり」阿仁町12月22日「リサイクルの知恵」
7月10日	秋田県生涯教育推進協議会（委員39名）会長に小畑勇二郎（秋田経済大理事長）
7月15日 ～	テレビ放映「ふるさとに学ぶ」（AKT秋田テレビ）7月15日「小町の里」雄勝町 9月16日「駒おどり」藤里町12月2日「秋田の保存食」
10月9日	社会教育法制30周年記念・社会教育振興大会（秋田県民会館） ・[講演]「男の立場・女の立場」上坂冬子（評論家）
11月27日	生涯教育推進全県大会兼講演会（秋田県教育会館） ・[講演]「子どものしつけは親がする 親のしつけはだれがする」森 隆夫（お茶の水女子大学）
11月19日	秋田県生涯教育推進協議会「家庭教育の振興策について」を建議
1月12日	ABSテレビ県民室「生涯教育センター」
2月14日	秋田県生涯教育奨励員研究集会（岩城町 秋田県厚生年金休暇センター） ・15日 [講演]「生涯教育奨励員に望むもの」小畑勇二郎（生涯教育推進協議会長）
3月25日	秋田県生涯教育センター完工



▲ 講演する小畑前知事（2月15日）



▲ 建設の槌音響く秋田県生涯教育センター



〈コラムーあの日あの時〉生涯教育推進協議会 小畑会長就任挨拶（抄）昭和54年7月10日

昭和45年、知事三期目を終わろうとして、三総（第3次総合開発計画）に生涯教育を取り上げてから、列席の皆さんには協力願ってきたが、県主導から市町村主導になった昨今、ますます皆さんの力で活力あるものにしたい。過日、文部省で鈴木審議官と会ったとき、生涯教育は秋田をモデルにして国でも進めたい。コミュニティ・カレッジ構想も期待しているとされた。種をまいたものは育てなければならない。創業は易く、守成は難いが、この生涯教育を盤石不動のものにし、日本の教育に転機をもたらしたい。

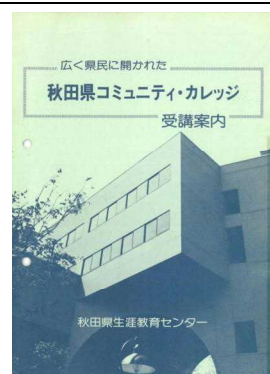
秋田県生涯教育推進本部『生涯教育情報』26（1979年9月）

昭和55年度 [昭和55年（1980）4月1日～昭和56年3月31日]

月 日	事 項
4月1日	秋田県生涯教育センター、秋田県立子ども博物館開所
4月29日 ～	秋田県生涯教育センター開所記念行事 4月29日 県民学習のつどい、5月1日 生きがいを求める高齢者のつどい、5月3日 新しい親像をめざす両親のつどい、5月4日 知事とともに80年代の地域開発を語る、青年団体代表者セミナー、5月5日 ふるさとづくりを考える三世代交流のつどい
5月29日	秋田県市町村生涯教育奨励員協議会総会（秋田県生涯教育センター）
7月26日 ～	生涯教育テレビ講座「世代の壁を越えて」 7月26日「マンガ世代と言うけれど」 8月30日「純潔教育じゃもう古い」 9月27日「あなたはゆとり派？猛烈派？」 10月25日「村の子どもも眠れない」 11月29日「ものを言う農民」
7月27日	秋田県コミュニティ・カレッジ（秋田県生涯教育センター） 〔記念講演〕内村直也（劇作家） ・学習日は、毎月2回日曜日（10:30～12:10、13:00～14:40）の2時限 ・秋田県生涯教育センターで履修する12コースとNHK教育「テレビ大学講座」の視聴を中心に履修するコースを開設
10月28日	秋田県生涯教育推進10周年記念「県民のつどい」（秋田県生涯教育センター） ・〔講演〕「80年代の教育について」木田 宏（国立教育研究所） ・〔シンポジウム〕「これからの生涯教育の方向をさぐる」司会 佐藤 守（秋田大学） 講師 藤原英夫（甲南女子大学）、塚本哲人（東北大学）、森 隆夫（お茶の水女子大学）
11月	生涯教育推進県民文化講座（湯沢市文化会館） ・秋田県コミュニティ・カレッジの移動講座として実施
2月20日 ・21日	秋田県生涯教育奨励員研究大会（秋田県生涯教育センター） ・〔講演〕「成熟社会の人間像」草柳大蔵（評論家）
3月	秋田県生涯教育推進協議会、報告書「生涯教育における新しい社会教育の方向」 「家庭教育を充実するための推進要綱」提出



▲ 開所直後の秋田県生涯教育センター



▲ 秋田県コミュニティ・カレッジ
最初の受講案内

〈コラムーあの日あの時〉秋田県市町村生涯教育奨励員協議会総会（5月29日）小畑会長挨拶（抄）

- 生涯教育推進の中核機能としての生涯教育センターが落成したが、これは日本はもちろん世界でも例がないと思う。しかし、その利用や運営については、県民の皆様から、本当にわれわれのセンターであると言われるようにしなければならない。
- コミュニティの形成が必要である。地域から問題を提起し、自分たちのことは自分たちの手で進めようと学んでいる生活学校運動を、一層強力に推進すべきである。家庭教育とコミュニティの連携にどう取り組むか。このような新しい問題にも、奨励員の皆様には積極的に取り組んでもらいたい。

秋田県市町村生涯教育奨励員協議会事務局『生涯教育奨励員会報 あきた』21（1980年5月）

昭和56年度 [昭和56年（1981）4月1日～昭和57年3月31日]

月 日	事 項
4月1日	家庭教育相談員の設置開始（県補助、50名） 昭和54年度の秋田県生涯教育推進協議会の建議「家庭教育の振興策について」を受け、市町村に家庭教育相談員を設置し相談機能の強化を図る
4月19日	秋田県コミュニティ・カレッジ（秋田県生涯教育センター） ・[記念講演]「住民健康学」九嶋勝司（前秋田大学長）
6月13日	秋田県生涯教育推進協議会 第1回協議会 ・新たな団体代表等を加え45名の委員を委嘱。会長に小畑勇二郎（秋田経済大学理事長）、副会長に佐藤 守（秋田大学）が選出 ・会長より次の13名を常任委員に指名 石川嘉明（ABS秋田放送）、岩城信雄（秋田県公民館連合会長）、佐藤喜久治（秋田県PTA連合会長）、佐藤 守（秋田大学）、佐藤正一郎（元秋田県農近ゼミ連絡協議会事務局局長）、滝沢弘一（秋田県市町村生涯教育奨励員協議会副会長）、武埴林太郎（秋田県国公立幼稚園協会会長）、土濃塚イマ（秋田県地域婦人団体連絡協議会副会長）、長谷山包子（秋田県社会教育委員連絡協議会会長）、畠山太郎（秋田県町村会副会長）、広嶋正比古（秋田県小学校長会長）、船山忠重（秋田市第一助役）、前田 宏（NHK秋田放送局）
6～10月	生涯教育テレビ講座「ふるさとに探る、秋田の文化」（ABS秋田放送） ・地域に腰をすえ地道に展開されている学習・文化活動を訪ね「快適なくらし・心の豊かさとは何か」を考え、学習する素材を提供する番組（毎月最終土曜日17:00～17:15）
7～9月	秋田県生涯教育推進協議会現地協議 地域主導の生涯教育の推進を図るため「学校・地域及び家庭の連携」や「生涯教育推進体制のあり方」等、推進上の課題について現地協議会を開催
8月1日	生涯教育に関する学習集団の実態調査
10月	生涯教育推進県民文化講座（能代市文化会館） [講演]「わたくしの演歌的人生論」船村 徹（作曲家）他
6～10月	生涯教育テレビ講座「おじいちゃん、おばあちゃん、こんにちは」（AKT秋田テレビ） ・健康で生きがいのある高齢期を送るために「今、高齢者に何が必要か」を考え、学習する素材を提供する番組（毎月最終日曜16:00～16:30）
12月3日 ・4日	秋田県生涯教育推進研究大会（秋田県生涯教育センター） [講演]「我が国における生涯教育の方向」有光次郎（日本芸術院長・私立大学通信教育協会） [分散会]「生涯教育奨励室・公民館と奨励員はどのように連携し、住民の生涯学習をどうすすめたらいいか」他
3月	秋田県生涯教育推進協議会、報告書「市町村における推進体制と教育委員会、公民館との関連について」提出



◀ 生涯教育テレビ講座
収録の様子

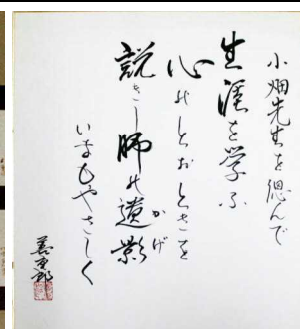


◀ 昭和五十六年度
秋田県生涯教育推進研究大会

第2章 年 表

昭和57年度 [昭和57年（1982）4月1日～昭和58年3月31日]

月 日	事 項
4 月	秋田県生涯教育センターに国際交流フロアー・団体交流フロアー・小畑文庫開設
10月2日	生涯教育推進県民文化講座（男鹿市民文化会館） [講演]「我が道我が人生」内藤国雄（棋士） [講演]「学びへの出発－変化の激しい時代に生きて－」五代利矢子（評論家）
10月5日	小畑勇二郎（秋田県生涯教育推進協議会長、前秋田県生涯教育推進本部長）逝去
10月10日 ～25日	[調査] 生涯教育奨励員活動に関する調査 ・[方法] 生涯教育の推進や活動の在り方等の参考にするため、市町村生涯教育奨励員1,133名に郵送で調査 ・[口頭発表]「アンケート調査の結果について」2月16日合同研修会
11～2月	生涯教育テレビ講座（8回） ・「ふるさとに探る『秋田の歴史と文化』」（AKT秋田テレビ） ・「がんばるおかあさんたち」（ABS秋田放送）
12月17日	秋田県生涯教育推進集会（秋田県生涯教育センター） [私たちの実践] 佐藤加代子（西仙北町生涯教育奨励員）・横山正義（象潟町教育委員会）・半田嘉栄之助（コミュニティ・カレッジ受講者） [シンポジウム]「秋田の教育風土とこれからの生涯教育－故小畑勇二郎氏を偲んで－」
2月16日	県・地区協生涯教育奨励員協議会役員合同研修会（秋田県生涯教育センター） [講義]「本県生涯教育の当面する課題」猿橋岩雄（秋田県生涯教育センター）



秋田県生涯教育推進集
会が行われた教育推進
センターの展示品と
展示された生涯教育
奨励員の作品と
展示された生涯教育
奨励員の作品と
展示された生涯教育
奨励員の作品と

〈コラムーあの日あの時〉「自動回転－提言－」（抄）田代町教育長 鈴木勝忠

小学校の児童が、勉強のためにやってくる学校に、かばん（教科書も筆記用具も）を持たないまま登校する。2年続きの冷害で経済的にも深刻だと思われる農家が、高価で豪華な遊具を次々と子どもたちに買い与えているが、教材教具はいつも不備である。下校時に雨となり、傘を持たない中学生が親（家庭）に電話して「今すぐ車で迎えに来い」という。

これは学校だけで解決できる範囲を明らかに超えている。

山の町、農林の町であるわが町の子どもたちではあるが、汗を流して野山を駆けめぐり、野生動物、昆虫、様々な草花、樹木に触れる機会には実に少ない。

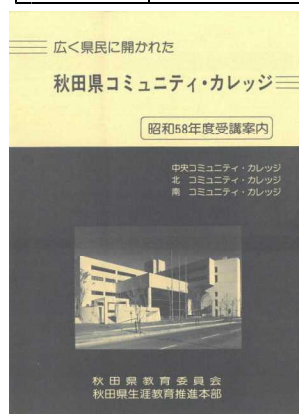
私の社会教育に対する考えは、お互いが寄り合い、自分を磨いていくことにある。まず自ら動く「自動回転」しなければ課題は解決しない。生涯学習の理念は、県民に等しく理解されていると思うので、要はどのように実践するかにかかっている。

過去からのつながりをきちんと教える大人の役割、未来を展望し、可能性を導く配慮を縦軸として捉え、人間関係の広がりや地域の連携を横軸として組みながら、実践第一を強く提唱したい。

秋田県市町村生涯教育奨励員協議会事務局『生涯教育奨励員会報 あきた』34（1982年7月）

昭和58年度 [昭和58年(1983) 4月1日～昭和59年3月31日]

月 日	事 項
5～3月	秋田県コミュニティ・カレッジ(秋田県生涯教育センター) ・本年度より、北コミュニティ・カレッジと南コミュニティ・カレッジを開設 ・中央コミュニティ・カレッジの放送利用課程は、この年で最後
6月1日	秋田県立岩城少年自然の家開所(岩城町赤平)
6月	「秋田県教育人材銀行」設置(12部門、118名) ・県民の学習ニーズの多様化に伴い、従来の生涯教育講師団を発展的に解消し、新たに120名編成による教育人材銀行を設置
7月8日	市町村生涯教育推進協議会(～2月28日まで、雄和町・井川町等22市町村) ・各市町村における推進体制の強化と、より積極的な奨励援助を行い、活性化を図るため、3年計画で全県市町村を訪問することが始まった
8月2日	秋田県市町村生涯教育奨励員新任研修会(秋田県生涯教育センター) ・[パネル討議]「奨励員の役割と実践活動」 ・[パネラー] 三浦リキヨ(由利町生涯教育奨励員)、加藤五郎(秋田市同) 高橋弘子(山内村同)、村上憲一(鷹巣町社会教育主事)
9月28日	地区生涯教育奨励員連絡協議会研修会(～3月6日まで、昭和町他8市町村)
9～2月	生涯教育テレビ講座(6回) ・「縄文人のくらし」他(ABS秋田放送) ・「古代秋田地方の開拓の進展」他(AKT秋田テレビ)
12月1日 ・2日	秋田県生涯教育推進研究大会(秋田県生涯教育センター) [講演]「世界の生涯教育」藤原英夫(甲南女子大学) [講演]「茶、陶、山ー日本人のこころ」森 可昭(秋田魁新報社)
12月31日	秋田県生涯教育推進協議会、建議「高齢化社会における生涯教育のあり方」



▲ 生涯教育推進研究大会講演



▲ 「秋田県教育人材銀行」登録者推薦委員会議

◀ [パンフレット] 昭和58年度 秋田県コミュニティ・カレッジ

〈コラムー現代史への招待〉秋田県教育人材銀行

秋田県では昭和49年5月1日に「生涯教育講師団」を組織し、地域の要請にこたえて講師派遣を行ってきた。昭和58年6月、指導分野を拡充するために「生涯教育講師団」を発展させた「秋田県教育人材銀行」を新たに組織した。人材銀行の指導分野は①政治・経済・社会、②歴史・地理、③文学、④教育、⑤芸術文化、⑥医事・健康、⑦スポーツ・レクリエーション、⑧自然科学、⑨職業技術、⑩生活技術、⑪社会奉仕活動、⑫趣味の12分野である。講師の登録は、県内の学識豊かな方々で構成される推薦委員会を経て登録された。講師は各分野10名程度で、講師の名簿は各市町村及び関係機関に配布され、地域で必要とされる講師が容易に派遣できるシステムが作り上げられた。

秋田県生涯教育推進本部・秋田県生涯教育センター『生涯教育情報 秋田』48(1983年6月)

第2章 年 表

昭和59年度 [昭和59年(1984) 4月1日～昭和60年3月31日]

月 日	事 項
4～3月 4月22日	秋田県コミュニティ・カレッジ(秋田県生涯教育センター) ・[中央コミュニティ・カレッジ開講式](秋田県生涯教育センター) ・[北コミュニティ・カレッジ](大館広域交流センター) ・[南コミュニティ・カレッジ](横手市民会館)
5月31日	秋田県市町村生涯教育奨励員協議会総会(秋田県生涯教育センター)
7月18日	市町村生涯教育奨励員研修会(～8月2日まで、秋田市・大館市・横手市)
7月26日	地区生涯教育奨励員連絡協議会研修会(～3月8日まで、天王町他8会場)
9～3月	生涯教育テレビ講座「探訪 秋田の中世」他(15分3回、30分3回)
11月21日	生涯教育推進研究大会(秋田県生涯教育センター他) ・[講演]「これからの秋田と人づくり」佐々木喜久治(秋田県知事) ・[講演]「ぼくの家庭教育」神津善行(作曲家) ・[生涯教育奨励員集会]「生涯教育奨励員としてのわたくし」 吉田ミヤ(若美町生涯教育奨励員)、山口正敏(鹿角市生涯教育奨励員) 菊地守子(大森町生涯教育奨励員) ・[コミュニティ・カレッジ受講者交流集会 学習体験発表] 庄司敏子(森吉町)・河野貴代国・川口恭子(秋田市)・高橋龍蔵(羽後町)

〈コラムーあの日あの時〉[講演]「これからの秋田と人づくり」(抄) 佐々木知事

〈本県生涯教育の特色〉 全ての県民に、生涯にわたっての学習の機会と場を保障し、各世代の人がいつでもどこでも学び合うという、新しい教育的風土の醸成をめざして発足した本県の生涯教育は14年になった。当初の行政主導的な生涯教育から、地域主導型への転換が定着したが、これは市町村生涯教育奨励員制度に負うところが大きい。

〈自らの地域は自らが担う〉 今後の秋田の発展の礎となるものは人づくり。家庭・職場・地域社会・学校等が、それぞれの機能を発揮して「自らの地域は自らが担う」という意気込みをもって、問題解決に当たる勇気と知恵のある人材を育てて行く必要がある。

〈生涯教育は人づくり運動〉 生涯教育はあらゆる分野での人づくり運動である。これからの秋田の繁栄の原動力は、県民一人一人の自覚と行動にある。郷土秋田をより住みよい魅力あるものにするために、一層の協力を賜りたい。

秋田県市町村生涯教育奨励員協議会事務局『生涯教育奨励員会報 あきた』49(1985年1月)

〈コラムーあの日あの時〉[講演]「ぼくの家庭教育」(抄) 神津善行(作曲家)

〈自分の考えを相手に〉 子どもの「十月(カンナ)」が生まれたとき、子どもへの接し方を夫婦で話し合いました。人間にとって最も大切なことは「相手が何を言っているのかを理解する力」と「自分が相手に何を伝えたいのか」という二つであると思います。

〈「早く早く！」〉 お母さんが一番多く言う言葉は「早く」で、日に70回も言っているそうです。「早く起きて!」「早くご飯を食べて!」に「早くお使いに行って!」。しかし、子どもがパッと駆けて行くと「危ないからゆっくり行きなさい」。

〈15秒の辛抱を〉 子どもは、一日何十回となく親に疑問を聞きます。うちの女房は、子どもの質問に反問すると良いと言います。「虹の向こうにどんなお国があるの?」に対しては「あなたはどんな国があると思うの?」と返す感じで。大事なものは、そこで15秒子どもの顔を見ながら待つということ。それを「忙しいから後で」というと、子どもが自分で考える気持ちが育たないのです。15秒は長いです。しかしこれを我慢すると「お母さんは私の言うことに耳を傾けてくれる」という信頼感が育ちます。

秋田県市町村生涯教育奨励員協議会事務局『生涯教育奨励員会報 あきた』49(1985年1月)

昭和60年度 [昭和60年(1985) 4月1日～昭和61年3月31日]

月 日	事 項
4～3月	秋田県コミュニティ・カレッジ(秋田県生涯教育センター)
4月7日	[中央コミュニティ・カレッジ開講式](秋田県生涯教育センター)
4月14日	[北コミュニティ・カレッジ開講式](大館広域交流センター)
4月14日	[南コミュニティ・カレッジ開講式](横手平鹿広域交流センター)
5月25日	秋田県市町村生涯教育奨励員協議会総会(秋田県生涯教育センター)
7月26日～	市町村生涯教育奨励員研修会(8月7日まで、秋田市・横手市・大館市)
8月22日～	市町村生涯教育推進協議会(9月26日まで、中仙町・八竜町等9市町村)
9月	「青年の意識と行動に関する調査」実施 ・「国際青年年」に当たり、県内の20歳から30歳までを対象に調査を実施 秋田県生涯教育推進協議会「市町村の生涯教育振興のために」を報告 ・秋田県生涯教育推進協議会が「市町村の生涯教育のために」をテーマとして、昭和59年5月から協議・検討を重ねてきた最終報告書
9～2月	生涯教育テレビ講座「探訪 秋田の近世(その1)」
10月19日	秋田県生涯教育推進研究大会・奨励員協議会結成10周年記念式典(県生涯教育センター他) [実践発表]「私の歩む道」山平 昇(コミュニティ・カレッジ受講生)・斎藤一夫(生涯教育奨励員)・小松育子(高校生ボランティア)・豊沢恭子(地域婦人会役員) [基調講演]「21世紀をめざす秋田の教育と課題」岡本包治(立教大学) ・[コーディネーター] 佐藤 守(秋田大学) ・[パネリスト] 柳沢源一(鹿角市教育長)、菅 禮子(作家・ヒューマンクラブ常任理事) 渡部静雄(若美町長)、竹内敏雄(秋田県職業能力開発協会常務理事)
2月22日	生涯教育奨励員幹部研修会(県生涯教育センター)[研究協議]「奨励員活動の現状と課題」



秋田県生涯教育推進研究大会で挨拶する佐々木知事



秋田県生涯教育推進研究大会で講演する岡本包治氏

〈コラムーあの日あの時〉[基調講演]「21世紀をめざす秋田の教育と課題」(抄) 岡本包治

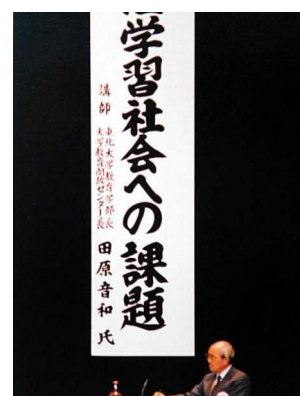
これからの生涯教育は、次の諸点を志向したものであることが望ましい。

- 1 学習を社会に還元する。還元の方法は、学んだことを…他人に分け与える、発表する、他人に教える、役立てる、地域に還元する、他人にも実践してもらうようにする…といった手立てが考えられる。
- 2 町づくりに励む。各地域が「〇〇の町」という具合にイメージ作りに励み、住民が自分の住んでいる地域に誇りをもてるようになることが大事である。
- 3 心の教育をする。知識は増えたが、人間性は忘れたという類いの人が多くなっている。生涯教育は、単なる知識や技術の問題ではない。心の問題、特に人と人のふれあいに重点をおいた教育を行うようにしてもらいたい。
- 4 地域と連携のとれた教育をする。子どもは生涯学び続けるという前提で、学校教育を考えなければならない。まず、学校は子どもの地道な地域活動を褒める。町内会の表彰は、学校の校庭で行うなど地域との結び付きを図ることである。学校経営は、生涯教育の一翼を担っているという立場で推進することが必要である。

秋田県生涯教育推進本部・秋田県生涯教育センター『生涯教育情報 秋田』70(1985年11月)

昭和61年度 [昭和61年(1986) 4月1日～昭和62年3月31日]

月 日	事 項
4～3月	秋田県コミュニティ・カレッジ(秋田県生涯教育センター)
4月13日	[中央コミュニティ・カレッジ開講式](秋田県生涯教育センター)
4月13日	[北コミュニティ・カレッジ開講式](大館広域交流センター)
4月20日	[南コミュニティ・カレッジ開講式](横手平鹿広域交流センター)
7月22日	市町村生涯教育奨励員研修会(～8月6日まで、秋田市・横手市・大館市)
9月17日	生涯教育推進のための協議会(～12月6日まで、合川町、本荘市等14市町村)
10月23日	秋田県生涯教育推進研究大会(秋田県生涯教育センター他) [パネルディスカッション]「これからの人づくり地域づくり」 ・[コーディネーター] あすの秋田を創る生活運動協会副会長 野呂田兼雄 ・[パネリスト] 高畑 進(湯沢市長) 工藤淳志(秋田県公民館連合会長) 中村米吉(秋田県商工会連合会専務理事) [特別発表]「郷土への提言」小林大二郎(毎日郷土提言賞入賞者・上小阿仁村) [講演]「生涯学習社会への課題」田原音和(東北大学)
9～2月	生涯教育テレビ講座「探訪 秋田の近世(その2)」
11月3日	国際理解をすすめる集い((財)小畑勇二郎顕彰会助成事業)(横手平鹿地区協)
11月28日	コミュニティづくりと学習活動研究交流会((財)小畑勇二郎顕彰会助成事業)(秋田河辺地区協)



▲ 秋田県生涯教育推進研究大会の様子

◀ 昭和61年度秋田県コミュニティ・カレッジ開講式と英会話の講座

〈コラムー現代史への招待〉臨時教育審議会

臨時教育審議会(臨教審)は、昭和59年(1984)教育改革を目的に設置された総理大臣直属の諮問機関である。臨教審の答申は昭和60年6月、昭和61年4月、昭和62年4月、同年8月の4次にわたって行われた。4次にわたる答申のうち、教育改革の全体像が明らかにされたのは第2次答申である。生涯学習体系への移行を軸として、学校中心の教育から脱却し、家庭・学校・社会の三者一体の教育体系の総合的再編成が提言された。

昭和61年4月23日、臨教審岡本道雄会長は、中曽根首相に答申を提出した後の記者会見で、第2次答申のポイントは、21世紀に向けて生涯学習を軸とした教育の再編成をすることであり、物質中心主義となり人間性・人間の心が問われている中で、人間の一生における教育というものを考え、これまでの家庭、学校、社会の教育・学習の在り方を問い直して、全体で取り組むことにある、と述べている。

「生涯教育」から「生涯学習」へ。新しい教育の概念は臨教審の答申から生まれた。

秋田県生涯教育推進本部・秋田県生涯教育センター『生涯教育情報 秋田』74(1986年7月)

昭和62年度 [昭和62年(1987) 4月1日～昭和63年3月31日]

月 日	事 項
5月22日	秋田県市町村生涯教育奨励員協議会総会・研修会（秋田県生涯教育センター） ・[講演]「生涯教育 時代とともに」森 可昭（エフエム秋田社長）
10月23日	秋田県生涯教育推進研究大会（秋田県生涯教育センター・児童会館） ・[実践発表]「地域に生きる生涯学習」 「サマーショートボランティア活動を撮り続けて」杓沢 弥（大曲農業高校写真部） 「親子活動を通じた奨励員活動」斎藤節子（大内町生涯教育奨励員） 「地域の教育力の向上を期待して」畠山昭二（峰浜村教育委員会） ・[講演]『『生きがい社会』をめざしてーこれからの地域のあり方ー』深谷和子（東京学芸大学）
10月下旬	[調査] 市町村における奨励員の意識や活動等の状況調査 ・[調査対象] 奨励員1,211人から400人を抽出し、300人から回答 ・[報告書]「生涯教育奨励員の活動に関する調査報告書」昭和63年3月
11月15日 ・16日	生涯教育県民講座（(財)小畑勇二郎顕彰会助成事業） ・[講演]「人生80年時代と生涯学習」塚本哲人（東北大学） 11月15日 羽後町中央公民館、11月16日 能代市勤労青少年ホーム
11～2月 3月	生涯教育テレビ講座 「生涯学習の実践事例の紹介」他（ABS秋田放送、AKT秋田テレビ、4回）秋田県生涯教育推進協議会、報告書「地域の教育力の活性化を図るための方策について」「民間主導、地域主導による生涯教育の推進を図るための方策について」



秋田県生涯教育推進研究大会

〈コラムーあの日あの時〉[講演]『『生きがい社会』をめざして』深谷和子（抄）

人は、自分にとって“生きがいのある人生”であることを願い、一番よいと思う道を選択する。人生の充実感とは、他人のためにどの程度役立つかによって決まるものと思う。

最近、日本の若い人に“指示待ち人間”が増えている。指示すればやるが自発的にはやれない人間で、家庭教育に問題がある。日本の生徒の生存競争の厳しさは100点をとるための厳しさで、自己満足はあっても他人に役立ってはいない。米国の生徒の生存競争の厳しさは、他人のためにどう役立つかである。

この違いが、無意識の行動の中に現れることになる。知識の断片だけが生涯教育ではない。一つひとつは忘れる。しかし積み重ねのうちに何となく人間的な力量が出てくる。それをどんな形でもよいから地域の人たちの暮らしに役立たせる。それができたときに、死ぬまで生きがいをもって暮らせることが約束されることになる。

公民館のプログラムで物を覚えただけでは単なる自己満足。

学んだことで他人や地域に役立たせる。その際、目に見えての役立ち方もあるだろうが、年齢に応じた役立ち方もあるだろう。生涯教育とは「生きがい社会」を生み出す、そうしたシステムだと思う。

秋田県生涯教育推進本部・秋田県生涯教育センター『生涯教育情報 秋田』82（1987年11月）

昭和63年度 [昭和63年(1988) 4月1日～平成元年3月31日]

月 日	事 項
4～3月	秋田県コミュニティ・カレッジ（秋田県生涯教育センター） ・[職場教育セミナー]（講師：小川 功・産業能率大学他）は、この年で最後
5月27日	秋田県市町村生涯教育奨励員協議会総会・研修会（秋田県生涯教育センター） ・[講演]「国際化という観点から見た秋田」県商工労働部次長 増田達夫
6月3日 ～	高齢者活動リーダー養成講座〈新規事業〉 ・高齢者の学習活動に関する理論と実際についての研修 ・[男鹿・南秋地区] 前期（6月3～5日）後期（9月3・4）飯田川公民館 ・[大仙・仙北地区] 前期（6月24～26日）後期（9月24・25日）大曲仙北広域交流センター
7月11日 ～13日	外国人と語る婦人国際理解セミナー（湯沢市中央公民館、能代市勤労青少年ホーム、本荘市鶴舞会館） ・テーマ「外国の料理をつくってみよう」（イラン、韓国、チリ、中国、マレーシア料理） ・[講演]「私の見た日本の家族」陳 明俠
7月21日	生涯教育県民講座（(財)小畑勇二郎顕彰会助成事業）井川町公民館 [講演]「賢く、楽しく、健康に生きる社会をめざして」佐藤 守（秋田大学）
9月22日 ～10月1日	国際交流推進キャラバン（婦人国際交流事業） ・県内在住外国人・婦人団体・国際交流団体会員等によるキャラバン隊が、県内市町村を訪問し、国際交流の推進をPR
10月28日	秋田県生涯学習県民のつどい（秋田県生涯教育センター・児童会館） ・[実践発表]「地域に目を向けて」那波雅代（秋田市立勝平中学校） 「海外青年協力隊と国際交流」原田一徳（能代市） 「由利耕心大学と私の学習」三浦善太郎（矢島町） 「奨励員活動を通して感じたこと」斎藤淳子（神岡町） ・[講演]「ゆうもあで活かす人間関係」青木一雄（元NHKアナウンサー）
11月6日	生涯教育県民講座（(財)小畑勇二郎顕彰会助成事業）花輪公民館 ・[講演]「南部藩の中の鹿角」菊地義尚（南部弁の会長）
3月	秋田県生涯学習推進協議会、報告書「生涯学習における学習情報提供のあり方」



▲ 外国人と語る婦人国際理解セミナー（能代会場）



▲ 国際交流推進キャラバン隊結団式

〈コラムー現代史への招待〉「文部省の機構改革」

文部省は、臨時教育審議会答申を受け、昭和62年10月の教育改革推進大綱に基づき、昭和63年7月、社会教育局を改組し、生涯学習に関する企画調整を行う生涯学習局を設置した。生涯学習局は文部省の各局で行われていた学校教育、体育・スポーツ、文化に関する事務について、関係施策の企画調整を行う権限を有する部局になった。

平成13年、文部科学省への再編に際し、生涯学習局は生涯学習政策局となる。これは、政策形成をより重視する観点から、生涯学習政策の立案機能を強化し、一層の推進を図るため、中央教育審議会の運営や調査統計等の所掌を同局に移管し、学校教育も含めた教育政策に関する企画調整機能の強化を図った。

平成30年10月1日の機構改正により、生涯学習政策局は総合教育政策局に改組された。

平成元年度 [平成元年(1989) 4月1日～平成2年3月31日]

月 日	事 項
4月1日	「秋田県生涯教育センター」を「秋田県生涯学習センター」に改称 「秋田県生涯教育推進要綱」を全面改正し「秋田県生涯学習推進要綱」策定
4～3月	秋田県コミュニティ・カレッジ(秋田県生涯学習センター)中央・北・南三地区で開催
5月26日	秋田県市町村生涯教育奨励員協議会総会・研修会(秋田県生涯学習センター) ・[総会]〈会則改正〉「秋田県市町村生涯教育奨励員協議会」を「秋田県生涯学習奨励員協議会」に改める ・[講演]「秋田雑感ー県外から見た秋田」塩田和人(県商工労働部工業振興課)
6月2日	長寿学園「グレート・アカデミー平成」(秋田県生涯学習センター)〈新規事業〉 ・高齢者に対して総合的・体系的な学習機会を提供し、地域文化の振興に参画する活力ある指導者としての資質を養う研修事業
7月25日	秋田県生涯学習奨励員研修会(～8月2日まで、秋田市・大館市・横手市)
10月22日	秋田県生涯学習県民のつどい(秋田県生涯学習センター・児童会館) ・[実践発表]高田美智子(大森中学校)、中村きよえ(秋田赤十字病院)、平岡敬作(中央コミュニティ・カレッジ受講生)、永塚光子(能代市生涯学習奨励員)
11月18日	秋田総合生活文化会館・美術館(アトリオン)開館 開館記念行事は平成2年7月まで
11～2月	生涯学習テレビ講座「生涯学習の実践事例の紹介」他(4回)

〈コラムーあの日あの時〉八森町ワープロ講座

壮年以上の方を対象にワープロ講座を告知したところ、申込みが殺到。参加者の動機は「ワープロという新しい機械に触れてみたかった」「積極的に取り組む時期が来ている」「美しい文章を作る仲間と楽しさを味わいたい」等々。

最初は横文字に戸惑った参加者も、最終日には立派な案内状を完成させ、講師からお褒めの言葉をもらっていた。

秋田県生涯学習推進本部他『豊かさへの旅』2(1989年7月)



▲ 八森町ワープロ講座
講座開始30分前から予習する参加者もいた

〈コラムー現代史への招待〉「秋田県生涯学習推進要綱」の制定

平成元年4月1日「秋田県生涯教育推進要綱」(昭和46年11月)を全面改正した「秋田県生涯学習推進要綱」が制定された。この制定は「秋田県生涯教育センター」から「秋田県生涯学習センター」へ名称を変更したのと期を同じくしている。

要綱には、生涯学習の推進に必要な教育環境の整備について、次の4点が示されている。

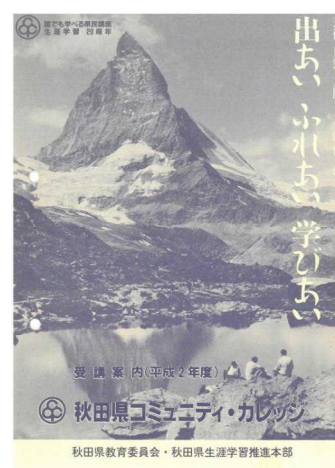
- 1 住民主体の生涯学習推進体制の構築のためには、生涯学習奨励員の力に期待するところが大きく、この制度の拡充を図るべきである。
- 2 カルチャースクール等民間の教育事業はますます伸びると考えられる。生涯学習振興の上から公教育との連携を図り、支援すべきである。
- 3 学習情報提供の充実。科学技術の発達をもたらした情報ネットワークの形成や放送を利用した学習の開発を行う必要がある。
- 4 地域づくりを目指す生涯学習の推進のためには計画性が要求される。市町村がそれぞれの目指す生涯学習社会への総合発展計画を策定し、それに基づく施策を展開することが期待される。

秋田県生涯学習推進本部他『豊かさへの旅 秋田の生涯学習20年』(1990年)

第 2 章 年 表

平成 2 年度 [平成 2 年 (1990) 4 月 1 日～平成 3 年 3 月 31 日]

月 日	事 項
4 月 22 日	アトリオン開館記念行事「中国甘肅省文物展」(～7 月 1 日)
4～3 月	秋田県コミュニティ・カレッジ(秋田県生涯学習センター)
5 月 24 日	秋田県生涯学習奨励員協議会総会・研修会(秋田県生涯学習センター) ・[シンポジウム]「秋田の生涯学習ーこれからの奨励員活動に期待するものー」 ・[司会] 野呂田兼雄(秋田県生涯学習推進協議会委員) ・[登壇者] 大友康二(秋田県生涯学習センター)、佐々木久志(仙南村教育委員会) 滝沢弘一(秋田県生涯学習奨励員協議会)、高野富子(秋田市生涯学習奨励員)
7 月 1 日	「生涯学習の振興のための施策の推進体制等の整備に関する法律」施行
9 月 5 日 ～11 日	秋田県生涯学習フェスティバル「豊かさへの旅」(第 1 回秋田県民文化祭に位置付け) ・秋田の生涯学習 20 年、秋田県生涯学習奨励員協議会結成 15 年、秋田県生涯学習センター開所 10 年の節目を記念し、式典・県民文化祭を実施 ・テーマ「新しい風・生涯学習」風 立ちぬ きらめけ 命
11～2 月	生涯教育テレビ講座「生涯学習の実践事例の紹介」他(ABS、AKT、4 回)
3 月	秋田県生涯学習推進協議会、報告「生涯学習と地域づくり」



▲ 秋田県生涯学習フェスティバル 佐々木知事の挨拶

▲ [パンフレット] 平成 2 年度秋田県コミュニティ・カレッジ

〈コラムー現代史への招待〉「生涯学習の振興のための施策の推進体制等の整備に関する法律」 (生涯学習推進法)の制定について(平成 2 年 6 月成立、7 月 1 日施行)

この法律は、生涯学習の振興という時代の要請にこたえ、実現可能な、また、速やかに実施すべき諸施策を規定したものである。法律では、第一に、都道府県における生涯学習事業推進体制の整備について定めている。第二には、地域住民のため、多様な学習の機会の提供を行うとともに、民間事業者の能力を活用するための方策を規定している。第三には、生涯学習の振興の中心的役割を果たす文部省に生涯学習審議会を置き、都道府県においても、生涯学習審議会を設置することができることとし、市町村においては、関係機関及び関係団体との連携協力体制の整備に努めることを求めている。

この法律が制定・施行されたことで、国・地方における、生涯学習推進体制の在り方が明確になるとともに、体制の整備が進むことになった。

文部省教育助成局地方課『教育委員会月報』548(1995年12月)他

平成3年度 [平成3年(1991)4月1日～平成4年3月31日]

月 日	事 項
4～3月	秋田県コミュニティ・カレッジ（秋田県生涯学習センター） ・中央・北（鷹巣阿仁広域交流センター）・南（大曲仙北広域交流センター）の三地区で開催 ・中央コミュニティ・カレッジに18:30～20:00に開催する夜間コース〔特別講座〕 開設（5～10月、月2回金曜日、12回）
5月22日	秋田県立農業科学館開館（大曲市内小友）
6月26日	秋田県生涯学習新任奨励員・事務担当者研修会（秋田県生涯学習センター） ・〔講話〕「魅力ある地域をつくるために」佐藤 夙（前秋田市生涯学習室長）
9月11日	第2回県民文化祭、秋田県生涯学習県民のつどい（秋田県児童会館） ・〔記念講演〕「世界の日本、日本の秋田」須田精一（県総合発展計画審議会専門委員）



▲ 左から、農業科学館竣工式当日の入口、竣工式神事会場、佐々木知事の挨拶、夜のエントランスビロティ

〈コラムーあの日あの時〉「地域づくりをめざす」平成3年度新任奨励員・事務担当者研修会分散会報告

〈鹿角市まほろば塾〉ふるさと創生事業として開設。入塾資格は20～45歳の学習意欲のある者。1期生は33名。鹿角全体を国際化するため、アメリカに子どもたちをホームステイさせる、英文マップを作成するなどの事業に取り組んだ。

〈稲川町コロンブスクラブ〉ふるさと創生資金の利息運用団体。毎月25日情報紙を発行。仙台フィルハーモニー管弦楽団演奏会、皆瀬川流域豪華盛装交流会（参加者はモーニング、イブニングドレスを着用）等を実施。

〈羽後町ゆきとぴあ七曲〉「雪がある、牛がある、七曲峠がある」。雪国メルヘン音楽会、花嫁道中（馬そり道中）、講演会「ここが地球のまんなかです」（永 六輔）、七曲峠の中間に雪穴を掘り、ローソクを灯してのパノラマレース等を実施。

〈秋田市下川羽川青年会〉老人クラブや地域住民の協力により、ザリガニやカブト虫等、都会では見られない昆虫類や自然の植物を集めたり、チマキを手作りし、関東地方の子どもたちに送っている。

秋田県生涯学習奨励員協議会・秋田県生涯学習推進本部『平成3年度新任奨励員・事務担当者研修会報告書』（1992）

〈コラムー現代史への招待〉長寿学園グレート・アカデミー平成

高齢者（60歳以上）に対し、総合的で体系的な学習機会を提供するとともに、地域文化の振興に参画する活力ある指導者としての資質を養うことを目的に、平成元年度から平成12年度にかけて開講した。

長寿学園「グレート・アカデミー平成」教養課程は地方会場で、専門課程は秋田県生涯学習センターで実施された。

毎年秋には、秋田県生涯学習センターを会場に、専門課程の学園祭が開かれた。

秋田県生涯学習推進本部他『豊かさへの旅 秋田の生涯学習20年』（1990年）、秋田県生涯学習センター『秋田県生涯学習センター要覧』（1991年）



▲ [チラシ] 平成7年度グレート・アカデミー平成

第2章 年 表

平成4年度 [平成4年(1992)4月1日～平成5年3月31日]

月 日	事 項
7月8日	秋田県生涯学習新任奨励員・事務担当者研修会（秋田県生涯学習センター） ・[テーマ]「生涯学習奨励員－その日常活動を意欲的に創造しよう」 ・[講演]「最近の子どもの生活と学校週5日制－地域の受皿」駒林邦男（岩手大学）
9月20日	秋田県生涯学習県民のつどい（第3回県民文化祭）（秋田県児童会館） ・[記念講演]「風土と文化－わたしの風土論」バーバラ寺岡（料理研究家）
11月10日 ・11日	移動奨励員セミナー（財）小畑勇二郎顕彰会助成事業（秋田厚生年金休暇センター） ・[シンポジウム]「社会の変化に対応できる生涯学習奨励員のあり方を考える」 ・[講演]「ふるさとを考える－地域を支える人々のために」前川盛太郎（岩城町長）
3月24日	秋田県生涯学習推進協議会、答申「秋田県における生涯学習推進体制及び県生涯学習センターの機能・役割について」

〈コラム－現代史への招待〉生涯学習モデル市町村事業

平成4年度から8年度にかけて、県では、市町村がそれぞれの地域に根ざした学習課題の解決を図る事業を展開するよう支援するとともに、魅力的な町づくりを進めるモデル事業を9市町村で実施した。

市町村名	実施年度	事業内容
大曲市	平成6年 ～8年	生涯学習施設等のネットワーク作りによる生涯学習のまちづくり ・生涯学習市民のつどい・農業科学ふれあい教室 他
鷹巣町	平成6年 ～8年	町民総ぐるみのボランティア活動による生涯学習のまちづくり ・生涯学習ボランティア交流会・高鷹大学 他
比内町	平成6年 ～8年	生涯学習を進める住民大会の実施による生涯学習のまちづくり ・生涯学習町民大会・地域青年リーダー研修 他
阿仁町	平成4年 ～6年	高齢者の多様な学習と社会参加による生涯学習のまちづくり ・高齢者の生きがい講座・生涯学習推進のつどい 他
琴丘町	平成4年 ～6年	学校教育と社会教育の連携による生涯学習のまちづくり ・ふるさと再発見学習・遊友スクール・わんぱく縄文太鼓教室 他
東由利町	平成5年 ～7年	青少年の地域活動の促進による生涯学習のまちづくり ・高校生ボランティアスクール・少年自然教室 他
雄物川町	平成6年 ～8年	世代間交流活動の促進による生涯学習のまちづくり ・ハーモニカ教室・明道塾・少年と青年の夏山のつどい 他
大雄村	平成6年 ～8年	自主サークルの活動促進による生涯学習のまちづくり ・バイキングメニュー方式による自主学习グループ活動 他
羽後町	平成6年 ～8年	勤労者の学習機会の拡充による生涯学習のまちづくり ・就労婦人セミナー・家庭教育講演会・ボランティア養成講座 他

秋田県教育委員庁生涯学習振興課『秋田県の生涯学習・社会教育』平成6年4月



学校週5日制が始まります。

続いている未来に私たちがいようと、
忘れないでいよう。

9月12日土曜日
私たち一人一人が参加する生涯学習の
コミュニケーションをリアルです。

秋田県教育委員会

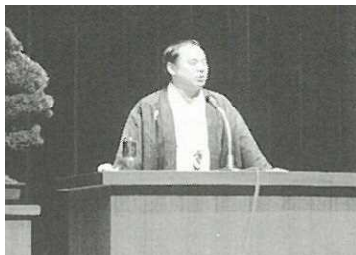
〈コラム－現代史への招待〉学校週5日制スタート

平成4年(1992)3月23日、文部省は「学校教育法」施行規則の一部を改正する省令を公布。公立幼稚園・小中高校・盲学校・聾学校・養護学校の休業日に毎月第2土曜日を加え、9月1日から施行するとした。学校週5日制は、子どものたちの生活全体を見直し、ゆとりのある生活の中で、子どもたちが個性を生かしながら豊かな自己実現を図ることを目的に実施された。平成7年4月から月2回、平成14年4月からは、毎週土曜日が休業日となり、完全な週5日制となった。

◀ [広告] 学校週5日制実施 (『豊かさへの旅』20)

平成5年度 [平成5年(1993)4月1日～平成6年3月31日]

月 日	事 項
4～3月	秋田県コミュニティ・カレッジ (秋田県生涯学習センター) ・中央・北 (鷹巣阿仁広域交流センター) ・南 (大曲仙北広域交流センター) の三地区で開催 ・中央コミュニティ・カレッジに18:30～20:00の [パソコン (初級) コース] 開催 ・生涯学習センターにおけるパソコン系の講座は初、夜間コースはこの年で最後
7月8日	秋田県生涯学習新任奨励員・事務担当者研修会 (秋田県生涯学習センター) ・[シンポジウム] 「地域の実践例に学ぶ」 ・[コーディネーター] 滝沢弘一 (秋田県生涯学習奨励員協議会) ・[パネラー] 藤原信好 (コロンブス倶楽部)、門脇光浩 (サラダハウス) 奈良 努 (鹿角まほろば塾)
9月11日	秋田県生涯学習県民のつどい (秋田県児童会館) ・[記念講演] 「農家育ち」 林家こん平 (落語家) ・巧みな話術で会場を笑いの渦に巻き込みながら、農家に生まれ育ち、林家三平師匠と出会い、落語家として一家をなすまでを語る。 「何事をなすにも、目標に向かってとことん努力すべき」
11月1日	秋田県立図書館、秋田市山王新町に移転、落成式、開館 (11月2日)
3月	秋田県生涯学習推進協議会、報告「青少年の生涯学習への参加促進について」



▲ 生涯学習県民のつどい講演
「農家育ち」林家こん平氏



▲ サンパギータの会



▲ 11月に開館した秋田県立図書館

〈コラムー現代史への招待〉小川ひさ子「フィリピンからの花嫁たちを支援して」(抄)

「今年も花嫁たちのおかあさんを、秋田に招くことができる」

昨年の「サンパギータの会・クリスマスパーティー」は予想を上回る参加者で大成功。

「夢でしか逢えない娘と再会できた喜びと幸せは何にも例えようがない感激」と挨拶されたお母さんの言葉が心を打つ。

サンパギータはフィリピンの国花。白く小さなクチナシの花に似た甘い香り。

サンパギータの会は、平成4年4月に設立したフィリピンからの花嫁とその夫たちを支援する市民の会。花嫁たちは夫との出会いで幸せですが、夫以外に相談相手がなく、気兼ねなく集い、私たち日本人に悩み等を話せる場を設けようというのが結成のねらい。

フィリピンの女性は、驚くほど明るい。物事を否定的に考えない。あの明るさ、真面目さ、夫に尽くす健気さ、夫婦仲は私どもが妬けるほどよく、微笑ましく思えます。

週1回の日本語学習への熱意には感嘆させられます。早く日本人になりきろうと、一生懸命です。「何かをしてあげよう」が、今は私たちが「学ばせてもらう」に変わりました。仲間を増やし、今度はフィリピン以外の国の人との輪を広げ、小さな交流で世界の平和を願いつつ、そこはかとなく漂う「サンパギータの花のような会」でありたいと思います。

秋田県生涯学習推進本部他『豊かさへの旅』29 (1994年1月)

第2章 年 表

平成6年度 [平成6年(1994)4月1日～平成7年3月31日]

月 日	事 項
4月20日	秋田県生涯学習センター分館「ジョイナス」開館 ・平成5年11月、県立図書館の秋田市山王新町への移転に伴い「広く県民に自主学習等活躍の場を提供する」ことを目的に開館。愛称「Joinus」には「みんなで一緒に参加しませんか」の意味と「Joy」(楽しむ)の意味がこめられている 秋田県立近代美術館開館 (横手市赤坂)
5月26日	秋田県生涯学習奨励員協議会総会・研修会 (秋田県生涯学習センター) ・[実践発表]「北鹿地区と鹿角市の現状について」小田島郁郎(北鹿地区生涯学習奨励員) 「女性議会と奨励員のかかわり」大山陽子(秋田県生涯学習奨励員協議会) 「ここにも学習の光を」今野次郎(南外村生涯学習奨励員)
6月28日	秋田県生涯学習審議会を条例で設置
9月8日	秋田県生涯学習県民のつどい (秋田県児童会館) [インタビューダイアログ]「生涯学習のまちづくりとボランティア活動」 ・[コーディネーター] 斎藤容一郎(秋田魁新報社) ・[講師] 山田正行(秋田大学)、佐々木彦左エ門(雄物川町企画課) 藤盛節子(秋田県婦人会館)、森田千枝子(秋田県生涯学習奨励員協議会)
11月5日	ジョイナス・フェスティバル (秋田県生涯学習センター分館「ジョイナス」)
11月17日	移動奨励員セミナー ((財)小畑勇二郎顕彰会助成事業、秋田県生涯学習センター分館「ジョイナス」) ・18日 ・[講演]「生涯学習の町づくりとボランティア活動」山田正行(秋田大学) ・[事例発表]「生涯学習の町づくり運動と奨励員活動」 宮野雄治(鷹巣・阿仁地区生涯学習奨励員) 榎 民子(秋田市生涯学習奨励員)、照井 誠(山内村教育委員会)



▲ 秋田県立近代美術館開館記念講演

◀ 建設工事中の近代美術館と彫刻作品の設置作業

〈コラムー現代史への招待〉秋田県生涯学習審議会

昭和47年(1972)生涯学習に関する県民の意見・要望を反映させるため「秋田県生涯教育推進本部設置要綱」(平成元年「秋田県生涯学習推進本部設置要綱」に改称)に基づき、推進本部に付属する審議機関として「秋田県生涯教育推進協議会」(平成元年「秋田県生涯学習推進協議会」に改称)を設置し、推進本部長である知事の諮問に応じて建議する機関として誕生した。

平成2年「生涯学習のための施策の推進体制等の整備に関する法律」で都道府県で生涯学習審議会設置が定められたことや、平成5年3月、秋田県生涯学習推進協議会が「県生涯学習審議会の条例設置」等について答申したことなどを受け、それまでの推進協議会に代わる審議機関として、平成6年6月28日「秋田県生涯学習審議会」が条例で設置された。

秋田県生涯学習推進本部他『豊かさへの旅』35(1995年1月)

平成7年度 [平成7年(1995)4月1日～平成8年3月31日]

月 日	事 項
4～3月	生涯学習テレビ講座(年6回、15分) ・「地域づくりと青年活動」(男鹿市、西仙北町) ・「体験学習と交流で生まれる生涯学習」(藤里町、鳥海町) ・「郷土に生きる芸術文化」(上小阿仁村、十文字町)
5～3月	秋田県コミュニティ・カレッジ ・コースプログラムを大幅に切替え、能代市・横手市に「日本語指導ボランティア養成」「現代社会と女性」コースを新設 ・県生涯学習センター分館ジョイナスで「音楽への招待」「ジャズの世界」を開講
5～10月 7～3月	外国人に対する日本語教育推進事業〈新規事業〉 ・[指導者養成講座](6回)(秋田県総合教育センター) ・[日本語教育講座](週2回)鹿角市・大館市・鷹巣町・能代市・天王町・県生涯学習センター分館・本荘市・大曲市・横手市・湯沢市
5～3月	生涯学習モデル市町村事業 大曲市・鷹巣町・比内町・金浦町・雄物川町・大雄村・羽後町
7月6日	秋田県生涯学習奨励員新任奨励員・事務担当者研修会(秋田県生涯学習センター) ・[事例発表]「地域学習活動実態調査から」 畠田克美(横手市生涯学習奨励員) 「グループ交流で学習活動の活性化」 石垣舜一(羽後町生涯学習奨励員) 「実践活動で奨励員をアピール」 伊藤容一郎(五城目町生涯学習奨励員)
10月13日 ～15日	秋田県生涯学習フェスティバル'95 in あきた(秋田県生涯学習センター他) ・[講演]「ひとはみかけによらぬもの」 広瀬久美子(NHKアナウンサー) 他
10月29日	社会通信教育地方受講者研究集会(秋田県生涯学習センター) ・[写真講座][薬膳講座][自然観察講座]
11月17日	・[ファッションアドバイス講座][2級建築士受験準備講座]
2月15日	秋田県生涯学習審議会、知事、教育委員会へ答申「21世紀を展望した秋田県における生涯学習の振興方策について」

〈コラムーあの日あの時〉 あったか父親講座(秋田市)

平成7年度、秋田市は「あったか父親講座」を開講。県が父親を対象とした生涯学習講座を開始したのは平成10年代。秋田市の動きは、県よりも早かったといえる。講座は次の5回。

- ①「親の知らない子どもの世界」講師:木村志義(元養護学校長)
- ②「お父さんが料理長」講師:岸 和子(料理教室長)
 - ・メニューは、鶏のクラポードン・鳥賊の焼き鳥風カレー味・鮭ご飯のり巻き・プチトマトと黄桃のコンポートと少し高度。
 - ・「料理の鉄人」を自称する参加者がいたことで、何とか完成。
 - ・食事の後は、親子の本音討論会。
子「お酒を飲み過ぎると脳細胞が崩れる」(手厳しい指摘)
父「お酒を飲むのも男の付き合い」(終始苦しい答弁)
- ③「昼間のパパは光ってる」子どもたちの職場見学
子「いつも家でゴロゴロしている姿とは違う」
父「父親の存在感をアピールすることができました」
- ④「ニューファミリーと子どもの教育」講師:渡辺俊雄(元小学校長)
- ⑤「子どもの愛と性」講師:橋本禎嗣(橋本愛隣医院)



秋田県生涯学習推進本部他『豊かさへの旅』38(1995年8月)

第 2 章 年 表

平成 8 年度 [平成 8 年 (1996) 4 月 1 日～平成 9 年 3 月 31 日]

月 日	事 項
4 月 2 日	秋田県立博物館「秋田の先覚記念室」「菅江真澄資料センター」オープン
4～3 月	生涯学習テレビ講座 (年 6 回、15 分)「自然環境と生涯学習」(金浦町、田沢湖町) 「地域に根ざした女性活動」(大館市、能代市) 「郷土に生きる伝統文化」(大雄村、稲川町)
4～11 月	外国人に対する日本語教育推進事業
4～3 月	・[指導者養成講座] (4 回) 秋田県総合教育センター ・[日本語教育講座] (週 2 回) 鹿角市・大館市・鷹巣町・能代市・天王町・県生涯学習センター分館・本荘市・大曲市・横手市・湯沢市
5～3 月	秋田県コミュニティ・カレッジ ・中央コミュニティ・カレッジ [実用英会話 (中級)] 英会話系の講座はこの年で最後
5～3 月	生涯学習モデル市町村事業 大曲市・鷹巣町・比内町・田代町・金浦町・大雄村・羽後町
9 月 22 日 ・ 23 日	秋田県生涯学習フェスティバル'96 in あきた (秋田県生涯学習センター他) ・[生涯学習奨励員研究大会] 秋田県生涯学習センター ・[講演]「まちづくりとは」神永 光 (ABS秋田放送報道局長) ・[事例発表] 大山陽子 (琴丘町奨励員) 堀井スミエ (雄和町 同) 高橋重行 (平鹿町同) ・[コミュニティ・カレッジ公開講座] ・[講演]「21世紀はこうなる」佐野 浩 (奈良先端科学技術大学院大学)
10 月	放送大学秋田地域学習センター開所 ・放送大学は、昭和 56 年、放送大学学園法により設置。秋田大学鉱山学部附属鉱業博物館内に、放送大学の授業に使用されるビデオ等を視聴して学習する施設がオープン
10 月 13 日	社会通信教育地方受講者研究集会 (秋田県生涯学習センター) ・[写真講座] [親子で学ぶパソコン講座] [家庭電化製品講座]
11 月 17 日	・[ファッションアドバイス講座] [漢字検定講座]



◀ 秋田県立博物館増設
工事とオープニング
セレモニー

〈コラムーあの日あの時〉「開かれた学校」(抄) 森田千枝子 (井川町社会教育委員)

家事の手が空いた日の午後、小学校の体育館をプラッと覗いた。観覧席を兼ねた階段にカラフルな子どもの靴下を見付けた。そこに座っている女の子たちに聞くと「それ、昨日もあったよ」と。誰かたった一人でもいい、どうして拾ってくれなかったのか。

それから間もなく、体育館のトイレでカラカラになった便器の汚れと遭遇。どうにもやりきれない。もう一人いたお母さんと男女の便器を洗ったが、以後、日に日に大きくなった一つの危機感。どの子も素直で明るいのに、学校という集団生活の陰で、より磨かれていくべきはずの感覚が鈍化している。この現実の落差をどう埋めようか。

階段に腰掛けて、未来の小学校を想像する。午後になると地域の人たちが学校に自由に出入りし、先生も子どもたちも地域の人たちと一緒に触れ合う。絵を描いたり、町史を紐解いたり、体を動かしたり。たまには親子で机を並べ、授業を受けるのもいい。そんな開かれた学校が待ち遠しい。

秋田県生涯学習推進本部他『豊かさへの旅』48 (1997年 3 月)

平成9年度 [平成9年(1997)4月1日～平成10年3月31日]

月 日	事 項
5月30日	秋田県生涯学習奨励員協議会総会・研修会 ・[講演]「菅江真澄の見た東北」 赤坂憲雄(東北芸術工科大学)
5～2月	秋田県コミュニティ・カレッジ(秋田県生涯学習センター) ・この年のテーマは「ふるさと秋田」、秋田の歴史・自然を通して、秋田の近未来における姿を模索する講座を開設 ・中央コミュニティ・カレッジ[ハングル基礎]20回(講師:韓 秀熙)をこの年限りで開催
5～3月	生涯学習モデル市町村事業 田代町・昭和町・金浦町・中仙町
9月13日 ～15日	秋田県生涯学習フェスティバル'97 in おおだて(大館市文化会館、大館市民体育館他) ・秋田県生涯学習フェスティバル、初の地方開催 ・テーマ「大館からマナビの輪―地域づくりに向けて」 ・[ふるさとを考える講演とシンポジウム]「比内郡建置をめぐって」 ・[日本語弁論大会]「外国人による日本語弁論大会」他
10月7日	秋田県生涯学習奨励員研究大会(秋田県生涯学習センター) ・[基調提言]「奨励員活動をより活性化するために」 佐々木久長(聖霊女子短期大学) 斎藤一雄(秋田県生涯学習奨励員協議会副会長)
10～12月	生涯学習テレビ講座(この年で最後) ・「鹿角まほろば塾」(鹿角市)、「少年少女青空教室」(八森町) ・「子どもたちの校外活動」(飯田川町)、「ユートリックススポーツタイム」(仁賀保町) ・「ふるさとを学ぶ」(南外村)、「まんがからふるさとを学ぶ」(増田町)
平成9年度	外国人に対する日本語教育推進事業



▲「秋田県生涯学習フェスティバル'97inおおだて」郷土芸能「大館ばやし」・シンポジウム・日本語弁論大会

〈コラム―あの日あの時〉佐藤重義(由利町)「結婚式お手伝いします―何でも奉仕団BASサークル」(抄)

町・婦人団体で提唱している生活運動の項目に「会費制結婚式のすすめ」がありますが、会費制で、しかも町施設を使つての結婚披露宴は、最近では年に数回しか行われておりません。その理由の一つに、実行委員として進めてくれる人がいないことがあります。

青年会活動が盛んなときは会員で盛り上げていたのですが、今ではそういう活動も困難な状態です。

そこで「私たちにできることはないか」と集まってできたのが「ブライダル・アシスタント・サークル」です。10名のスタッフで農業・自営業・会社員と職業も様々。いずれも公民館で結婚式をあげた経験者。自分たちの経験をもとに、意見を出し合つて進めています。

司会・エスコート・音響・照明等役割を分担し、慣れない蝶ネクタイと白手袋で、気持ちをビシッと引き締め、それぞれの位置について新郎新婦入場。新婦の最初のお色直しが入ると全員ホッと一息。束の間の打合せをし、また自分の持ち場へと走る…。緊張感の連続ですが、無事終了し「いい結婚式だった」と言われたときの満足感は最高です。

秋田県生涯学習推進本部他『豊かさへの旅』51(1997年9月)

平成10年度 [平成10年(1998) 4月1日～平成11年3月31日]

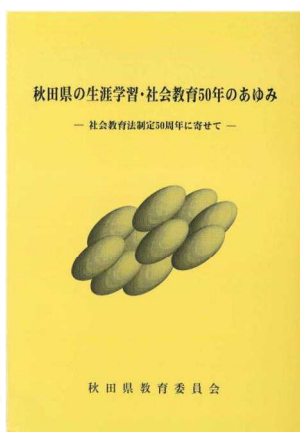
月 日	事 項
5月28日	秋田県生涯学習奨励員研修会(秋田県生涯学習センター) ・[講演]「地域学と生涯学習－自分学としてのオラホロジーのすすめ－」米地文夫(岩手県立大学)
5～3月	生涯学習モデル市町村事業 田代町・昭和町・中仙町
5～12月	長寿学園グレート・アカデミー平成 ・[総合課程] 大館市、鷹巣町、西目町、角館町、雄勝町 ・[専門課程][生涯生活設計コース] 秋田県生涯学習センター
7～12月	あきた県民カレッジ(秋田県生涯学習センター)〈新規事業〉 ・県・市町村、高等教育機関、民間団体等が実施する広域的な事業の体系化を図り、県民に多様で魅力ある学習機会を提供することを目的にスタート ・6地区26市町村で開催 ・カレッジ主催講座[あきた学専修コース][広域的課題学習コース][現代リフレッシュ学コース] ・カレッジ連携講座(バイオニアコース)で初めて「ボランティア養成」のコースが開設 ・学習単位の認定は、県民カレッジ事務局が指定するテレビ・ビデオの視聴や放送大学の授業科目を履修することでも認定
7月9日	秋田県生涯学習奨励員新任奨励員研修会(秋田県生涯学習センター分館「ジョイナス」) [事例発表] 三浦謙蔵(阿仁町生涯学習奨励員)、佐々木宮廣(神岡町生涯学習奨励員)
10月2～11日	秋田県生涯学習フェスティバル'98(秋田市文化会館、秋田県生涯学習センター他)
10月7日	秋田県生涯学習奨励員研究大会(秋田県生涯学習センター) [パネル討論会]「よりよい地域づくりをめざした生涯学習」 ・[コーディネーター] 山上秀樹(秋田魁新報社) ・[パネラー] 鈴木組子(昭和町生活学校運営委員)・佐川亜希子(協和町教育委員会) 土田賢輔(院内小学校)・谷 秋二(県生涯学習奨励員協議会常任理事) [講演]「地域づくりと生涯学習」伊藤俊夫(東京家政大学)
12月4日	秋田県生涯学習奨励員協議会指導者研修会(彌高会館) [講演]「戊辰戦争130周年に思う」田口勝一郎(秋田和洋女子高等学校)
平成10年度	県立少年自然の家で「セカンドスクールの利用の推進について」検討開始 ・学校週5日制の完全実施を前提に、県立少年自然の家を利用した各学校の自然教室や集団宿泊体験学習を発展させ、活動プログラムを教科の授業時数にカウントする事業として検討開始 外国人に対する日本語教育推進事業〈最終年度〉



▲ [チラシ] [パンフレット] あきた県民カレッジ

平成11年度 [平成11年(1999) 4月1日～平成12年3月31日]

月 日	事 項
4～12月	日本語学習支援事業〈新規事業〉 ・日本語を母国語としない住民を対象に、初級程度の日本語学習の講座を開催 ・指導者研修会（秋田県生涯学習センター） ・日本語教室（鹿角地域広域交流センター、大館市中央公民館、鷹巣町中央公民館、能代市中央公民館、八郎潟町公民館、県生涯学習センター分館、本荘市中央公民館、大曲仙北広域交流センター、角館広域交流センター、横手平鹿広域交流センター、十文字町文化センター、湯沢雄勝広域交流センター）
5月28日	秋田県生涯学習奨励員協議会研修会 （秋田県生涯学習センター） ・[シンポジウム]「21世紀を担う若きリーダー達と語る生涯学習」 ・[コーディネーター] 佐々木宮廣（神岡町生涯学習奨励員協議会長） ・[シンポジスト] 高橋幸喜（八竜町砂像連盟）、小松凡子（秋田大学生） 高久 功（カヌー安全委員会）、山脇佳子（日本語教育指導者）
6～12月	あきた県民カレッジ （秋田県生涯学習センター） ・[現代リフレッシュ学コース] に「日本語指導ボランティア養成講座」開設
9月23日	社会教育法制定50周年記念祝賀会 （アキタニューグランドホテル） ・[講演]「社会教育法の50年と21世紀の社会教育」山田正行（秋田大学） ・[小冊子]『秋田県の生涯学習・社会教育50年のあゆみー社会教育法制定50周年に寄せてー』発行
10月22日～26日	秋田県生涯学習フェスティバル'99 in おおまがり （大曲市中央公民館、大曲市民会館他） [前夜祭] [オープニング行事] [音とおどりフェスタ'99in大曲] [市民創作展、紙芝居ふれあい広場、お茶席] [婦人文化祭、美術を楽しむ会] 他
10月26日	秋田県生涯学習奨励員研究大会 （大曲市中央公民館） ・[パネル討論会]「共に生きる生涯学習のあり方ー新しい時代を迎える中でー」 ・[コーディネーター] 南教育事務所仙北出張所社会教育アドバイザー 高橋 滋 ・[パネリスト] 遠田順夫（秋田わんぱくclub桜たんけん塾長）、佐藤喜美男（あきた県民カレッジび証受賞者）、鈴木智子（湯沢市中央公民館）、小松連蔵（雄物川町生涯学習奨励員）
平成11年度	教育施設のセカンドスクールの利用推進事業〈新規事業〉 ・教育施設等の人的、物的機能を十分に活用し、学校と教育施設が一体となって、郷土の自然や文化との触れ合い体験・共同生活体験を実施する事業 ・大館・保呂羽山・岩城少年自然の家、青少年交流センター等で実施



▲ 秋田県生涯学習フェスティバル'99 in おおまがり
オープニング行事 大川西根小学校児童による
「子どもミュージカル」

▲ [チラシ] 平成11年度
あきた県民カレッジ

▲ [小冊子] 『秋田県の生涯学習・社会教育50年のあゆみー社会教育法制定50周年に寄せてー』 秋田県教育委員会（1999年9月）

平成12年度 [平成12年（2000）4月1日～平成13年3月31日]

月 日	事 項
4月1日	〔機構改革〕 教育庁生涯学習課と教育庁文化課の一部が統合 生涯学習課長 ———— 調整・生涯学習推進班、社会教育班、学芸振興班 文化財保護室長 ———— 文化財保護班、埋蔵文化財班 ・博物館・美術館・近代美術館・農業科学館の管轄が生涯学習課になり、セカンドスクール受け入れ開始
4～12月	日本語学習支援事業 ・指導者研修会（秋田県生涯学習センター） ・日本語教室（鹿角市、大館市、鷹巣町、能代市、八郎潟町、秋田市、本荘市、大曲市、角館町、横手市、十文字町、湯沢市）
4～2月	縄文ゆとり工房〈新規事業〉 （秋田県生涯学習センター）平成14年度まで実施
5月26日	秋田県生涯学習奨励員協議会総会・研修会 （秋田県生涯学習センター） ・〔シンポジウム〕「あしたへつなぐ生涯学習」 ・〔コーディネーター〕谷 秋二（県生涯学習奨励員協議会常任理事） ・〔シンポジスト〕佐藤万里子（La Vita編集委員）、皆川雅彦（山本町教育委員会） 一ノ関敏昭（若美町立潟西中学校）
5～12月	長寿学園「グレート・アカデミー平成」 （この年で最後）
6～11月	あきた県民カレッジ （秋田県生涯学習センター）〔あきた未来学コース〕開設
10月3日	生涯学習センターフェア「生涯学習者のつどいーいきいきトピア・2000ー」 （～10月9日）
10月5日	秋田県生涯学習フェスティバル （秋田市文化会館） ・〔オープニング行事・記念講演〕「あったかく生きる」草村礼子（女優） 秋田県生涯学習30周年、秋田県生涯学習奨励員協議会結成25周年、秋田県生涯学習センター開所20周年を記念して「生涯学習奨励員研究大会」を開催



▲生涯学習フェスティバル
祝賀会で挨拶する寺田知事
▶〔チラシ〕あきた県民カレッジ
〈あきた学専修コース・あきた未来学コース〉



〔パンフレット〕あきた学びピア・21ガイド（県及び市町村で開催される学習講座一覧）▲

◀〔学習手帳〕グレートアカデミー平成

〈コラムーあの日あの時〉自主企画事業「よみがえる大館弁」(抄) 大館市生涯学習奨励員協議会

大館市生涯学習フェスティバルにおける生涯学習奨励員の役割は、いつの頃からか展示作品の監視等、補助的な役割ばかりに。早い話「マンネリ化」。この打破のため、平成12年9月30日・10月1日のフェスティバルでは「よみがえる大館弁」公開講座を実施した。

市民に大館弁の川柳の募集を呼びかけ、89編が集まった。厳正な審査と結果は、5名の奨励員の選者以外には徹底的に秘され、講座当日市民に発表された。以下はほんの一例。

- ・ばばたちが きゃどさねまって サンバ見る（お婆さんたちが道路に座ってサンバを見る）
- ・からぼやみ ひとのことだば よぐしゃべる（怠け者に限って他人の悪口はよく言う）
- ・がちゃみぎさ ハイヒールはえで おきゃたばば

（ハイヒールを履いて、しゃなりしゃなりと歩いてたお婆さんが水たまりで転倒した）
作品はいずれも抱腹絶倒の名作ばかり。選者の発表の度に、会場は笑いの渦に包まれた。

秋田県生涯学習奨励員協議会『平成12年度研修報告書 生涯学習奨励員活動事例集』（2001年）

平成13年度 [平成13年(2001) 4月1日～平成14年3月31日]

月 日	事 項
4～12月	日本語学習支援事業 ・日本語ボランティア養成校講座(大館市、秋田市、大曲市) ・日本語指導者研修会(鷹巣町、秋田市、横手市) ・日本語教室(秋田市、能代市、横手市、大館市、湯沢市、鹿角市、小坂町、鷹巣町、比内町、森吉町、田代町、合川町、上小阿仁村、二ツ井町、藤里町、八郎潟町、天王町、仁賀保町、象潟町、稲川町、雄勝町、羽後町、皆瀬村、十文字町、本荘由利地区、大曲仙北地区) 24市町村、2地区
4～2月	IT(情報通信技術)講習 (秋田県生涯学習センター) ・パソコン・インターネットに関する基礎技能習得の機会を提供
5月23日	秋田県生涯学習奨励員協議会総会・研修会 (秋田県生涯学習センター) ・[シンポジウム]「2001年 心づくり 人づくりー青少年の育成と生涯学習ー」 ・[コーディネーター] 西宮陽助(県生涯学習奨励員協議会常任理事) ・[シンポジスト] 木村安子(小坂町教育委員会)、相馬力美(八郎潟青年異業種交流会メビウス)、石橋正則(角館企画集団トライアングル)
6～12月	あきた県民カレッジ (秋田県生涯学習センター)
6月9日	・[講演]「自然を感じて暮らそう」高木美保(女優) ・「あきた県民カレッジ」学びのボランティア募集開始
6月29日	秋田県生涯学習奨励員新任奨励員研修会 (秋田県生涯学習センター) ・[事例発表]「我が町の奨励員活動」高橋節夫(鹿角市生涯学習奨励員)、三浦 昌(由利町生涯学習奨励員)、川越トシ(山内村生涯教育奨励員)
9月22日～30日	秋田県生涯学習フェスティバル (能代市文化会館、能代市中央公民館他) ・[シンポジウム]「社会の変化に対応した奨励員活動のあり方」 ・[コーディネーター] 石川久一(秋田県生涯学習奨励員協議会副会長) ・[シンポジスト] 佐々木伸一(県教育庁中央教育事務所社会教育主事)、佐藤哲朗(平鹿町生涯学習奨励員)、鈴木正幸(合川町生涯学習奨励員) ・[講演]「ドラマと人間」ジェームス三木(脚本家)
9月22日～30日	生涯学習センターフェア～いきいきトピア・2001～ (秋田県生涯学習センター他) ・[生涯学習創作交流展][アクティブパパー父親のワークショップ] 他
平成13年度	夢スペース! スクールサポートモデル事業 (新規事業) ・小学校の余裕教室にサポートセンターを開設し、子どもと地域住民との交流活動を通して、子どもたちの豊かな人間性を育み、地域に開かれた学校づくりを目指す事業 ・十和田、桂城、鶴形、大潟、川添、矢島、大曲、醍醐、三関の各小学校にサポートセンター開設、コーディネーター配置、ふれ合い交流サポート活動の実施

〈コラムーあの日あの時〉さあ!「男塾」へ(抄)三浦愛子(男鹿市教育委員会)

「愛ちゃん! 男だけの講座って何もないよな!」嘆きにも似た上司の一言に私の心は熱く燃える。企画したのは「男塾」。

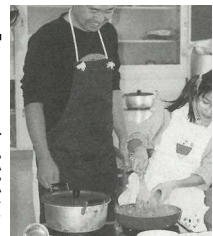
「楽しんで学習してみませんか」をテーマに「人生講話・お酒の話・男の更年期・料理講習」等、気軽に参加できる内容に。私の甘い勧誘やら脅迫やらで、40～70代の40人近い男性が集まった。

開講式。異様な雰囲気の中で体中から汗が噴き出そうになったことを覚えている。しかし、学習を重ねるうち、塾生同士のコミュニケーションが増え、講座の雰囲気も上々に。

プログラム作りを工夫し、女性に比べ学習意欲が低いと思われる男性を、もっと参加させましょう。

秋田県生涯学習センター『学びピア21』8(2002年3月)

▶「アクティブパパー交流事業」親子クッキング教室



▲ 男鹿市「男塾」料理講習

第2章 年 表

平成14年度 [平成14年(2002) 4月1日～平成15年3月31日]

月 日	事 項
4～12月	日本語学習支援事業 ・日本語ボランティア養成校講座（鷹巣町、八郎潟町、本荘市） ・日本語指導者研修会（秋田県生涯学習センター） ・日本語教室 27市町村、2地区
5～2月	縄文ゆとり工房 （秋田県生涯学習センター）（最終年）
6～12月	地域教育力・体験活動等推進事業 〈新規事業〉[おやじ変身！講座]（各少年自然の家）他 ・地域で子どもを育てる環境を充実するため、関係機関団体と協議会を組織し、支援センターを設置。体験活動を支援する成人グループを育成
6～3月	あきた県民カレッジ （秋田県生涯学習センター） ・[マナビィ・スタッフ養成研修]〈新規〉 学習者の学習成果を社会に還元するため、学習支援者（マナビィ・スタッフ）を育成し、学ぶ者が学ぶ者を支える取組を開始 ・[カレッジ・ゆめ・ねっと事業]〈新規〉 地域の生活・福祉・産業等身近なテーマについて、地域住民が作り上げる国際交流について学ぶ講座（合川町、羽後町、小坂町、千畑町で実施）
7月7日	生涯学習ボランティア・ホームページ作成講座 〈新規事業〉（秋田県生涯学習センター）
7月29日～	あきたセカンドスクール推進事業 〈新規事業〉（各少年自然の家） ・教育施設のセカンドスクールの利用推進事業にPA（プロジェクト・アドベンチャー）を導入
10月26日・27日	秋田県生涯学習フェスティバル （本荘文化会館、本荘市勤労青少年ホーム他） ・[フォーラム]「国際交流異文化理解ーみんなでつくるわが町ー」 ・[コーディネーター] ネザムトデノフ・ヴィクトル（秋田貿易振興会顧問） ・[パネリスト] 金子勇子（秋田県国際交流を進める女性の会）、成田道胤（合川町日中友好協会長）、深澤 誠（千畑町生涯学習奨励員）
平成14年度	あきた県庁出前講座 〈新規事業〉 ・県民の要請に応じ、県職員が担当分野の講師となって出向き、郷土学習・生涯学習の機会となる情報を提供する



▲ 平成12～14年度「縄文ゆとり工房」県生涯学習センター地下1階は作業場と展示場に



▲ [チラシ] プロジェクトアドベンチャー

〈コラムー現代史への招待〉「生涯学習に関する県民の意識と活動の実態調査」

- ・「生涯学習」という言葉を聞いたことがある。男性59.2%、女性56.8%
- ・学習内容は？男性ー①スポーツ・娯楽、②パソコン、③歴史・民俗・考古、園芸・ガーデニング等
女性ー①スポーツ・娯楽、②手芸・編み物・洋裁・和裁、③音楽・芸能
- ・学習方法は？男性ー①グループ等学習会、②公的機関の講座、③自宅
女性ー①公的機関の講座、②グループ等学習会、③自宅
- * 男性ー読書やインターネットを利用した学習が多い。
女性ー民間教育機関による講座、企業等が行う研修・講座に参加しての学習が男性より多い。

秋田県生涯学習センター『平成14年度 調査研究事業報告書』（2003年）

平成15年度 [平成15年(2003) 4月1日～平成16年3月31日]

月 日	事 項
4～3月	日本語学習支援事業 ・日本語ボランティア養成校講座(八竜町、仁賀保町、湯沢市) ・日本語指導者研修会(秋田県生涯学習センター) ・日本語教室(秋田市、能代市、横手市、大館市、男鹿市、湯沢市、鹿角市、小坂町、鷹巣町、森吉町、田代町、合川町、上小阿仁村、二ツ井町、藤里町、八竜町、八郎潟町、天王町、象潟町、十文字町、稲川町、雄勝町、羽後町、皆瀬村、雄物川町、本荘由利地区、大曲仙北地区) 25市町村、2地区
5月22日	秋田県生涯学習奨励員協議会総会・研修会 (秋田県生涯学習センター) ・[シンポジウム]「県民の読書活動を推進するために」 ・[コーディネーター] 櫻田博憲(県教育庁生涯学習課) ・[シンポジスト] 石郷岡栄子(能代市立図書館) 布施美和(読み聞かせボランティア「ハッピーマザー」) 石渡力造(東由利町生涯学習奨励員協議会)
5～12月	あきた県民カレッジ (秋田県生涯学習センター) ・県北・県南地区に学習拠点を拡大。各地区で開講式と記念講演を実施
5～12月	地域で育てる子ども体験活動推進事業 (新規事業) [おやじ変身!講座の開催][子ども変身!体験活動グループ支援事業] 他
5月～	県民読書活動総合推進事業 (新規事業) ・平成14年度に策定された「県民読書活動推進計画」に沿って、県民の読書活動を支援する体制整備を図る事業 ・秋田県立図書館内に秋田県子ども読書支援センター設置(毎週水～土曜日) 他
11月1日 ～3日	秋田県生涯学習フェスティバル (湯沢文化会館、湯沢雄勝広域交流センター他) [生涯学習奨励員研究大会公開フォーラム] 「生涯学習社会における新たな地域・学習活動の展開ーボランティア・NPOの団体の役割ー」 ・[コーディネーター] 高城憲子(南部市民活動サポートセンター) ・[パネラー] 高橋岩五郎(岩崎NPO)、沼倉 充(秋田県南パソコン支援市民ネット) 俵谷裕子(秋田まごころネットワーク) [講演]「笑いのある人生」桂 ヨネスケ(落語家) 他
12月24日	秋田県生涯学習審議会、教育長へ答申「県民の学習成果を指導者等として生かす方策について」

〈コラムーあの日あの時〉たった今を生き抜く(抄) 工藤光夫(鹿角市生涯学習奨励員)

生涯学習を云々するとき、畑の地主である84歳のお婆さんの生きる姿を思い起こす。一緒に農作業をしていて驚くのは、22歳年下の私と変わらない仕事量。身体の上の心の強靱さ、旺盛な好奇心、自然には逆らえないとの達観、そして他人や周りを頼らない姿勢である。

大きな虫眼鏡で新聞を読み、読書をする。政治・経済・教育・宗教・社会事象等飽くことのない知識欲には唖然とする。彼女の精神的視点の大きさは、やむことのない正義感。この世の悪と不公平・理不尽さには特に厳しい。

畑仕事のかたわら、お婆さんから自然と人生を教わる。お婆さんは、毎日が楽しくて仕方がない、明日が待ち遠しいという。お婆さんがよく口にするのは「冬来たりなば、春遠からじ」。84年の年齢と風雪に耐えてきた重み。それでもなお天から授かった、生命ある限り、尽きるその瞬間まで生ききる精一杯の努力。そして常に人生を楽しもうとする生き方に、私は毎日学ばせていただいている。

鹿角市生涯学習奨励員協議会・鹿角市生涯学習推進本部『平成13・14年度 生涯学習奨励員 活動の歩み』(2003年)

平成16年度 [平成16年(2004) 4月1日～平成17年3月31日]

月 日	事 項
4月29日	秋田県立博物館リニューアル・オープン
4～3月	あきた県民カレッジ（秋田県生涯学習センター）
5月15日	・中央キャンパス開講式（県生涯学習センター）〔記念講演〕高田 斉（気象予報士）
5月19日	秋田県生涯学習奨励員協議会総会・研修会（秋田県生涯学習センター） ・〔講演〕「笑いと健康―アナウンサーから見た世相あれこれ―」上野泰夫（ABS秋田放送）
7月1日	秋田県生涯学習奨励員新任奨励員研修会「新任者スキルアップセミナー」（秋田県生涯学習センター） ・〔講話〕「住民の学習活動を活発にするために」原 義彦（秋田大学）
7～2月	地域で進める親子国際理解推進事業〈新規事業〉（23市町村の公民館・学校） ・週末・放課後の子どもたちの活動の選択肢を広げる「国際理解チャレンジクラブ」を開講し、国際化に対応できる子どもたちの育成を図る事業 青少年の居場所づくり事業〈新規事業〉ジョイナス ・社会問題「キレる17歳」に対応し、青少年の居場所「ゆうスペース」を設置
10月30日 11月2日	秋田県生涯学習フェスティバル（男鹿市民文化会館）（～11月3日） 〔秋田県生涯学習奨励員研究大会〕（生涯学習フェスティバルオープニング行事） ・〔テーマ〕「広域化する地域住民の学習ニーズへの対応はどうあればよいか」 ・〔コーディネーター〕棟方宏一（首都圏大曲会） ・〔シンポジスト〕佐藤 稔（秋田大学）、小山善愛（男鹿市菅江真澄研究会） 小野鐵雄（首都圏男鹿の会） ・〔講演〕「私の出会ったありがとう」吉川精一（アナウンサー・歌手）他
11月29日	ふるさとボランティア交流会（秋田県生涯学習センター） ・ボランティアに関わる人々が日頃の活動や在り方等について語り合う会 ・〔鼎談〕「ふるさとからの情報発信」高貝秀子（国際交流をすすめる女性の会）他



▲ 秋田県立博物館リニューアル工事オウギハクジラ骨格標本搬入



▲ 秋田県立博物館リニューアル

〈コラム―あの日あの時〉生涯学習を推進する指導者としての10のポイント+2

平成16年7月1日、新任奨励員研修会において、秋田大学の原 義彦助教授は生涯学習を推進する指導者の12項目を話している。

- ①生涯学習のまちづくりの一役を。 ②教育委員会に対して積極的に意見を述べたり、積極的に具申、建議等を行う。 ③青少年の育成に関わる活動に参加したり、それに関わる団体等と密接に連携し、それらに対して意見を述べる。 ④気負いのないように。
- ⑤自分の得意な分野を生かそうという心。 ⑥一緒に学ぶという思いで。
- ⑦学習する人のためでもあり、また自分のためでもあるという思い。 ⑧個人としての生涯学習の推進。 ⑨時には得意でない分野の学習も心がける。 ⑩情報化に対応するためマルチメディアの活用に関わる。 ⑪学習方法としてアクティブ・ラーニングを目指す。 ⑫地域の生涯学習の推進に役立っていることの自覚と自信をもつ。

秋田県生涯学習奨励員協議会『研修事業・調査研究事業報告書―平成16年度のあゆみ―』（2005年）

平成17年度 [平成17年（2005）4月1日～平成18年3月31日]

月 日	事 項
5月26日	秋田県生涯学習奨励員協議会総会・研修会（秋田県生涯学習センター） ・[講演]「ことばは魔術師」塩田耕一（AKT秋田テレビ）
5月19日 ・20日	秋田県新任生涯学習・社会教育関係者研修（秋田県生涯学習センター） ・[講義・演習]「地域活性化の方法」清水英男（聖徳大学）他
5～3月	あきた県民カレッジ（秋田県生涯学習センター） ・[マナビスタッフアクション事業] この年で最後
10月28日	秋田県生涯学習・社会教育関係者レベルアップ研修（秋田県生涯学習センター） ・[パネルディスカッション] 行政と民間・教育機関等がつくる新しい学習機会の在り方について ・[コーディネーター] 原 義彦（秋田大学） ・[パネリスト] 小西久兵衛（県生涯学習奨励員協議会）、阿部之義（県社会教育委員連絡協議会）、長谷山洋文（県公民館連合会）、高橋浩子（県中央地区社会教育主事連絡協議会）
1月27日	秋田県生涯学習・社会教育研究大会（秋田県生涯学習センター他） ・[シンポジウム]「市町村合併後の生涯学習の推進について」 ・[コーディネーター] 柏谷 至（青森大学） ・[シンポジスト] 土方和行（一関市教育委員会）、荒樋 豊（秋田県立大学短期大学部） 小西知子（あきたNPOコアセンター）
2月6日 平成17年度	秋田県生涯学習審議会、教育長へ報告「元気な秋田を創る生涯学習の振興について」 青少年の居場所づくり事業 ・青少年を対象に、多様な体験活動等に取り組む居場所づくりを行う事業 ・[体験活動推進フォーラム][体験活動青少年ボランティア養成講座] 連携ボランティア活動推進事業〈新規事業〉 ・相互に支え合う地域社会の実現を目指し、地域におけるボランティア活動を推進する事業 ・[高校生対象事業][市町村ぐるみ事業][ボランティア活動支援センター機能]

〈コラムーあの日あの時〉国際理解チャレンジクラブ

国際理解チャレンジクラブは「地域で進める親子国際理解推進事業」として、平成16年度から3か年にわたり、県内各市町村の公民館・学校で実施された。クラブの指導員は、それぞれの地域の外国籍住民等で、参加対象者は、幼児～小学生とその保護者。

ゲーム感覚で学ぶ外国語会話、指導員の出身国の料理体験、さらに、当時はまだ認知度が高くなかった「ハロウィーン体験」等のプログラムがあり、毎回参加者を楽しませた。

平成17・18年度には、全県のクラブ員が一堂に集い「BIG PARTY」が開かれた。

参加者は、平成16年度は14,573人、17年度は8,499人、18年度は6,394人だった。



▲左から「ランチにトライ!」（16年度秋田市）、「韓国料理づくりに挑戦」（16年度八竜町）、「ハロウィーンの準備をしよう」（17年度横手市大雄）、「英語であそぼう!」（17年度能代市）、「英語であそぼDAY」（18年度大仙市仙北）

秋田県生涯学習センター『国際理解チャレンジクラブ実施報告書』（2005～2007年度）

第 2 章 年 表

平成18年度 [平成18年（2006） 4 月 1 日～平成19年 3 月31日]

月 日	事 項
4 月28日	あきた文学資料館開館（秋田市中通）
6～11月	元気な母ちゃん・父ちゃん子育て支援事業〈新規事業〉（7 教育機関） ・地域の大人が、子どもの体験活動や自然体験活動への支援を通して交流を深め、地域全体が元気になる活動を促進する事業
7～12月	パパママキッズゼミ〈新規事業〉（秋田県生涯学習センター） ・保護者と子どもで行う体験的な活動や遊びを通して、学ぶ楽しさ、喜び、達成感を実感し、学習への関心・意欲を高める事業 [音楽活動] [野外活動] [創作活動] 他
10月29日	地域で進める親子国際理解推進事業「国際理解チャレンジクラブ BIG PARTY」(生涯学習センター) ・県内各市町村のチャレンジクラブが集まり「ソング&ダンスで友好拡大」
11月24日	秋田県生涯学習・社会教育関係者レベルアップ研修（秋田県生涯学習センター） ・[パネルディスカッション]「地域社会の活性化に向けての取組上の課題について」 ・[コーディネーター] 藤田昇治（弘前大学） ・[パネリスト] 竹下博英（秋田県生涯学習奨励員協議会）、中野 正（湯沢市社会教育委員の会） 味水美喜夫（横手市立黒川公民館）、相原信孝（三種町八竜教育振興室）他
1 月26日	秋田県生涯学習・社会教育研究大会（秋田県児童会館） ・[講演]「地域の経済・観光振興、文化振興をめざして」佐藤 強（仙北市観光課） ・[シンポジウム]「地域おこしから見た生涯学習の推進について」 ・[コーディネーター] 高橋則行（秋田魁新報社） ・[シンポジスト] 平野庫太郎（秋田公立美術工芸短期大学）、笹田和夫（青森県総合社会教育センター）、関宮治良（古都ひらいずみガイドの会）
平成18年度	フレッシュあきたゼミ〈新規事業〉 ・県の教育機関が有する機能を生かした学習機会を提供することにより、社会的要請や県民の学習ニーズに応える事業 [セラピー環境ゼミ] [発展日中友好ゼミ] 他 なまはげキャンプ（秋田県青少年交流センター） ・対人関係に悩む青少年を対象に、少年自然の家等を拠点にした体験活動と宿泊交流を行う事業。6泊7日のメインキャンプ2回、1～3泊のキャンプを5回実施。 青少年の居場所づくり事業 ・青少年の居場所「ゆうスペース」を大館市・大仙市にも設置



◀ あきた文学資料館
開館記念式典



◀ なまはげキャンプ
竜ヶ原湿原から鳥海
山を望む



◀ 「チラシ」ゆうスペース
―ス花火庵（大仙市）

〈コラムー現代史への招待〉60年ぶりの「教育基本法」の改正

平成18年12月22日「教育基本法」が改正され施行された。その第3条には「生涯学習の理念」が掲げられた。

国民一人一人が、自己の人格を磨き、豊かな人生を送ることができるよう、その生涯にわたって、あらゆる機会に、あらゆる場所において学習することができ、その成果を適切に生かすことのできる社会の実現が図られなければならない。

新たな「教育基本法」施行をうけて、本県では平成23年9月に「秋田県生涯学習ビジョン」、10月に「あきたの教育振興に関する基本計画」が策定されていくことになる。

平成19年度 [平成19年（2007）4月1日～平成20年3月31日]

月 日	事 項
5月24日	秋田県生涯学習奨励員協議会総会・研修会（秋田県生涯学習センター） ・[講演]「秋田の元気は地域から」伊藤綾子（ABS秋田放送）
7月1日	あきた白神体験センター開所
1月25日	秋田県生涯学習・社会教育研究大会（秋田県生涯学習センター） ・[シンポジウム]「秋田県の活性化のための実践活動から」 ・[コーディネーター] 松田道雄（東北芸術工科大学） ・[シンポジスト] 笹尾千草（ココラボラトリー）、高橋淳一（ヤートセ秋田祭実行委員会）、大高孝雄（八峰町社会教育委員の会）
3月1日	あきた県民カレッジ [最終講座]「石川好の『あきた学』－地方再生と生涯学習への提言－」石川 好（前秋田公立美術工芸短期大学長）
平成19年度	放課後子ども教育推進事業〈新規事業〉 ・学校の余裕教室等を活用し、交流活動や体験活動等の取組を実施して、放課後や週末の安全・安心な居場所づくりを推進する事業 青少年を取り巻く有害環境対策推進事業〈新規事業〉 ・PTAや青少年健全育成団体と連携し、有害図書の区分陳列やインターネットの有害サイト等に対する意識啓発を実施

▶あきた白神体験センター活動の様子



〈コラムー現代史への招待〉「知の循環型社会」

平成20年2月19日、中央教育審議会は「新しい時代を切り拓く生涯学習の振興方策について～知の循環型社会の構築を目指して～」を答申した。「知の循環型社会」とは、学びを通して得た知識や経験を他者と共有し、活動の中で生じた課題を解決することで得た知識を学びに生かすという「循環」がさらなる「創造」を生み出し、社会全体が発展していくというものである。

答申では、社会全体の教育力の向上のために、家庭・学校・地域が連携するための仕組みづくりが必要であるとしている。

〈コラムーあの日あの時〉「ボランティアから見た秋田わか杉国体」(抄) 中村恵美子（秋田市体育指導員）

第62回秋田わか杉国体・第7回わか杉大会が間もなく開催されます。

思い起こせば昭和36年に秋田で開催された通称「まごころ国体」のとき、私は中学生。この時は民泊主体の大会で、我が家でも東京都の青年バスケットボールの選手を受け入れました。背の高い2人の選手は鴨居をくぐる時、頭をすくめていた姿が今でも心に残っております。母は、婦人会の人たちと食事の献立等到大変苦勞をしておりました。

大会後も、父が亡くなるまで年賀状のやりとりを続けておりました。

私たちボランティアは、全国から訪れる選手皆様に「まごころと笑顔」を忘れずに、心からのおもてなしを、また、多くの県民の方々は、各会場に出向き熱い声援を送って頂きたいと思います。がんばれ！秋田の選手たち。

秋田市教育委員会生涯学習室『あしたの風』65（2007年9月）

第2章 年 表

平成20年度 [平成20年（2008）4月1日～平成21年3月31日]

月 日	事 項
4月14日 受け入れ 開始	あきたリフレッシュ学園事業〈新規事業〉 （北秋田市合川学童研修センター内） ・様々なストレスを抱え、休養を必要としている小・中学生を対象に、大自然の中で、自らが選択した学習、自然体験、農業体験、読書等の活動を通して、心身のリフレッシュを図る場と機会を提供する事業、宿泊型のフリースクール
5月24日	秋田県生涯学習奨励員協議会総会・研修会 （秋田県生涯学習センター） [講演]「色彩心理―色が心に与える影響―」渡辺公美子（カラーコーディネーター）
6月5日 ・6日	秋田県生涯学習・社会教育関係者基礎研修 （秋田県生涯学習センター） ・[講義・演習]「地域力を高める学習プログラム―まち育てのススメ―」北原啓司（弘前大学） ・[講話]「社会教育の在り方について」大井光弘（県社会教育委員連絡協議会） ・[分科会]「生涯学習推進の事例と課題」「美郷町奨励員の試み」田口稲和（美郷町生涯学習奨励員）
6月28日	美の国カレッジ〈新規事業〉 （秋田県生涯学習センター） ・総合開講式 [講演]「東北ルネッサンスとあきた学」赤坂憲雄（東北芸術工科大学） ・[あきた学総合コース][美の国キッズ&ユース・カレッジ][指導者養成コース]他
6～3月	学校支援地域本部事業〈新規事業〉 （大館市、大潟村、由利本荘市、大仙市、東成瀬村） ・地域の教育力を学校教育へ活用することにより、地域全体で子どもを育む環境を整備する事業 ・[学校支援地域本部の設置][地域コーディネーターの配置][学校支援ボランティアの活動]
7月15日	秋田県生涯学習審議会、教育委員会へ提言 「今後の本県の生涯学習推進に向けて～地域づくりのための人材活用を目指して～」
11月21日	秋田県生涯学習・社会教育関係者レベルアップ研修 （秋田県生涯学習センター） ・[講話・演習]「生涯学習によるまちづくりの視点と課題」柏谷 至（秋田大学）
1月30日	秋田県生涯学習・社会教育研究大会 （秋田県児童会館） ・[講話]「地域づくりにおける生涯学習・社会教育の役割」原 義彦（秋田大学） ・[シンポジウム]「地域で子どもを守り育てるために、今、大人ができること」 ・[コーディネーター] 佐藤 潔（県教育庁生涯学習課） ・[ゲスト] 佐藤久美子（県社会教育委員）、新川泰道（藤里町生涯学習奨励員） 小林 均（神宮寺小学校おやじの会） ・[記念講演]「子どもを本気で守るには…大人の責任」竹花 豊（「おやじ日本」）
平成20年度	秋田県家庭教育支援制度「我が社は家庭教育応援団」〈新規事業〉 ・家庭教育支援に取り組む企業や団体を「応援団企業」として登録するもの



▲ [チラシ] 平成20年度
有害情報対策推進事業



▲ [ポスター] 平成20年度
我が社は家庭教育応援団



▲ [リーフレット]（2種類）
学校支援地域本部事業



平成21年度 [平成21年（2009）4月1日～平成22年3月31日]

月 日	事 項
5月21日	秋田県生涯学習奨励員協議会総会・研修会（秋田県生涯学習センター） ・[講演]「明るく生きること」今立善子（能代ミュージカルキッズ）
4～2月	美の国カレッジ（秋田県生涯学習センター） ・[あきた学専門講座]「あきた現代学」のテーマは「秋田で元気に！」 講座のキーワードで「元気」が使用されたのは、これが最初
8月	「生涯学習推進要綱（改定）」施行
11月21日	秋田県生涯学習奨励員協議会活動発表研究会（秋田県生涯学習センター） ・[シンポジウム]「世代間をつないでまなびの輪を広げるために」 ・[コーディネーター] 沢村正志（県教育庁生涯学習課） ・[シンポジスト] 菅原優子（藤里町生涯学習奨励員）、大井光弘（秋田市生涯学習奨励員）、千葉 薫（仙北市生涯学習奨励員）、戸坂昌成（秋田県生涯学習センター） ・[活動発表] 鈴木 樹（大仙市生涯学習奨励員）、川口仁人（鹿角市生涯教育奨励員） 大潟村奨励員協議会各氏
1月29日	秋田県生涯学習・社会教育研究大会（秋田県生涯学習センター） ・[講演]「先人鈴木健次郎の地域づくり」大西康之（全国社会教育連合会） ・[シンポジウム]「我ら地域の仕掛け人ー生涯学習によるまちづくり活動ー」 ・[コーディネーター] 原 義彦（秋田大学） ・[シンポジスト] 小林幹子（上小阿仁村教育委員）、佐藤久一（秋田市雄和公民館） 中村裕子（美郷町生涯学習奨励員）
平成21年度	青少年の居場所「ゆうスペースAKITA」（秋田県青少年交流センター） ・秋田県青少年交流センター（ユースパル）に、青少年の居場所「ゆうスペース」の運営を移管



▲ ゆうスペースAKITA



▲ 体験メニューのパラグライダー
▲ [リーフレット] あきたリフレッシュ学園（平成20年度事業開始）

〈コラムーあの日あの時〉「生涯学習推進要綱」改定のポイント

平成20年6月、社会教育法・図書館法・博物館法の改正により、『個人の要望』と『社会の要請』との調和に留意した学習支援に加え、学習成果の活用や学校及び家庭教育への支援が示された。これを踏まえ、県では、平成21年8月「生涯学習推進要綱」を改定し、施行した。改定のポイントは次の4点である。

- 1 地域住民の主体性・自主性を尊重し、学習者や地域の側に立った生涯学習の推進。
- 2 「個人の要望」と「社会の要請」、両者のバランスのとれた生涯学習推進体制の整備。
- 3 各世代への学習機会の提供と世代間交流の推進。
- 4 NPO、大学、民間教育事業等と連携し、地域に根ざした人材育成の重視。

要綱には、これからの時代は学校・家庭・地域が連携し、生涯学習の成果を生かしつつ、社会全体の教育力を向上させる観点が盛り込まれている。

秋田県教育庁生涯学習課『平成22年度 秋田県の生涯学習・文化財保護-施策の概要』（2010年）

平成22年度 [平成22年(2010) 4月1日～平成23年3月31日]

月 日	事 項
5月13日	秋田県生涯学習奨励員協議会総会・研修会（秋田県生涯学習センター） ・[講演]「児童会館は小さな“地域”」後藤節子（NPO法人あきた子どもネット）
5～2月	美の国カレッジ（秋田県生涯学習センター） ・[あきた学専門講座]「あきた現代学」のテーマ「秋田の可能性にかける！」
7月30日	秋田県生涯学習審議会、提言「生涯学習推進に向けた組織等の在り方について」
11月20日	秋田県生涯学習奨励員協議会活動発表研究会兼フォーラム「再考 秋田の生涯学習40年」 （秋田県生涯学習センター） ・秋田県生涯学習センター開所30周年、秋田県生涯学習奨励員協議会35年記念 ・[シンポジウム]「学校・家庭・地域の連携と奨励員活動」 ・[コーディネーター] 佐々木伸一（県生涯学習センター） ・[シンポジスト] 小杉山久義（能代市生涯学習奨励員）、草皆宏子（五城目町生涯学習奨励員）、菊地則子（横手市生涯学習奨励員）
1月15日	父親の参画による地域教育力活性化事業〈新規事業〉全県交流大会（秋田県生涯学習センター） ・地域の教育力を生かした子どもの健やかな育ちのため、父親が主体となった活動グループの立ち上げと、ネットワーク化を支援
2月3日	秋田県生涯学習・社会教育研究大会（秋田県生涯学習センター） ・[講義]「学校・家庭・地域の連携に向けた社会教育関係者の役割」鈴木眞理（青山学院大学） ・[シンポジウム]「実践から探る学校・家庭・地域の連携のあり方」 ・[コーディネーター] 鈴木眞理（青山学院大学） ・[シンポジスト] 小笠原重夫（大仙市立太田南小学校）、山崎 純（NPO法人子育て応援Seed）、奥田実里（北秋田市生涯学習奨励員）
3月	秋田県生涯学習審議会、中間答申「今後の生涯学習施設の在り方についてー生涯学習センター本館の在り方についてー」

〈コラムーあの日あの時〉「来し方行く末ー『土崎神明社祭の曳山行事』ー」（抄）

山田亮悦（秋田市生涯学習奨励員）

亡き母が90代半ばの頃、体調を崩して近くの病院で診てもらったことがある。

医師が「そろそろ祭りだね」と言うと、途端に身を乗り出し「7月20日・21日だんす。私の生まれ育った穀保町には、昼前に各町内の曳山が道路脇に全て収まる所だから、見物人たちで狭い町はごった返し…です。連れ合いが勤める港湾関係の曳子や見物がてらの客が、次々と家に押しかけるものだから『まず一杯』と茶碗酒にカスベを添えて出すのに大わらわだったス。中には知らない顔も混じっていたが…」と小さく笑った。

これまで培ってきた祭りの喜びを一気に喋る母に、私は港祭りの一コマコマが大事に織り込まれた故郷の原風景に母は生かされているのだと強く感じた。

平成9年、国の重要無形民俗文化財に指定された「土崎神明社祭の曳山行事」と子どもたちとの関わりについて考えてみる。子どもたちの出番は手踊りの練習から始まる。近くの街区公園に園児や小学生が集まり、指導者がみっちり教え込む。7月20日、主役である子どもたちが曳山をゆったりと引きながら、所々で手踊りの成果を披露する。私には子どもたちが、祭りを軸に、日を追って一つにまとまっていく様子が見える。上級生が下の子へ飲み物を配ったり、細々と面倒を見るほほえましい光景を目にすると、来年もまた、一人でも多くの子どもたちが、祭りや曳山に携われる優しい環境を作ってやらねばならないと思う。そして、子どもたちには、母のように、港祭りの楽しい思い出を一杯蓄えてもらいたいものだ。

秋田市教育委員会生涯学習室『あしたの風』71（2010年9月）

平成23年度 [平成23年（2011）4月1日～平成24年3月31日]

月 日	事 項
5月18日	秋田県生涯学習奨励員協議会総会・研修会（秋田県生涯学習センター） [講演]「苦と向き合う・苦に寄り添うー東日本大震災の被災地で学んだことー」 新川泰道（ビハーク秋田）
5～2月	美の国カレッジ（秋田県生涯学習センター） ・[あきた学専門講座]に「THE スペシャリスト」コース開設、秋田ノーザンハピネッツ、限界集落、ちんどん屋の講話他
6月2日 ・3日	秋田県生涯学習・社会教育関係者基礎研修（秋田県生涯学習センター） [職務別研修]「生涯学習・社会教育関係者に求められること」生涯学習課 [講義]「地域の教育力向上のために」原 義彦（秋田大学）
9月	「秋田県生涯学習ビジョン」策定
1月26日	秋田県生涯学習・社会教育研究大会（秋田県生涯学習センター） ・[講義]「生涯学習・社会教育と地域の教育力」長谷川幸介（茨城大学） ・[事例発表]「地域の教育力向上のための3つのヒント」 ・[進行・指導助言] 長谷川幸介（茨城大学） ・[発表者]「山本公民館チョコボラ・プロジェクト『山本公民館まつり』」 田村征孝（三種町教育委員会） 「サポートDAY事業『手作り紙芝居公演』」荒川セイ子（大仙市生涯学習奨励員） 『『にかほ探検隊』について』相馬 央（にかほ市教育委員会）
3月	秋田県生涯学習審議会、答申「今後の生涯学習施設の在り方について～市町村生涯学習施設の在り方及び県からの支援について～」

「お父さんパワー」で
元気いっぱい!!

お父さん、
出番です!



このリーフレットは、秋田県生涯学習推進本部が平成22年度に策定した「父親の参画による地域教育力活性化事業」について紹介しています。お父さんパワーを一緒に発揮する子ども達、地域教育力の向上が期待されます。お父さんパワーを一緒に発揮する子ども達、地域教育力の向上が期待されます。事業は2011年度から実施されます。このリーフレットの活用を、新しいグループ学習や子育て、活動の企画に活用するためのヒントとして提供いたします。



〔リーフレット〕父親の参画による地域教育力活性化事業と活動の様子

〈コラムーあの日あの時〉「秋田県生涯学習ビジョン」の策定

平成23年9月、秋田県生涯学習推進本部は本県の生涯学習の将来像を明らかにし、今後の方向性を見定めるものとして「秋田県生涯学習ビジョン」を策定した。

ビジョンでは「知と行動が結び付いたクリエイティブな循環型社会」の実現のため、全ての県民が「行動人（こうどうびと）」になり、活力あふれる秋田をつくる原動力になることを掲げている。「行動人」とは、秋田県の生涯学習が目指す人間像であり、自ら学んで身に付けた知識や技能を生かして行動する人を意味している。しあわせを肌で感じることでできる「グロス・ハピネスにあふれる秋田」を築くため、本県の生涯学習は「全ての県民が行動人になる」ことを目標とし、「行動人」紹介ホームページを作成し、ネットワークづくりへの挑戦が始められた。

秋田県生涯学習推進本部「秋田県生涯学習ビジョン」（『平成24年度 秋田県の生涯学習・文化財保護』2012年）

第2章 年 表

平成24年度 [平成24年(2012) 4月1日～平成25年3月31日]

月 日	事 項
5月16日	秋田県生涯学習奨励員協議会総会・研修会（秋田県生涯学習センター） ・[講演]「心豊かに生きる」宗泉寺（男鹿市脇本）住職 長谷川恵光
6～12月	美の国アクティブカレッジ〈新規事業〉 ・[あいLOVEあきた]「有明コロシウムへの挑戦」中村和雄（秋田ノーザンハピネッツ）他 ・「美の国アクティブカレッジ」は、知と行動が結び付いたクリエイティブな循環型社会の実現に向け、県民が秋田のよさや秋田を動かしている人を知り、行動の原動力となるような学びの機会を広域的に提供することを目的に開講
7月21日 ・22日	秋田県立美術館暫定開館（秋田市中通） ・[講演]「生き残りをかけて街づくりを考える」安藤忠雄（建築家）
7～10月	わんぱく・3ぱく・体験活動プロジェクト〈新規事業〉（各少年自然の家・あきた白神体験センター）
10月	行動人紹介ホームページ開設（秋田県生涯学習センター）
11月20日	秋田県生涯学習奨励員協議会活動発表研究会（秋田県生涯学習センター） ・[シンポジウム]「みんなが元気になる奨励員活動」 ・[コーディネーター] 若狭祐樹（県教育庁生涯学習課） ・[シンポジスト] 成田友加子（北秋田市生涯学習奨励員）、小川 勇（にかほ市生涯学習奨励員）、高橋かおる（東成瀬村生涯学習奨励員）
1月29日	秋田県生涯学習・社会教育研究大会（秋田県生涯学習センター） ・[事例研究]「古くて新しいつなぎ役」大原慶子（八郎潟町生涯学習奨励員） 「大人のための読み聞かせ」藤原淳子（由利本荘市生涯学習奨励員） ・[講義]「だがしや楽校に学ぶ地域の教育力の在り方」松田道雄（東北芸術工科大学）

〈コラムー現代史への招待〉「引き出せあきたのそこちから！」

平成24年（2012）11月、秋田県教育委員会・秋田県PTA連合会は、リーフレット「引き出せあきたのそこちから！」を作成した。

リーフレットは、朝食摂取状況と学力調査の平均正答率、朝食・午前6時半前起床・午後10時前就寝についての秋田県と全国との比較を明示し、本県児童の規則正しい生活が確かな学力を支えていることを伝えている。

リーフレットには、米田 進教育長の、秋田県の全ての子どもたちにあてたメッセージを載せている。

学び場はどこにでもある。

ひとが集うところ、そこは、いつであっても、どこであっても全て学習の場となる。

秋田の子どもたちに言いたい、学び場は、今君がいるところ！

また、学ぶ営みは一生継続していくべきものだ。

「学ぶ力を身に付けること」は「確かな学力を身に付けること」。

秋田の将来は君たちのものだ！ The future is yours！

Learning is treasure that will follow its owner everywhere.

学ぶことは、いつもその人についていく一生の財産である。〈中国のことわざ〉

Anyone who stops learning is old, whether at twenty or eighty.

20歳だろうが80歳だろうが、学ぶことを止めたなら老いてしまう。〈ヘンリー・フォード〉



秋田県教育委員会・秋田県PTA連合会

秋田県教育委員会・秋田県PTA連合会 [リーフレット] 引き出せあきたのそこちから！（2012年11月）

平成25年度 [平成25年（2013）4月1日～平成26年3月31日]

月 日	事 項
4～12月	美の国アクティブカレッジ（秋田県生涯学習センター） ・センターキャンパスは「地域史を学ぶ楽しみ」「北方史の中で秋田を考える」等5講座 ・地域キャンパスは、八峰町・小坂町・羽後町・仙北市角館町・秋田市新屋で実施 ・無料キャンパスは「あいLOVEあきた」「秋田の文学とその背景を尋ねる」等6講座 ・「徳川林政史研究所公開講座」（主催徳川林政史研究所・共催秋田県公文書館）を実施
9月28日	秋田県立美術館開館（秋田市中通）
11月20日	秋田県生涯学習奨励員協議会活動発表研究会（秋田県生涯学習センター） ・「講話」「長寿社会におけるいきいき生涯学習について」 昆 麻里子（県教育庁生涯学習課） ・「シンポジウム」 テーマ「みんなが元気になる奨励員活動」 ・「コーディネーター」 吉井和人（県教育庁生涯学習課） ・「シンポジスト」 成田喜輝（小坂町教育委員会）、西村栄子（男鹿市生涯学習奨励員） 日野より子（横手市生涯学習奨励員）
1月31日	秋田県生涯学習・社会教育研究大会（秋田県生涯学習センター） ・「講義・演習」「『学び合い』の生涯学習・社会教育」 佐々木英和（宇都宮大学） ・「パネルディスカッション」 事例研究 ・「子どもたちの喜ぶ姿を楽しみにーみさと世話好きマイスターの取組ー」 佐藤健良（みさと世話好きマイスター・美郷町生涯学習奨励員） ・「秋田市中央地域における生涯学習奨励員（公民館運営協力員）の取組」 加藤長二郎（秋田市生涯学習奨励員・中央公民館運営協力委員会） ・「学びの成果を地域活性化に生かす！」 高橋 英（秋田県生涯教育センター）
平成25年度	秋田県生涯学習審議会、協議事項 ・「学ぶ機会の提供と学んだことを生かす環境づくりについて」 ・「ライフステージに応じた生涯学習の在り方について」



▲《秋田の行事》旧県立美術館取り外し作業
新県立美術館への搬入作業



◀ 秋田県立
美術館
開館セレ
モニー

〈コラムー現代史への招待〉

わんぱく・3ぱく・体験活動プロジェクト



平成24～28年度に実施された宿泊体験活動型事業。大館少年自然の家から岩手山、岩城少年自然の家から鳥海山、保呂羽少年自然の家から乳頭山に登山するなど、参加者のわんぱくぶりに磨きがかかる多彩なメニューが用意されていた。保護者からは「（子どもが）キャンプから帰ってからは、朝早く起きようになり、びっくりしています！」という声が寄せられている。

〔チラシ〕平成25年度わんぱく・3ぱく・体験活動プロジェクト

第2章 年 表

平成26年度 [平成26年(2014) 4月1日～平成27年3月31日]

月 日	事 項
4～3月 4月26日	美の国アクティブカレッジ (秋田県生涯学習センター) ・[講演]「変わる世界 変わらぬ世界」佐竹敬久 (秋田県知事) ・あきたふるさと学講座、センターキャンパス、連携講座、地域講座 (能代市・男鹿市・横手市で実施、地域講座はこの年で最後)、地域マイスター養成講座 (この年で最後) に区分して開講
6月12日	秋田県生涯学習・社会教育関係職員基礎講座 (秋田県生涯学習センター) ・[講義・演習]「学びの成果を行動に、そして協働へ」原 義彦 (秋田大学)
11月20日	秋田県生涯学習奨励員活動発表研究会 (兼) 行動人実践交流会 (秋田県生涯学習センター) [活動発表]「みんな元気な行動人」 ・「山本地区読み聞かせグループ『あのねのネ』実演と活動記録」三浦重一 (三種町) ・「小さな一歩から始まる生涯学習活動」佐々木金明 (潟上市) ・「郷土芸能の復活と花のある街づくりの取組」門脇トキヨ (仙北市)
12月17日	秋田県生涯学習・社会教育研究大会 ・[基調講演]「今、生涯学習・社会教育に期待されるもの」新妻二男 (岩手大学) ・[事例研究会]「学びと行動の成果を協働に結び付け、地域や社会の発展につなげる方策を探る」 ・「現実から学び合い、地域の活力を育てる」金 一治 (羽後町堀回コミュニティ推進委員会) ・「地域の公民館を地域住民が盛り上げる」齋藤久美子 (由利本荘市西目公民館長) ・『ゆるい』からの変革 わたしが考えるマチのこれから 板谷大樹 (まちおこしNPO「オモシエナ」)
平成26年度	秋田県生涯学習審議会、協議事項 ・「地域における生涯学習の推進について～地域活性化に向けた取組や課題」 ・「県・市町村・各種団体等の協働について～相互の連携強化と県の役割～」 わくわく土曜教室 (新規事業) (8市町村23教室) ・土曜日等に地域の社会教育施設等を活用し、土曜教育コーディネーターや土曜教育推進員等、地域住民の参画を得て、学習活動やスポーツ・交流活動等の取組を推進し、地域全体による土曜日の教育支援体制の構築を図る事業

第54回 秋田県仙北地域公民館大会
第37回 大仙仙北地区生涯学習推進研究大会

期 日 平成26年12月2日(火)
 会 場 神岡農村環境改善センター



主催 秋田県仙北地域公民館連合会、大仙仙北地区生涯学習推進員協議会
 後援 秋田県公民館連合会、秋田県生涯学習推進本部、秋田県生涯学習奨励員協議会
 大仙市、大仙市教育委員会

〈コラムーあの日あの時〉第54回秋田県仙北地域公民館大会・
 第37回大仙仙北地区生涯学習推進研究大会

12月2日、神岡農村環境改善センター (大仙市) で開かれた大会のテーマは「公民館活動が地域を創る」。

笹元嘉辰氏 (前大仙市教育長) は「人間力」を育む家庭と地域づくりについて講演。煙山光成氏 (美郷町公民館長) は「公民館での行動人増員計画」と題し、事業の基本は楽しさと喜びを感じることにあり、『行動人』を増やして、幸せな人を増やしていこう」と話をされた。

最後に千鳥会 (神岡)・なんがい釜坂おけさ会 (南外)・秋田飴売り節保存会 (神岡) によるステージ発表で、会場を大いに盛り上げた。

[パンフレット] 第54回秋田県仙北地域公民館大会・第37回大仙仙北地区生涯学習推進研究大会

平成27年度 [平成27年（2015）4月1日～平成28年3月31日]

月 日	事 項
4～3月	あきたスマートカレッジ〈新規事業〉（秋田県生涯学習センター） ・「スマート」の語には「活発な・賢明な・粋な・高性能な」等の意味があり、「より高い見識を身に付けて、自らの生活や行動に生かすための学びの場」という願いが込められている
4月25日	・[講演]「女性が輝く地域社会づくり」斉藤永吉（北都銀行）
11月18日	秋田県生涯学習奨励員協議会活動発表研究会（秋田県生涯学習センター） ・[活動発表]「奨励員の歩みー広がる学び、深まる絆ー」 ・「鹿角民話の会『どっとはらえ』の活動内容と実演」山口京子（鹿角市生涯学習奨励員） ・「凧、凧、揚げがれ！ー郷土の誇り『湯沢凧』の継承に向けた取組ー」 小野育朗（湯沢市生涯学習奨励員） ・「朗読劇 やけどした神様」半田俊毅（井川町生涯学習奨励員） ・[講演]「ユーラシア横断バイク旅 世界を見る」石井清人（八郎潟町）
12月11日	秋田県生涯学習・社会教育研究大会(兼)行動人交流集会（秋田県生涯学習センター） ・[基調講演]「学び・行動・協働が地域の元気を創る」清國祐二（香川大学） ・[パネルディスカッション] 「学びと行動の成果を協働に結び付け『ふるさと秋田の元気を創る』方策を探る」 ・[コーディネーター] 清國祐二（香川大学） ・[パネリスト] 高橋かおる（東成瀬村社会教育委員）、伊藤良孝（にかほ市生涯学習奨励員）、能登祐子（能代市上町自治会）
平成27年度	秋田県生涯学習審議会、協議事項 ・「知と行動が結び付いたクリエイティブな循環型社会を実現するために～」 オール秋田で「体験の風をおこそう」運動推進事業 ・青少年団体や青少年教育施設による実行委員会で実施。全県域で子どもの体験活動を推進する気運を高めた



▲ 秋田県生涯学習・社会教育研究大会(兼)行動人交流集会

▶「リーフレット」
体験の風をおこそう



〈コラムーあの日あの時〉「秋田県生涯学習奨励員協議会設立40周年 活動発表研究会」

11月18日（水）に開催された秋田県生涯学習奨励員協議会活動発表研究会は、午前中は3地区の活動発表、午後は講演会が行われ、同会設立40周年の節目にふさわしい内容だった。

始めに、山口京子氏（鹿角市生涯学習奨励員）が鹿角民話の会「どっとはらえ」の活動内容を実演を交えて発表。続いて、小野育朗氏（湯沢市生涯学習奨励員）が、湯沢凧の継承に向けた取組を発表。最後に半田俊毅氏を始めとする井川町生涯学習奨励員11名が、朗読劇「やけどした神様」を発表した。

午後は、石井清人氏（八郎潟町）が、平成24年にロシアからボルトガルをバイクで横断した体験について、各国の文化や風習を交えながら話をされた。夢に向かって行動すること、挑戦することの大切さを改めて感じる講演内容だった。

秋田県教育庁生涯学習課『生涯学習課だより』95（2015年12月）

平成28年度 [平成28年（2016）4月1日～平成29年3月31日]

月 日	事 項
4～3月	あきたスマートカレッジ（秋田県生涯学習センター） ・あきたふるさと学講座、あきた教養講座、学びスタート講座、連携講座、地域活性化支援講座（鹿角市・五城目町で実施）、県立学校開放講座を開講
11月16日	秋田県生涯学習奨励員協議会活動発表研究会（秋田県生涯学習センター） ・[活動発表]「地域とつながる奨励員活動ー行動人が生む次の活動ー」 ・「詐欺にあわないためにーあなただったらどうするー」由利本荘市 劇団「溝」 ・「生涯現役！笑顔で行動人」能代市生涯学習奨励員 保坂悦子 ・「増田の蔵の日ー中学生ボランティア活動ー」佐藤かおり（横手市生涯学習奨励員）
12月9日	秋田県生涯学習・社会教育研究大会(兼)行動人交流集会（秋田県生涯学習センター） ・[基調講演]「地域で幸せになるためにー『幸せ』は『仕合わせ』!?ー」野島正也（文教大学） ・[事例研究]「学び・行動・協働の推進による地域の活性化を目指して」 ・「高校生まちづくり会議「HACHI」の取組について」松田亜里紗（大館市中央公民館） ・「小学校におけるクラブ活動の支援について」佐々木由美子（由利本荘市社会教育委員） ・「音楽イベント『おもフェス・おもしえす2016』の取組について」小笠原大輔（おもしえす実行委員会）
平成28年度	秋田で学ぼう！教育留学推進事業〈新規事業〉（北秋田市合川学童研修センター） ・秋田の魅力を発信し、交流人口の増加や家族ぐるみでの定住促進につなげるため、本県の強みである「豊かな教育資産」を生かして、県外の小・中学生が秋田での学びを目的に来県する教育留学の取組を推進する事業、受け入れ業務は北秋田市に委託 親育ち！家庭教育支援ネットワークづくり事業〈新規事業〉（補助金活用市町村2市） ・市町村が家庭教育チームで支援するための人材養成・チームの体制づくりを支援 地域未来塾事業〈新規事業〉（補助金活用3市町村3教室） ・放課後、公民館等で、大学生や民間教育事業者等が、中学生を対象にICTを活用した学習支援を実施
平成28～ 29年度	秋田県生涯学習審議会、協議事項 『行動人』を、人づくり、地域づくりに生かす取組について ・「学び人」を育成する取り組みについて～様々な学習機会の提供 ・『行動人』を、地域で生かす取り組みについて～『行動人』の活用方法について～

〈コラムーあの日あの時〉あきたスマートカレッジ [あいLOVEあきた]「秋田に暮らしてみようことー私たちは元外国人、そして今は秋田人ー」(抄)小林久江（ブラジル出身）・保坂チャーリーナ（フィリピン出身）

「これまで母国の文化を紹介する講演は行ったことがある」というお二方から、苦労話を話していただいた。見た目は日本人、言葉は流暢な日系三世の小林さん。秋田銀行の前で「秋田銀行はどこですか」と町の人に尋ね、怪しがられたと。漢字が苦手だったことが原因。結婚当初は何もかも新鮮だった保坂さん。次第に家にいるのが苦痛に。一念発起して日本語で自動車運転免許を取得し、現在は県国際交流協会サポーターに登録、小学校で外国語活動支援員として活躍されているとのこと。苦労話を通しての文化理解。講座の最後は、お二方を囲んでのフリートーク。とても有意義なひとときになった。



「秋田県生涯学習センターだより」（2016年7月）

平成29年度 [平成29年(2017) 4月1日～平成30年3月31日]

月 日	事 項
4～3月 4月29日	あきたスマートカレッジ（秋田県生涯学習センター） ・[講演]「内から見た秋田・外から見た秋田」板東久美子（元副知事） ・まなびスタート講座に【行動人基礎コース】生涯学習のススメ、あきた教養講座に【行動人実践コース】地方創生ファシリテーターになろうを開講。受講者が地方創生に役立つ自主企画を設定し、運営することを学ぶ
4～10月	“心を育てる”セカンドスクール推進事業〈新規事業〉 ・道徳の教科化、新学習指導要領の実施、いじめや人間関係の希薄化といった課題に対応するため、少年自然の家を拠点に「プロジェクトアドベンチャー（PA）」を活用し「道徳」に着目した少年自然の家によるPA利用促進を図る事業を開始
7月13日	秋田県生涯学習奨励員基礎講座（秋田県教育委員会と共催） ・[講話]「私なりの生涯学習との関わり方」加賀谷ユウ子（秋田市生涯学習奨励員協議会）
11月16日	秋田県生涯学習奨励員協議会活動発表研究会（秋田県生涯学習センター） ・[活動発表]「地域とつながる奨励員活動ー学んだ成果を地域のためにー」 ・「針と糸が大好きな仲間たちと出会えた幸せ」近江美保子（大仙市生涯学習奨励員） ・「唇に歌を！心に太陽を！」三浦研二（秋田市生涯学習奨励員） ・「冬の星空」岩館裕章（鹿角市生涯学習奨励員）
12月7日	秋田県生涯学習・社会教育研究大会(兼)行動人交流集会（秋田県生涯学習センター） ・[基調講演]「人づくり・地域づくりと社会教育」坂本 登（全国社会教育委員連合会） ・[事例研究]「持続可能な地域づくりを担う人づくりの実践事例」 河田美智子（アミュージングサポート「あ☆そ☆ぶ」）、鈴木健二（潟上市立天王公民館） 細井才智（県立横手高等学校定時制・青雲館）
平成29年度	あきたわくわく未来ゼミ〈新規事業〉（補助金活用市町村12市町村38教室） ・放課後や土曜日、長期休業中に全ての子どもたち（小・中・高）を対象に、大学生や教員OBをはじめとした多様な地域人材による学習支援を実施する事業
	コミュニティ・スクール導入促進〈新規事業〉 ・県立学校への導入を支援するため、組織や体制づくりを行う事業
	秋田県生涯学習審議会、提言 「行動人を、人づくり、地域づくりに生かす取組について～様々な学習機会の提供と行動人の育成と活用方策～」

＜コラムーあの日あの時＞秋田県生涯学習・社会教育研究大会(兼)行動人交流集会

12月7日開催の「秋田県生涯学習・社会教育研究大会」では、全県から約60名の「行動人」の方々と「あきたスマートカレッジ」の講師の方々による13件の展示ブースが出展。

40分間の交流タイムでは、工夫を凝らした各ブースの前で、参加者が賑やかに会話が交わっていた。中には「全部回れなかったのが残念」の声も。

参加者からは「行動人の活動から刺激を受け、自分も何かしてみたいと思った」「秋田の未来に明るい可能性を感じた」等の感想が寄せられた。

「秋田県生涯学習センターだより」（2018年1月）



平成30年度 [平成30年(2018) 4月1日～平成31年3月31日]

月 日	事 項
4～3月 4月28日	あきたスマートカレッジ（秋田県生涯学習センター） ・[講演]「秋田から発信する医療の知ー大腸がんでは死なせないー」工藤進英（昭和大学） ・行動人講座、あきたふるさと講座、官・民・学連携講座、特別企画、県立学校開放講座を開講 ・行動人講座は[【基礎コース】生涯学習のススメ]と[【実践コース】点訳ボランティアになろう]（県生涯学習センターが視覚障害者を支援するボランティア育成に取り組んだのは、この講座が初）
5月15日	秋田県生涯学習奨励員協議会総会・研修会（秋田県生涯学習センター）
7月12日	秋田県生涯学習奨励員基礎講座（秋田県教育委員会と共催） ・[講話]「地域に根ざした奨励員活動」長尾歌子（県生涯学習奨励員協議会副会長）
10月24日	秋田県生涯学習奨励員協議会活動発表研究会（秋田県生涯学習センター） ・[活動発表]「笑顔を育てる奨励員活動ー学んだ成果を見えるかたちにー」 ・「大館の学校支援活動と宮城県気仙沼市との交流について」野村裕子（大館市生涯学習奨励員） ・「大潟村生涯学習奨励員のこれまでの活動について」福田政美（大潟村生涯学習奨励員） ・「赤ずきんちゃんからのメッセージ」高橋みつえ（羽後町生涯学習奨励員）
11月6日	秋田県生涯学習・社会教育研究大会(兼)行動人交流集会（秋田県生涯学習センター） ・[基調講演]「学校・家庭・地域の連携と地域の教育資源の再発見」金藤ふゆ子（文教大学） ・[事例研究]「地域の教育資源の再発見」山本百合子（八峰町おはなしの会「かもめ」） 天野厚助（男鹿市「男鹿のウミウシ」制作者）、菊地 智（秋田県生涯学習センター）
平成30年度以降	秋田県生涯学習審議会の審議内容が、秋田県社会教育委員の会議と重複することが多くなったことから、秋田県生涯学習審議会委員は、秋田県社会教育委員が兼任することとなり、審議会は必要に応じての開催となる

〈コラムーあの日あの時〉北秋地区生涯学習奨励員協議会「冬の笑学校 2019」

平成31年1月9日（水）北秋地区生涯学習奨励員協議会は、北秋田市民ふれあいプラザを会場に、大人と子どものサポートDAY事業2019「冬の笑学校（しょうがっこう）」を開催。

1校時 [図工]「木のペンダントをつくろう！」講師：小林孝生（AAREA）

2校時 [家庭] 調理実習「カレーきりたんぽ鍋風」をつくろう 講師：大城戸ツヤ子
給 食「カレーきりたんぽ鍋風」を食べよう

昼休み ホールで自由に過ごしましょう

3校時 [総合学習] 目指せちびっ子ポリス！「鑑識」にチャレンジ 講師：北秋田警察署員

4校時 [音楽] リズムで遊ぼう！ミュージック・ケア 講師：成田友加子

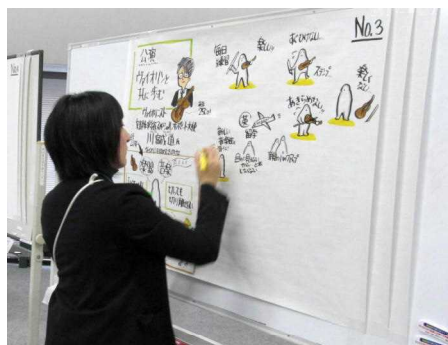
校訓は「明るく、楽しく、元気よく」。上小阿仁村、北秋田市の小学生38名が参加。ユニークな取組はマスコミにも取り上げられ、好評を博した。



◀「冬の笑学校」の様子
二校時・三校時・四校時

平成31年度・令和元年度 [平成31年(2019)4月1日～令和2年3月31日]

月 日	事 項
4～12月	あきたスマートカレッジ ・行動人講座、あきたふるさと講座、特別企画講座、官・民・学連携講座、県立学校開放講座を開講 ・行動人講座は【基礎コース】生涯学習のススメ【実践コース】地域・家庭応援隊エアンベで活動しよう【ユースコース】思考力向上キャンプ(高校生対象)の3コースに拡充
7月11日	秋田県生涯学習奨励員基礎講座 (秋田県生涯学習センター) ・[講話]「生涯学習奨励員としてのあれこれ」菅原優子(藤里町生涯学習奨励員)
10月24日	秋田県生涯学習奨励員協議会活動発表研究会 (秋田県生涯学習センター) ・「ああいう取組もいいものだねー見る・知る・つなぐ!奨励員」成田友加子(北秋田市生涯学習奨励員) ・「地域に根ざした奨励員活動」大原慶子(八郎潟町生涯学習奨励員) ・「伝え続けたい寒天の魅力ー寒天使からのメッセージ」照井 律(美郷町生涯学習奨励員)
11月15日	秋田県生涯学習・社会教育研究大会(兼)行動人交流集会 (秋田県生涯学習センター) ・[講演]「30年後の社会教育を見据えて」佐藤智子(東北大学)
12月5日 ・6日	共に学び、生きる共生社会コンファレンス [主催:県教育委員会・文部科学省] (秋田県生涯学習センター) ・[公演]「ヴァイオリンと共に歩む」川島成道(文部科学省スペシャルサポート大使・ヴァイオリニスト) ・[基調講演]「障害者の生涯学習について考える」宮崎英憲(全国特別支援教育推進連盟理事長) ・[実践発表]引地達也(シャローム大学校長)・秋田大学教育文化学部附属特別支援学校高等部生徒 ・[分科会]「先進事例発表ー保護者の立場からー」NPO法人障がい児・者の学びを保障する会(東京都練馬区)・NPO法人障害者アクアレッシン・ミラクルスイミー(秋田県秋田市)他



▲「共に学び、生きる共生社会コンファレンス」の様子。川島成道氏の演奏(左)。平元美沙緒氏によるグラフィックレコーディング(中央)。閉会行事の北秋田市障害者生活支援センターささえの皆様による発表(右)

〈替え歌〉「奨励員時代」

(原曲「青春時代」一九七六年)
井川町生涯学習奨励員協議会
(二〇一八年)

(1)

退職までの 半年で
趣味を探せと 言うけれど
仕事飲み会 忙しい
どこで探せば いいのだろう

生涯学習 知ってますか
街の身近な 公民館

いつでもだれでも チャレンジャー
あなたも今日から 行動人

(2)

子どももようやく 手をはなれ
自分の時間も 増えました
文化活動 してみたい
何にすぎれば いいのだろう

※生涯学習 知ってますか
笑顔で広がる 学びの輪
いつでもだれでも チャレンジャー
あなたも今日から 奨励員
(※くりかえし)

令和 2 年度 [令和 2 年 (2020) 4 月 1 日～令和 3 年 3 月 31 日]

月 日	事 項
4～12月	あきたスマートカレッジ
6 月 4 日	秋田県生涯学習奨励員協議会理事会 (秋田県生涯学習センター)
8 月 18 日	秋田県生涯学習奨励員協議会会長会議 (秋田県生涯学習センター)
11月13日	秋田県生涯学習・社会教育研究大会 [記念大会] (秋田県生涯学習センター) ・秋田県生涯学習推進50周年・秋田県生涯学習奨励員協議会結成45周年・秋田県生涯学習センター開所40周年を記念して開催

* 新型コロナウイルス感染症の影響で、多くの行事が延期・中止を余儀なくされた

◆ 秋田県生涯学習・社会教育研究大会 [記念大会] サテライト会場の様子



▲ 横手会場



▲ 小坂会場



▲ 上小阿仁会場



▲ 仙北会場



▲ 大館会場



▲ 東成瀬会場



▲ 藤里会場



▲ 八郎潟会場



▲ 美郷会場

〈コラムー現代史への招待〉新型コロナウイルス感染症対策とリモート [記念大会] 開催決定の経緯

- ・ 3 月 26 日、「秋田県新型コロナウイルス感染症対策本部」設置。
- ・ 4 月 8 日、「秋田県新型コロナウイルス感染症対策の基本的対処方針」により、密閉空間、密集場所、密接場面という 3 つの条件 (「三つの密」) が同時に重なるような集まりについて自粛の協力を強く求めるとともに、全国的大規模な催物等の開催については、中止又は延期することを含め、主催者による慎重な対応を求めることに。
- ・ 5 月下旬、感染症拡大のリスクにより、式典と記念行事 (講演) は、インターネット配信、市町村の協力により、サテライト会場で放映。祝賀会は開催しないことに。

編集後記

本冊子を編纂する上で心掛けたことは、同時代の資料に目を通した上で、歴史像を構築することでした。まず足を向けたのは、秋田県生涯学習センター。2階書庫には、この50年間に刊行された様々な小冊子、報告書、広報物、アルバム等が整然と保管されていました。活字からは先人の熱い思いが、アルバムに貼られた写真からは、生涯教育・生涯学習活動に参加する方々の真剣な表情が伝わってきました。

センター向かいの秋田県公文書館には、様々な式典で知事が読み上げた挨拶文が保存されています。驚くべきことに、小畑知事原稿には、ほとんど御自身で字句を修正した跡があります。読者諸氏におかれましては、ぜひ同館で実物資料を出納し、手に取ってご覧いただきたいと思います。式典の直前まで、知事が推敲に推敲を重ねていた様子を窺うことができます。

また、本冊子には、大仙市アーカイブズを始めとする各市町村関係者の皆様から御提供いただいた資料を可能な限り使用しました。

加えて、何より、本冊子が無事に上梓できましたのは、本県の生涯教育・生涯学習に携わってこられた多くの方々の御協力があったからに他なりません。

「東北の小さな県に、日本全国が瞠目するような新しい教育的風土をつくる」

時代がどのように変化しようとも、小畑知事が抱いた生涯教育・生涯学習推進の「志」「誇り」「情熱」は、いつまでも、もち続けたいものです。(畑中)

本冊子は、昭和45年、秋田県庁内に設置された「生涯教育研究チーム」の活動を起点とし、生涯学習・社会教育に関する本県及び市町村の行政施策を縦糸に、また、学習者として、学習ボランティアとして真摯に取り組んできた県民の声を横糸に編集したものです。

コストの関係から「100ページを目途として編集する」という当初の方針により、止むなく、外さざるを得なかった関係資料の少なくなかったことを付記しておきます。

関係者の皆様におかれては、今後の県・市町村生涯学習・社会教育関係職員の研修会や、生涯学習奨励員の研修会のテキストとして、本冊子を活用していただければ幸甚です。来し方を深く知る者こそ、確かな未来を語れるのです。

末筆ながら、執筆者の情熱に押され、「監修」という過分なる重責の任をなし終えたことに安堵しています。(武藤)

秋田県生涯学習50年史

発行日 令和3年(2021)3月

編集・発行 秋田県教育庁生涯学習課

〒010-8580 秋田市山王三丁目1番1号

電話 018-860-5183 FAX 018-860-5816



行けど行けど 果てしも見えぬ 花野かな